

ハ之ヲ各町村ニ平分スヘシ

第三十二條 投票立會人、開票立會人及選舉立會人ニハ地方長官ノ定ムル所ニ依リ職務ノ爲要スル費用ヲ給スルコトヲ得

前項ノ費用ハ府縣費及北海道地方費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三十三條 衆議院議員選舉法ニ於ケル直接國稅ノ種類左ノ如シ

一 地租

二 所得稅

所得稅法第三條第一項第二種ノ所得中無記名債券ノ所得ニ係ル所得稅ヲ除ク

三 營業稅

第三十四條 衆議院議員選舉法第一條ノ別表ニ於テ獨立ノ選舉區ト爲シタルモノヲ除クノ外市ハ從前屬シタル選舉區ニ包含スルモノトス

第三十五條 郡市ノ區域ニ屬セサル島嶼ニ於テハ開票區ハ島ノ區域ニ依ル

第三十六條 開票管理者、投票管理者及其ノ代理者故障アルトキハ上級官廳ハ臨時ニ官吏又ハ吏員ヲシテ其ノ事務ヲ管掌セシムルコトヲ得

第三十七條 衆議院議員選舉法第三條及第六條ノ規定ハ本令ニ之ヲ準用ス

第三十八條 北海道ノ札幌區、函館區及小樽區ニ於テハ衆議院議員選舉法其ノ他之ニ關スル法令中市トアルハ區、市長トアルハ區長、市役所トアルハ區役所ニ該當ス

●衆議院議員選舉法ニ依リ市町村外ニ於テ納ムル直接國稅證明ニ關スル件 明治三十四年十月 內務省令第二十七號

明治三十三年法律第七十三號衆議院議員選舉法第十九條ニ依リ選舉人ニ於テ納稅ノ届出ヲ爲ストキハ選舉人名簿ニ記載セラルヘキ納稅要件ニ付地租營業稅及所得稅法第三條第一項第三種ノ所得ニ係ル所得稅ヲ納ムルモノニ在テハ其ノ稅ヲ徵收スル行政廳ノ證明ヲ得所得稅法第三條第一項第二種ノ所得中記名債券ノ所得ニ係ル所得稅ヲ納ムル者ニ在テハ其ノ稅ヲ徵收スル公共團體若ハ組合又ハ銀行會社ノ證明ヲ得ルニトシテ要ス

前項證明ノ請求ヲ受ケタル行政廳公共團體若ハ組合又ハ銀行會社ハ遲滞ナク證明ヲ爲スヘシ

●衆議院議員選舉法第二十七條ニ依リ更ニ調製スル選舉人名簿ニ關スル件 明治三十四年十月 內務省令第二十八號

明治三十三年法律第七十三號衆議院議員選舉法第二十七條末項ノ選舉人名簿ノ調製及其ノ期日擬定ニ關スル期日期間等ハ地方長官之ヲ定ム

●貴族院令 明治二十二年二月 勅令第十一號

朕大日本帝國憲法ノ明文ニ依リ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院令ヲ發布ス此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院令

第一條 貴族院ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

一 皇族

二 公侯爵

第二條 衆議院議員選舉法ニ依リ市町村外ニ於テ納ムル直接國稅證明ニ關スル件 衆議院議員選舉法第二十七條ニ依リ更ニ調製スル選舉人名簿ニ關スル件 貴族院令

二十三年宮内省以テ第十號ヲ以テ之ヲ示ス



三 伯子男爵各、其ノ同爵中ヨリ選舉セラレタル者

四 國家ニ勤勞アリ又ハ學識アル者ヨリ特ニ勅任セラレタル者

五 各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者ノ中ヨリ一人ヲ互選シテ勅任セラレタル者

第二條 皇族ノ男子成年ニ達シタルトキハ議席ニ列ス

第三條 公侯爵ヲ有スル者滿二十五歳ニ達シタルトキハ議員タルヘシ

第四條 伯子男爵ヲ有スル者ニシテ滿二十五歳ニ達シ各、其ノ同爵ノ選ニ當リタル者ハ七箇年ノ任期ヲ以テ議員タルヘシ其ノ選舉ニ關ル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前項議員ノ數ハ伯子男爵各、總數ノ五分ノ一ヲ超過スヘカラス

第五條 國家ニ勤勞アリ又ハ學識アル滿三十歳以上ノ男子ニシテ勅任セラレタル者ハ終身議員タルヘシ

第六條 各府縣ニ於テ滿三十歳以上ノ男子ニシテ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者十人ノ中ヨリ一人ヲ互選シ其ノ選ニ當リ勅任セラレタル者ハ七箇年ノ任期ヲ以テ議員タルヘシ其ノ選舉ニ關ル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 國家ニ勤勞アリ又ハ學識アル者及各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者ヨリ勅任セラレタル議員ハ有爵議員ノ數ニ超過スルコトヲ得ス

第八條 貴族院ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ華族ノ特權ニ關ル條規ヲ議決ス

第九條 貴族院ハ其ノ議員ノ資格及選舉ニ關ル爭訟ヲ判決ス其ノ判決ニ關ル規則ハ貴族院ニ於テ之ヲ議定シ上奏シテ裁可ヲ請フヘシ

第十條 議員ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ勅命ヲ以テ之ヲ除名スヘシ

貴族院ニ於テ懲罰ニ由リ除名スヘキ者ハ議長ヨリ上奏シテ勅裁ヲ請フヘシ

除名セラレタル議員ハ更ニ勅許アルニ非サレハ再ヒ議員トナルコトヲ得ス

第十一條 議長副議長ハ議員中ヨリ七箇年ノ任期ヲ以テ勅任セララルヘシ

被選議員ニシテ議長又ハ副議長ノ任命ヲ受ケタルトキハ議員ノ任期間其ノ職ニ就クヘシ

第十二條 此ノ勅令ニ定ムルモノ、外ハ總テ議院法ノ條規ニ依ル

第十三條 將來此ノ勅令ノ條項ヲ改正シ又ハ増補スルトキハ貴族院ノ議決ヲ經ヘシ

● 貴族院伯子男爵議員選舉規則明治二十二年六月勅令第七十八號

朕極密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院伯子男爵議員選舉規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院伯子男爵議員選舉規則

第一條 伯子男爵ヲ有スル成年以上ノ者ハ各、其ノ同爵者ノ貴族院議員ヲ選舉ス

第二條 神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコトヲ得ス



第三條 左ノ項ノ一ニ觸ル、者ハ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

一 瘋癲白癡ノ者

二 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第四條 刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ選舉權ヲ行フコトヲ得ス及被選人タルコトヲ得ス

第五條 貴族院令第四條ニ依リ選ハルヘキ議員ノ數ハ選舉ヲ行フノ前勅命ヲ以テ之ヲ指定スヘシ

第六條 爵位局長官ハ選舉ノ期日ヨリ五十日前ニ選舉資格ヲ有スル伯子男爵ノ人名簿ヲ各別ニ編製シ選舉資格ヲ有スル同爵者ニ配付シ三十日前ニ之ヲ確定シテ各選舉管理者ニ交付スヘシ

確定期日ノ前ニ於テ新ニ資格ヲ得及回復シタル者アルトキハ之ヲ名簿ニ記入スヘシ

第七條 選舉ハ伯子男爵ノ選舉資格ヲ有スル者ヨリ各一人ノ選舉管理者ヲ互選シテ之ヲ管理セシム

選舉管理者ハ貴族院令第四條ニ依リ職員ノ更任アル毎ニ之ヲ改選スヘシ

選舉管理者ハ選舉及被選ノ權ヲ妨ケラル、コトナシ

第八條 各選舉管理者ハ選舉人ノ中ヨリ各其ノ同爵ノ選舉立會人三人以上ヲ指定シテ選舉會場ニ參會セシムヘシ

第九條 選舉ハ七月十日東京ニ於テ之ヲ行フ

第十條 選舉人ハ自ら選舉會場ニ至リ投票スヘシ

投票ハ被選人ノ爵姓名ヲ列記シ次ニ自己ノ爵姓名ヲ記載スヘシ

第十一條 選舉人東京府ノ外ニ居住シ又ハ疾病事故ニ因リ選舉會場ニ至ルコト能ハサルトキハ同爵中ノ他ノ選舉人ニ投票ヲ委託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ投票ヲ封緘シ其ノ表面ニ記名捺印シ委託ノ證據ト共ニ委託ヲ受クル者ニ送付スヘシ

第十二條 投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十三條 前數條ニ掲ケタル者ノ外選舉ニ關ル一切ノ規程ハ選舉資格ヲ有スル伯子男爵ノ協議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十四條 當選人確定シタルトキハ選舉管理者ハ其ノ爵姓名ヲ上奏シ併セテ貴族院議長ニ報告スヘシ

第十五條 選舉管理者ハ選舉明細書ヲ作り選舉ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ立會人ト共ニ署名捺印シ其ノ副本ヲ貴族院ニ送致スヘシ

第十六條 議員ニ關員ヲ生シタルトキハ議長ヨリ之ヲ上奏シ勅旨ヲ以テ補關選舉ヲ行フヘキコトヲ命シ及其ノ期日ヲ指定スヘシ

補關選舉ヲ行フノ手續ハ通常選舉ノ例ニ同シ

第十七條 補關議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル



第十八條 貴族院令第九條ニ依リ貴族院ニ出訴スルノ期限ハ貴族院開會ノ後十日以内トス  
第十九條 選舉ニ關ル費用ハ同爵者ノ支辨タルヘシ

●貴族院伯子男爵議員選舉規程明治二十三年五月

貴族院伯子男爵議員選舉規程目錄

第一章 選舉人名簿	第四章 選舉	第七章 補則
第二章 選舉管理者及立會人	第五章 當選人	
第三章 選舉會場	第六章 選舉會場取締	

貴族院伯子男爵議員選舉規程

第一章 選舉人名簿  
 第一條 凡テ選舉資格アル者選舉人名簿ニ於テ人名ノ脱漏又ハ誤載アルコトヲ發見シタルトキハ其理由書及證據ヲ具ヘテ選舉期日ヨリ三十五日目前爵位局長ニ申立テ其改正ヲ求ムルコトヲ得  
 第二條 爵位局長選舉人名簿ヲ確定シ又ハ貴族院ノ判決ニ依リ確定名簿ヲ改正シテ交付シタルトキハ選舉管理者直ニ之ヲ各選舉人ニ配付スヘシ

第二章 選舉管理者及立會人

第三條 選舉管理者選舉ハ選舉期日ヨリ四十日目前ニ於テ之ヲ爲スヘシ  
 選舉管理者ヲ選定スルハ投票ノ最多數ニ依ル若シ投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ取り同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム  
 第四條 選舉管理者選舉會場ハ華族會館トス其期日ハ同爵中在東京首席ノ者ヨリ期日十日目前各同爵者ニ通知スヘシ  
 第五條 選舉管理者選舉會場ノ整理ハ同爵中在東京首席ノ者ヲ爲シ又ハ首席者ノ指名シタル同爵者ヲ爲スヘシ  
 第六條 選舉管理者及立會人ハ正當ノ理由ナクシテ其任ヲ辭スルコトヲ得ス  
 第七條 選舉管理者當選シタルトキハ三日以内ニ同爵中在東京首席ノ者ヨリ貴族院議長及爵位局長ニ届出テ各同爵者ニ通知スヘシ  
 第八條 選舉管理者ヲ選舉セシ投票ハ選舉管理者任期ノ終ルマテ保存スヘシ  
 第九條 選舉管理者疾病其他事故アリテ開席スルトキハ順次ニ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ臨時選舉管理者ト定ム

選舉立會人疾病其他事故アリテ開席スルトキハ選舉管理者更ニ選舉立會人ヲ指定スヘシ

第三章 選舉會場

第十條 選舉會場ハ華族會館トス

第四章 選舉

第十一條 投票ハ午前七時ニ始メ正午十二時ニ終ル但シ選舉管理者ハ豫メ公告シテ時限ヲ變換スルコトヲ得  
 第十二條 投票函ハ每爵ニ之ヲ設備シ二重ノ蓋ヲ造リ二種ノ鑰ヲ設ケ其一ハ選舉管理者之ヲ管守シ其一ハ選舉立會人ノ内一人之ヲ管守スヘシ

第十三條 選舉管理者ハ投票ノ初ニ當リ選舉立會人ト共ニ封筒シタル選舉人ノ面番ニ於テ投票函ヲ開キ其空虛ナルコトヲ示スヘシ  
 第十四條 選舉人ハ選舉人名簿ノ對照ヲ經テ投票スヘシ  
 第十五條 投票用紙ハ選舉管理者其式ヲ定メ選舉期日前之ヲ各選舉人ニ交付スヘシ  
 第十六條 貴族院伯子男爵議員選舉規則第十一條ノ規定ニ依リ委託ヲ受ケタル選舉人ハ其誰狀ヲ選舉管理者ニ提出シ承認ヲ得タル後委託ノ投票ヲ投票函ニ投入スヘシ

第十七條 投票終ルノ時期ニ至リタルトキハ選舉管理者ハ其由ヲ告ケ投票函ヲ閉鎖スヘシ投票函閉鎖ノ後ハ總テ投票スルコトヲ許サス  
 第十八條 選舉管理者ハ選舉立會人ト共ニ投票函ヲ開キ投票ノ總數ト投票人ノ總數トヲ計算スヘシ若シ投票ト投票人トノ總數ニ差異ヲ生シタルトキハ其由ヲ選舉明細書ニ記載スヘシ

第十九條 總數ノ計算ヲ終リタルトキハ選舉管理者選舉立會人ト共ニ投票ヲ點檢スヘシ  
 第二十條 前二條ノ場合ニ於テ選舉人ハ參觀スルコトヲ得  
 第二十一條 左ニ掲グル投票ハ無効トス

- 一 選舉人名簿ニ記載ナキ者ノ投票
- 二 定式ノ用紙ヲ用非サルモノ
- 三 選舉人自己ノ爵姓名ヲ記載セサルモノ
- 四 資格ナキ被選人ノ爵姓名ヲ記載スルモノ但シ其別記中資格アル者ニ付テハ其効アルモノトス
- 五 假字脱字又ハ汚染塗抹毀損ニ依リ選舉人又ハ被選人ノ姓名ヲ認知スヘカラサルモノ但シ通常ノ假名字ヲ用ヒ又ハ假字脱字ニ

第二類 貴族院伯子男爵議員選舉規程



係ルモ明ニ其姓名ヲ認知スルコトヲ得ルモノハ此限ニ在ラス

六 貴族院伯子男爵議員選舉規則第十條第二項ニ規定シタル外他ノ文字ヲ記載シタルモノ但シ被選人ノ指名ヲ誤ラサル爲ニ其官位勲章住所附記シ又ハ敬稱ヲ用ヒザルモノハ此限ニ在ラス

七 貴族院伯子男爵議員選舉規則第十一條第二項ノ規定ニ依ラサル委託ノ投票

第二十二條 投票効力ノ有無ニ附キ疑義アルトキハ選舉立會人ノ意見ヲ開キ選舉管理者之ヲ決定ス此ノ決定ニ對シテハ選舉會場ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二十三條 投票ニ記載シタル人名其選舉スヘキ定員ヨリ多キトキハ其定員ニ超エタル人名ヲ末尾ヨリ除却スヘシ其選舉スヘキ定員ニ足ラザルトキハ現ニ記載シタルモノノミナ計算シ一人ノ姓名ヲ覆記シタルモノハ一人トシテ之ヲ計算スヘシ

第二十四條 投票ハ一箇年間選舉管理者之ヲ保存シ期限ヲ經過シタル後燬棄スヘシ

無効ノ投票ハ採録ナク其山ヲ選舉明細書ニ記載シ前項ノ期限ヲ經過シタル後燬棄スヘシ

第二十五條 選舉ニ關リ争訟アルトキハ前條ノ期限ヲ經過スルモ判決ニ至ルマテ其投票ヲ保存スヘシ

第五章 當選人

第二十六條 當選人定マリタルトキハ選舉管理者ハ直ニ當選人ニ通知書ヲ發シ及其姓名ヲ選舉人ニ報告スヘシ

第二十七條 當選人當選通知書ヲ受ケタルトキハ當選ヲ承諾スルヤ否ヲ其選舉管理者ニ届出スヘシ

第二十八條 當選人東京ニ在ル者ハ五日以内他ノ地方ニ在ル者ハ三十日以内ニ當選承諾ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ當選ヲ辭シタルモノト見做スヘシ其期限ハ當選通知書ヲ發シタル日ヨリ之ヲ起算ス

第二十九條 當選人ニシテ當選ヲ辭シ又ハ期限内ニ當選承諾ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ順次ニ投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人ト定ムヘシ但シ得票者既ニ盡キタルトキハ選舉管理者ハ再ヒ選舉ヲ行フヘシ

第三十條 當選人確定シタルトキハ選舉管理者ハ當選證書ヲ付與シ及選舉人ニ報告シ貴族院伯子男爵議員選舉規則第十四條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六章 選舉會場取締

第三十一條 選舉管理者ハ選舉會場ノ秩序ヲ保持スヘシ

第三十二條 選舉人ニ非サル者ハ選舉會場ニ入ルコトヲ許サス

第三十三條 選舉會場ニ於テハ一切ノ演說討論及喧嘩ニ涉リ又ハ他人ノ投票ヲ勸誘スルコトヲ禁ス

第三十四條 選舉會場ニ於テハ選舉管理者ノ命令ニ對シテ其異議ヲ申立ツルコトヲ得ス選舉會場ニ於テ秩序ヲ紊ル者アルトキハ選舉管理者ハ之ヲ警戒シ其命ニ從ハサルトキハ之ヲ選舉會場ノ外ニ退出セシムヘシ

第三十五條 選舉會場ノ外ニ退出セシメタル者ハ其投票ヲ爲サシムル爲ニ再ヒ選舉會場ニ呼入ル、コトヲ得

第三十六條 選舉ニ關ル費用ハ選舉管理者之ヲ報告シ貴族院伯子男爵議員選舉規則第十九條ニ依リ徵收スヘシ

第三十七條 此規程ニ關ル書式ハ別ニ之ヲ定ム

第三十八條 此規程ヲ改正又ハ増補セントスル者ハ毎屆選舉資格ヲ有スル十人以上ノ賛成者ヲ得テ在東京伯子男爵ノ各首席者ニ意見書ヲ提出シ三爵協議會ヲ開クヲ求ムルコトヲ得

(書式略)

●貴族院多額納稅者議員互選規則 明治二十二年六月 勅令第七十九號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院多額納稅者議員互選規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院多額納稅者議員互選規則

第一條 貴族院令第六條ニ依リ貴族院議員ヲ互選スル者ハ互選名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上

其ノ府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居シ多額ノ直接國稅ヲ納メ仍引續キ住居シ及納稅スル者タルヘシ

第二條 家督ニ由リ財産ヲ相續シタル者ハ其ノ財産ニ付前財產主ノ納稅額ヲ以テ其ノ納稅資格ニ

算入ス

第三條 神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ互選人タルコトヲ得ス



第四條 左ノ項ノ一ニ觸ル、者ハ互選人タルコトヲ得ス

一 瘋癲白癡ノ者

二 公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ停止中ノ者

三 禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

四 舊法ニ依リ懲役ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

五 賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

六 衆議院議員ノ選舉ニ關ル犯罪ニ依リ選舉權及被選舉權ノ停止中ノ者

第五條 陸海軍軍人ハ現役中互選人タルコトヲ得ス其ノ休職停職ニ在ル者亦同シ

第六條 刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ互選人タルコトヲ得ス

第七條 互選人選舉ニ關リ輕罪以上ノ罪ヲ犯シタルトキハ互選名簿ヨリ除名セラルヘシ

第八條 府縣知事ハ選舉ヲ行フノ年四月一日ヲ期トシ其ノ府縣ニ於テ互選資格ヲ有スル者十五人ノ名簿ヲ調製スヘシ

互選名簿ハ互選人ノ姓名、職業、身分、住所、生年月、土地或ハ工業商業ニ付納ムル所ノ直接

國稅ノ細別及總額並ニ納稅地ヲ記載スヘシ

第九條 納稅同額ノ者アルトキハ生年月ノ長者ヲ先ニシ同年月ノ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十條 府縣知事ハ四月二十日マテニ互選名簿ヲ各互選人ニ配付シ併セテ之ヲ管内ニ告示スヘシ

第十一條 互選資格ヲ得ヘキ者ニシテ自ラ互選名簿ニ記載セラレサルコトヲ發見シタルトキハ告示ノ後十五日以内ニ其理由書及證據ヲ具ヘテ府縣知事ニ申立ツルコトヲ得

凡テ互選資格ヲ得タル者ハ互選資格ヲ得ヘカラサル者ノ互選名簿ニ記載セラレタルコトヲ發見シタルトキハ前項ノ手續ニ依リ改正ヲ求ムルコトヲ得

期限ヲ經過シタル後申立ヲ爲スモ其ノ效ナシ

第十二條 府縣知事前條ノ申立ヲ受ケタルトキハ之ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ判定スヘシ判定ノ結果ニ依リ名簿ヲ改正シタルトキハ其ノ由ヲ關係人ニ通知シ併セテ管内ニ告示スヘシ

第十三條 互選名簿ハ六月一日ヲ以テ確定期限トス

第十四條 選舉ハ六月十日府縣廳ニ於テ之ヲ行ヒ府縣知事又ハ其ノ代理者之ヲ管理ス

第十五條 府縣知事ハ投票ノ時刻ヲ定メ遅クトモ選舉ノ期日ヨリ七日前ニ各互選人ニ通知書ヲ發スヘシ

第十六條 互選人ハ自ラ選舉會場ニ至リ投票スヘシ

投票ハ被選舉人ノ姓名ヲ記載シ次ニ自己ノ姓名ヲ記載スヘシ

第十七條 互選人疾病事故ニ因リ選舉會場ニ至ルコト能ハサルトキハ醫師ノ診斷書又ハ事由書ヲ具ヘ投票ヲ封緘シ其ノ表面ニ記名捺印シテ之ヲ他ノ互選人ニ委託スルコトヲ得

第十八條 投票終ルノ後選舉管理者ハ互選人ノ面前ニ於テ投票ヲ點檢シ其ノ結果ヲ告知スヘシ但シ當選人其ノ場ニ在ラサルトキハ文書ヲ以テ速ニ其ノ由ヲ本人ニ通知スヘシ



第十九條 投票效力ノ有無ニ付疑義アルトキハ選舉管理者之ヲ決定ス

第二十條 投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十一條 當選人ニシテ其ノ當選ヲ辭スルトキハ次ノ投票多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トスヘシ

當選人當選ヲ辭スルコトヲ得ルハ選舉ノ日ヨリ十日以内ニ限ル

第二十二條 當選人確定シタルトキハ府縣知事ハ當選人ノ資格及選舉ノ顛末ヲ録シテ内閣總理大臣ニ報告スヘシ

第二十三條 選舉管理者ハ選舉明細書ヲ作り選舉ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ署名捺印シ其ノ副本ヲ貴族院ニ送致スヘシ

第二十四條 議員ニ關員ヲ生シタルトキハ議長ヨリ之ヲ上奏シ勅旨ヲ以テ補闕選舉ヲ行フヘキコトヲ其ノ府縣ニ命スヘシ

補闕選舉ヲ行フノ「時期及手續ハ通常選舉ノ例ニ同シ」(二十七年勅令第五十七號)  
(ニ依リ時期及ノ三字ハ消滅)

第二十五條 補闕議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル

第二十六條 貴族院令第九條ニ依リ貴族院ニ出訴スルノ期限ハ開會ノ後十日以内トス

●貴族院多額納稅者議員互選規則取扱方二十三年三月  
內務省勅令第七號

明治二十二年六月勅令第七十九號貴族院多額納稅者議員互選規則取扱方左ノ通心得ラルヘシ

第一條 貴族院令第六條ニ滿三十歳トアルハ其選舉期日(六月十日)前滿三十歳ニ達スル者ヲ指ス

第二條 互選規則第一條ニ其府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居トアルハ衆議院議員選舉法施行規則第二條ノ例ニ異ナラス

第三條 互選規則第一條ニ多額ノ直接國稅トアルハ地租及土地又ハ工業商業ノ利益ヨリ生スル所得納稅額而已チ合算シテ名簿調製ノ期日(四月一日)前滿一年以上多額ノ直接國稅ヲ納メ仍引續キ納ムルモノヲ云

第四條 實業讓與ニ依リ土地所有權移轉ノ場合ニ於テ其所有ノ年限及賃入地ノ地租及敷入共有ノ土地ヨリ納ムル地租ノ計算方法及互選規則第三條ニ神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師トアルハ凡テ衆議院議員選舉法施行規則第三條第二項及同則第四條第五條第九條ノ例ニ異ナラス

第五條 貴族院令第六條ニ多額ノ直接國稅ヲ納ムル者トアル中ニハ華族(公侯爵)ノ當主ヲモ包含ス

第六條 貴族院令第六條ニ云フ其選ニ當リ勅任セラレタル者ハ其任期中納稅額ノ減スルコトアルモ同令第十條ノ場合ニアラサレハ其議員ノ資格ヲ失ハサルハ勿論ナリトス

第七條 互選ニ關スル費用ハ府縣廳費ノ支辨ニ屬ス

●貴族院多額納稅者議員ノ補闕選舉方明治二十七年五月  
勅令第五十七號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院多額納稅者議員ノ補闕選舉ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 府縣知事ハ貴族院多額納稅者議員ノ補闕選舉ノ命ヲ受ケタル日ヲ期トシ其ノ府縣ニ於テ互選資格ヲ有スル者十五人ノ名簿ヲ調製シ其ノ期日後二十日以内ニ之ヲ各互選人ニ配付シ併セテ之ヲ管内ニ告示スヘシ

第二條 前條ノ互選名簿ハ告示後四十日ヲ經過スルトキハ確定トス

第二類 貴族院多額納稅者議員互選規則取扱方 貴族院多額納稅者議員ノ補闕選舉方



第三條 貴族院多額納稅者議員ノ補闕選舉ハ互選名簿確定後十日目ニ之ヲ行フヘシ

●貴族院議員資格及選舉爭訟判決規則明治二十三年十月  
勅令第三百二十一號

朕貴族院開會ノ始ニ於テ資格及選舉ニ關ル爭訟ヲ判決スルノ緊要ニ屆シ而シテ時ニ及テ自ラ其ノ規則ヲ定ムルノ困難ナルヲ顧念シ茲ニ勅令ニ由リ貴族院議員資格及選舉爭訟判決規則ヲ公布セシム此ノ勅令ハ貴族院ニ於テ規則ヲ制定シテ更ニ裁可ヲ經ルマテノ間效力ヲ有スヘシ

貴族院議員資格及選舉爭訟判決規則

第一條 貴族院ハ每會期ノ始ニ於テ貴族院議員ノ資格及選舉ニ關ル爭訟ヲ審査スル爲ニ常任委員ヲ選舉スヘシ

第二條 伯子男爵議員ノ各選舉人又ハ多額納稅者議員ノ互選人貴族院令第九條ニ依リ出訴スル者ハ當選議員ヲ被告トスヘシ

第三條 原告人ハ訴狀及其ノ副本一通ヲ作り之ヲ議長ニ差出スヘシ議長訴狀ヲ受取りタルトキハ之ヲ資格審査委員ニ付ス

第四條 訴狀ニハ請求ノ要領理由及立證ヲ具ヘ原告人自ラ署名スヘシ

第五條 資格審査委員ハ訴狀ノ副本ヲ被告人ニ送達シ期日ヲ定メ被告人ヲシテ答辯書及其ノ副本一通ヲ差出サシメ其ノ副本ハ之ヲ原告人ニ送達スヘシ

委員ハ必要ト認ムルトキハ原告被告ヲシテ更ニ辯駁書及再答辯書ヲ差出サシムルコトヲ得

第六條 原告被告ハ郵便ヲ以テ文書ヲ差出スコトヲ得郵便到達ノ日數ハ期限ニ算入セス

第七條 資格審査委員ハ議長ヲ經由シテ議員ノ選舉ニ關ル證憑文書ヲ政府ニ要求スルコトヲ得

第八條 審査ノ結果ニ因リ刑法ニ觸ル、ノ事件ヲ發見シタルトキハ議長ヨリ之ヲ司法大臣ニ通告スヘシ但シ之カ爲ニ審査及判決ヲ中止セス

第九條 被告人期日內ニ答辯書ヲ差出ササルトキハ資格審査委員ハ直チニ審査ノ結果ヲ報告スルコトヲ得

天災事變ニ因リ期日內ニ答辯書ヲ差出スコト能ハカリシコトヲ證明スル者アルトキハ議長ハ更ニ期日ヲ定メ之ヲ差出サシムルコトヲ得

第十條 資格審査委員其ノ審査報告ヲ議長ニ提出シタルトキハ議長之ヲ各議員ニ配付シタル後院議ニ付スヘシ

第十一條 議院ニ於テ判決シタルトキハ議長ハ書記官長ヲシテ其ノ議事録ニ依リ議決ノ謄本ヲ作ラシメ之ヲ原告被告ニ送達スヘシ

議院ノ判決ハ理由ヲ付セス

第十二條 貴族院ニ於テ議員ノ當選又ハ資格ヲ不法ト判決シタルトキハ議長ハ其ノ位列ヲ停止シテ奏上スヘシ

第十三條 被告議員ハ前條ノ判決ヲ受クルマテ議院ニ於テ位列及發言ノ權ヲ失ハス但シ自己ニ關ル爭訟ニ付テハ自己又ハ他ノ議員ニ託シ辯明スルコトヲ得ルモ其ノ表決ニ預カルコトヲ得ス



被告議員ハ自己ニ關ル爭訟ニ付テハ委員會ニ參スルコトヲ得ス

第十四條 補選議員ノ選舉開院中ニ在ルトキハ伯子男爵ニ在テハ當選確定ノ後多額納稅者ニ在テハ勅任セラレタル後十日ヲ以テ出訴ノ期限トス

前項ノ期限ニ滿タスシテ議院閉會セラレ出訴スルコト能ハサルトキハ仍次會期ノ開會後十日以內ニ出訴スルコトヲ得

第十五條 議員他ノ議員ノ資格ニ對シ異議ヲ申立ツル者アルトキハ第三條第四條第五條第七條第九條第十條第十一條第十二條第十三條ノ例ニ依リ審査及判決スヘシ但シ此ノ場合ニ於テハ貴族院伯子男爵議員選舉規則第十八條及貴族院多額納稅者議員互選規則第二十六條ニ掲ケタル期限ノ限ニ在ラス

●明治三十年ノ選舉期ニ於テ選舉スヘキ貴族院伯子男爵議員ノ員數ノ詔勅明治三十年四月十日

朕貴族院令第四條及貴族院伯子男爵議員選舉規則第五條ニ依リ伯子男爵ハ本年ノ選舉期ニ於テ各左ノ員數ヲ選舉スヘキコトヲ命ス

- 伯爵 十五人
- 子爵 七十人
- 男爵 三十五人

衆議院議員選舉法施行令第三十三條參看

●貴族院令ニ稱スル直接國稅ノ種目明治二十二年三月勅令第四十一號

朕衆議院議員選舉法及貴族院令ニ於テ直接國稅ト稱スル種目ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

「衆議院議員選舉法及貴族院令ニ於テ直接國稅ト稱スルモノ左ノ如シ

- 地 租
- 所得稅
- 營業稅(二十九年勅令第二百六十號ヲ以テ本項ヲ追加ス)

第二類 明治三十年ノ選舉期ニ於テ選舉スヘキ貴族院伯子男爵議員ノ員數ノ詔勅  
貴族院令ニ稱スル直接國稅ノ種目



●北海道ノ札幌區函館區小樽區以外ノ地ニ衆議院議員選舉法施行明治三十六年六月  
勅令第三百五號

第一條 北海道ノ札幌區函館區小樽區以外ノ地ニ衆議院議員選舉法ヲ次ノ總選舉ヨリ施行ス

第二條 北海道ニ於テハ衆議院議員選舉法及其ノ附屬法令ニ關シテハ支廳ノ所轄區域ヲ一郡ノ區域、役場事務ヲ共同處理スル町村ノ組合ヲ一町村ト看做シ支廳長ハ郡長、役場事務ヲ共同處理スル組合ノ管理者ハ町村長、支廳ハ郡役所、役場事務ヲ共同處理スル組合役場ハ町村役場ニ該當ス



○第三類 法例、公文、曆  
沿革略記 明治元年三月舊幕府ノ揭榜ヲ撤シ更メテ五條ヲ揭示ス其三條ハ永世ノ定法ニシテ之ヲ定三枚高札ト云ヒ餘二  
條ハ一時ノ揭示ニシテ覽札ト云フ又時々ノ布令ヲ揭示スルモノトス○同年四月布告書類違方規則ヲ定ム○同  
年八月行政官大總督府總督府五官府縣ノ布告發布ノ手續及ヒ其文例ヲ定ム○六年二月第六十八號ヲ以テ諸布告發令  
毎ニ人民熟知ノ爲メ凡三十日間便宜ノ地ニ揭示セシメ又從前ノ高札面ハ人民熟知スルヲ以テ取除カシム○同年六月第  
二百十三號ヲ以テ各府縣ヘ諸布告到達ノ日數ヲ定メ三十日間揭示ノ後ハ管内一般人民熟知スルモノト看做ス旨ヲ達ス  
○同年七月北海道ニ限リ各所到達揭示ノ初日ヲ以テ取除キ開拓使ヨリ届出ルヲ許ス○同年同月第二百五十四號ヲ以テ  
各府及官員限リノ達書ト全國一般或ハ華士族社寺ニ布告ノ區別ヲ立テ其結文例ヲ定ム○七年四月第四十八號達ヲ以テ  
從前ノ布告布達ノ揭示方ヲ廢シ更ニ布告布達共該地到達ノ翌日ヨリ騰寫等ノ日數二十日ヲ除キ其翌日ヨリ三十日經過  
セハ人民一般得知シタルモノト見做スモノトス○十四年十一月第九十四號達ヲ以テ諸省事務章程通則ヲ定メ法律規則  
布達ハ其主管事務ニ屬スル各省州之ニ副署シ兩省以上關涉ノモノハ關涉ノ省州均シク連署シ其實ニ任セシム○同年十  
二月第一號達ヲ以テ法律規則ヲ布告トシ從前各省限リ布達スル條規ノ類ヲ總テ太政官ノ布達トナシ一時公布ニ止マ  
ルモノヲ太政官及諸省ノ告示トス○十六年五月第十七號布告ヲ以テ從前令スル所ノ布告布達施行ニ關スル件ヲ改メ更  
ニ布告布達施行期限ヲ定ム○十九年二月勅令第一號ヲ以テ前令ヲ改メ更ニ公文式ヲ制定ス是レ現行法ナリ

○第三類 法例、公文、曆

●公文式 明治十九年二月 勅令第一號

沿革略記 明治元年三月舊幕府ノ揭榜ヲ撤シ更メテ五條ヲ揭示ス其三條ハ永世ノ定法ニシテ之ヲ定三枚高札ト云ヒ餘二  
條ハ一時ノ揭示ニシテ覽札ト云フ又時々ノ布令ヲ揭示スルモノトス○同年四月布告書類違方規則ヲ定ム○同  
年八月行政官大總督府總督府五官府縣ノ布告發布ノ手續及ヒ其文例ヲ定ム○六年二月第六十八號ヲ以テ諸布告發令  
毎ニ人民熟知ノ爲メ凡三十日間便宜ノ地ニ揭示セシメ又從前ノ高札面ハ人民熟知スルヲ以テ取除カシム○同年六月第  
二百十三號ヲ以テ各府縣ヘ諸布告到達ノ日數ヲ定メ三十日間揭示ノ後ハ管内一般人民熟知スルモノト看做ス旨ヲ達ス  
○同年七月北海道ニ限リ各所到達揭示ノ初日ヲ以テ取除キ開拓使ヨリ届出ルヲ許ス○同年同月第二百五十四號ヲ以テ  
各府及官員限リノ達書ト全國一般或ハ華士族社寺ニ布告ノ區別ヲ立テ其結文例ヲ定ム○七年四月第四十八號達ヲ以テ  
從前ノ布告布達ノ揭示方ヲ廢シ更ニ布告布達共該地到達ノ翌日ヨリ騰寫等ノ日數二十日ヲ除キ其翌日ヨリ三十日經過  
セハ人民一般得知シタルモノト見做スモノトス○十四年十一月第九十四號達ヲ以テ諸省事務章程通則ヲ定メ法律規則  
布達ハ其主管事務ニ屬スル各省州之ニ副署シ兩省以上關涉ノモノハ關涉ノ省州均シク連署シ其實ニ任セシム○同年十  
二月第一號達ヲ以テ法律規則ヲ布告トシ從前各省限リ布達スル條規ノ類ヲ總テ太政官ノ布達トナシ一時公布ニ止マ  
ルモノヲ太政官及諸省ノ告示トス○十六年五月第十七號布告ヲ以テ從前令スル所ノ布告布達施行ニ關スル件ヲ改メ更  
ニ布告布達施行期限ヲ定ム○十九年二月勅令第一號ヲ以テ前令ヲ改メ更ニ公文式ヲ制定ス是レ現行法ナリ

公文式

第一 法律命令

第一條 法律勅令ハ上諭ヲ以テ之ヲ公布ス



二十三年勅令第二百五十五號ヲ以テ元老院ヲ廢ス

三十一年法律第一條ニ依リ本例ニ依リス

「法律」元老院ノ議ヲ經ルヲ要スルモノハ舊ニ依ル」

第二條 法律勅令ハ内閣ニ於テ起草シ又ハ各省大臣案ヲ具ヘテ内閣ニ提出シ總テ内閣總理大臣ヨリ上奏裁可ヲ請フ

第三條 法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任大臣ト俱ニ之ニ副署ス其各省專任ノ事務ニ屬スルモノハ主任大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス(二十二年勅令第百三十九號ヲ以テ改)

第四條 内閣總理大臣及各省大臣ハ法律勅令ノ範圍内ニ於テ其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ法律勅令ヲ施行シ又ハ安寧秩序ヲ保持スル爲メニ閣令又ハ省令ヲ發スルコトヲ得

第五條 閣令ハ内閣總理大臣之ヲ發シ省令ハ各省大臣之ヲ發ス

第六條 閣令ハ年月日ヲ記入シ内閣總理大臣之ニ署名ス

第七條 省令ハ年月日ヲ記入シ主任大臣之ニ署名ス

第八條 各官廳一般ニ關スル規則ハ内閣總理大臣之ヲ定メ各廳處務細則ハ其主任大臣之ヲ定ム

第九條 内閣總理大臣及各省大臣ノ所轄官吏及其監督ニ屬スル官吏ニ達スル訓令モ亦第六條第七條ノ例ニ依ル

第二 布告

第十條 凡ソ「法律」命令ハ官報ヲ以テ布告シ官報各府縣應到達日數ノ後七日ヲ以テ施行ノ期限トナス但官報到達日數ハ明治十六年五月二十六日第十四號布達ニ依ル

第十一條 天災時變ニ依リ官報到達日數内ニ到達セサルトキハ其到達ノ翌日ヨリ起算ス

第十二條 北海道及沖繩縣ハ官報到達日數ヲ定メス現ニ道廳又ハ縣廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算ス島地ハ所轄郡役所ニ官報ノ到達シタル翌日ヨリ起算ス

第十三條 「法律」命令ノ發布ノ當日ヨリ施行セシムルコトヲ要シ又ハ特ニ施行ノ日ヲ掲ケタルモノハ第十條第十二條ノ例ニ依ラス

第三 印璽

第十四條 國璽御璽ハ内大臣之ヲ尙藏ス

國璽御璽ハ親署ノ後内大臣之ヲ鈐ス

第十五條 法律勅令ハ親署ノ後御璽ヲ鈐ス

第十六條 國書條約批准外國派遣官吏委任狀在留各國領事證認狀及三等以上勳章ノ勳記ハ親署ノ後國璽ヲ鈐ス

四等以下勳章ノ勳記ハ國璽ヲ鈐ス

第十七條 勅任官ノ任命ハ其辭令書ニ御璽ヲ鈐シ奏任官ノ任命ハ其奏薦書ニ御璽ヲ鈐ス

● 布告布達到達日數十六年五月第十四號布達

今般第十七號ヲ以テ布告布達施行期限ヲ改定シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

到達日數	四	日
京		
都		
府		

第三類 布告布達到達日數



福	秋	山	青	巖	福	宮	長	岐	滋	山	靜	愛	三	枋	茨	千	群	崎	新	長	兵	神	大
井	田	形	森	手	島	城	野	阜	賀	栗	岡	知	重	木	城	葉	馬	玉	湯	崎	庫	奈	阪
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	府	府
八	八	五	十	七	四	五	四	四	四	二	二	三	四	二	二	即	即	即	五	十	四	即	四
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

鹿	宮	熊	佐	大	福	高	愛	德	和	山	廣	岡	島	島	富	石
兒	崎	木	賀	分	岡	知	媛	島	歌	口	島	山	根	取	山	川
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣
十	十	十	十	十	九	八	九	六	六	八	七	六	八	七	六	七
二	一	一	一	一												
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日

閣令第二十二號三十一年十二月  
官報到達日數奈良縣ハ大阪府ニ香川縣ハ愛媛縣ニ同シ

第三類 布告到達日數



●官報發行心得  
明治二十六年五月  
令第二十二號

令般太政官ニ於テ官報ヲ發行スルノ條件相違候但シ發行ノ期日ハ道ヲ可相違事

第一條 「太政官中ニ文書局」ヲ置キ官報編輯ノ事ヲ掌シム

第二條 官報ハ別紙ニ記シタル事項ヲ掲載スヘキニ付各官廳ニ於テ主任ヲ定メ官報ニ掲載スヘキ書類ヲ取願メ「文書局」ニ當テ送付スヘシ

第三條 各般ノ事項一時ニ掲載スルコト能ハサルトキハ其般ニ於テ順次ニ掲載シ其大部ニ涉ル者ハ數日ニ分被スル等郡テ「文書局」ノ意見ニ任ス

第四條 官報ハ左ノ定價ヲ以テ官報局ニ於テ發賣ス（三十年開令第四號）  
一 一箇月各月初日ヨリ分配送費 金六十錢  
一 一部配送費 金三錢

官報ヲ購取セントスル者ハ各官廳ヲ除クノ外其ノ定價ヲ前納スヘシ

第五條 各官廳ノ廣告ハ官報ヲ以テスヘシ但シ東京ヲ除キ其他ノ地方ハ本條ノ例ニ依ラサルコトヲ得

第六條 官報ノ廣告其官報ヲ以テスルノ外同時他ノ新聞紙ニ掲載スルハ各官廳ノ便宜ニ任ス但シ其官報ヲ以テスル者ハ廣告料ヲ要セシ

第七條 各官廳ハ官報ヲ購取スヘキ義務アルモノトス（三十年開令第四號）  
但シ三等郵便電信局、三等郵便局及三等電信局ハ此ノ限ニ在ラズ（三十二年開令第三號）

●地方官廳ノ發スル命令ノ公布式  
明治二十六年十月  
令第二十二號  
地方官廳ノ發スル命令ノ公布式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 警視廳令、北海道廳令、府縣令、島廳令及郡令ニハ其ノ警視廳令、北海道廳令、府縣令、島廳令又ハ郡令ナルコトヲ明記シ警視廳監、北海道廳長官、府縣知事、島司又ハ郡長各之ニ署名シ公

布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ  
第二條 警視廳令、北海道廳令及府縣令ヲ公布スルノ方法ハ警視廳令、北海道廳令又ハ府縣令ノ定ムル所ニ依ル

第三條 警視廳令、北海道廳令及府縣令ハ特ニ施行ノ期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外警視廳令、北海道廳令又ハ府縣令中ニ記入シタル公布ノ日ヨリ起算シ七日ヲ經テ之ヲ施行ス但島廳又ハ郡役所所在ノ島地ニ在テハ其ノ所轄島廳又ハ郡役所ニ到達シタル日ヨリ起算シ其ノ他ノ島地ニ在テハ所轄町村役場又ハ戸長役場ニ到達シタル日ヨリ起算ス

警視廳令、北海道廳令及府縣令ヲ登載シタル印刷物ヲ管内一般ノ島廳、郡區役所、町村役場又ハ戸長役場ニ配付スルヲ以テ公布ノ方法ト定メタル場合ニ於テモ前項ノ島廳、郡役所、町村役場又ハ戸長役場ニ對シテハ仍該令ヲ登載シタル印刷物若クハ膠本ヲ配付スヘキモノトス  
第四條 島廳令及郡令ハ特ニ施行ノ期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外島廳令又ハ郡令ニ記入シタル公布ノ日ヨリ起算シ七日ヲ經テ之ヲ施行ス但島廳及郡役所所在ノ地ヲ除クノ外島地ニ在テハ其所轄町村役場又ハ戸長役場ニ到達シタル日ヨリ起算ス  
島廳令及郡令ヲ登載シタル印刷物若クハ膠本ヲ部内一般ノ町村役場又ハ戸長役場ニ配付スルヲ以テ公布ノ方法ト定メタル場合ニ於テモ前項ノ町村役場又ハ戸長役場ニ對シテハ仍該令ヲ登載シタル印刷物若クハ膠本ヲ配付スヘキモノトス



三十一  
年勅  
令第百二十  
三號ヲ以テ  
施行  
六月  
十日

附則

第五條 「北海道區長ノ發スル區令ニハ本令中郡令ニ關スル規程ヲ適用ス」  
第六條 本令ハ明治二十六年十二月一日ヨリ施行ス

●法例明治三十一年六月

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
法例別冊ノ通之ヲ定ム

此法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
明治二十三年法律第九十七號法例ハ此法律發布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

(別冊)

法例

第一條 法律ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス但法律ヲ以テ之ニ異ナリタル施行時期  
ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス  
臺灣、北海道、沖繩縣其他島地ニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ施行時期ヲ定ムルコトヲ得  
第二條 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサル慣習ハ法令ノ規定ニ依リテ認メタルモノ及ヒ法令ニ規定  
ナキ事項ニ關スルモノニ限リ法律ト同一ノ效力ヲ有ス  
第三條 人ノ能力ハ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム

外國人カ日本ニ於テ法律行為ヲ爲シタル場合ニ於テ其外國人カ本國法ニ依レハ無能力者タルヘキト  
キト雖モ日本ノ法律ニ依レハ能力者タルヘキトキハ前項ノ規定ニ拘ハラズ之ヲ能力者ト看做ス  
前項ノ規定ハ親族法又ハ相続法ノ規定ニ依ルヘキ法律行為及ヒ外國ニ在ル不動産ニ關スル法律行為  
ニ付テハ之ヲ適用セス  
第四條 禁治産ノ原因ハ禁治産者ノ本國法ニ依リ其宣告ノ效力ハ宣告ヲ爲シタル國ノ法律ニ依ル  
日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ニ付キ其本國法ニ依リ禁治産ノ原因アルトキハ裁判所ハ其者  
對シテ禁治産ノ宣告ヲ爲スコトヲ得但日本ノ法律カ其原因ヲ認メサルトキハ此限ニ在ラス  
第五條 前條ノ規定ハ准禁治産ニ之ヲ適用ス  
第六條 外國人ノ生死カ分明ナラサル場合ニ於テハ裁判所ハ日本ニ在ル財産及ヒ日本ノ法律ニ依ルヘ  
キ法律關係ニ付テノ日本ノ法律ニ依リテ失踪ノ宣告ヲ爲スコトヲ得  
第七條 法律行為ノ成立及ヒ效力ニ付テハ當事者ノ意思ニ從ヒ其何レノ國ノ法律ニ依ルヘキカヲ定ム  
當事者ノ意思カ分明ナラサルトキハ行為地法ニ依ル  
第八條 法律行為ノ方式ハ其行為ノ效力ヲ定ムル法律ニ依ル  
行為地法ニ依リタル方式ハ前項ノ規定ニ拘ハラズ之ヲ有效トス但物權其他登記スヘキ權利ヲ設定シ  
又ハ處分スル法律行為ニ付テハ此限ニ在ラス  
第九條 法律ヲ異ニスル地ニ在ル者ニ對シテ爲シタル意思表示ニ付テハ其通知ヲ發シタル地ヲ行為地  
ト看做ス



契約ノ成立及ヒ效力ニ付テハ申込ノ通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス若シ其申込ヲ受ケタル者カ  
 承諾ヲ爲シタル當時申込ノ發信地ヲ知ラサリシトキハ申込者ノ住所地ヲ行爲地ト看做ス  
 第十條 動産及ヒ不動産ニ關スル物權其他登記スヘキ權利ハ其目的物ノ所在地法ニ依ル  
 前項ニ掲ケタル權利ノ得喪ハ其原因タル事實ノ完成シタル當時ニ於ケル目的物ノ所在地法ニ依ル  
 第十一條 事務管理、不當利得又ハ不法行爲ニ因リテ生スル債權ノ成立及ヒ效力ハ其原因タル事實ノ  
 發生シタル地ノ法律ニ依ル  
 前項ノ規定ハ不法行爲ニ付テハ外國ニ於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依レハ不法ナラサルトキ  
 ハ之ヲ適用セス  
 外國ニ於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依リテ不法ナルトキト雖モ被害者ハ日本ノ法律カ認メタ  
 ル損害賠償其他ノ處分ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス  
 第十二條 債權讓渡ノ第三者ニ對スル效力ハ債務者ノ住所地法ニ依ル  
 第十三條 婚姻成立ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム但其方式ハ婚姻舉行地ノ法律  
 ニ依ル  
 前項ノ規定ハ民法第七百七十七條ノ適用ヲ妨ケス  
 第十四條 婚姻ノ效力ハ夫ノ本國法ニ依ル  
 外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ婿養子ト爲リタル場合ニ於テハ婚姻ノ效力ハ日本ノ  
 法律ニ依ル

第十五條 夫婦財産制ハ婚姻ノ當時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル  
 外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ婿養子ト爲リタル場合ニ於テハ夫婦財産制ハ日本ノ  
 法律ニ依ル  
 第十六條 離婚ハ其原因タル事實ノ發生シタル時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル但裁判所ハ其原因タル事  
 實カ日本ノ法律ニ依ルモ離婚ノ原因タルトキニ非サレハ離婚ノ宣告ヲ爲スコトヲ得ス  
 第十七條 子ノ嫡出ナルヤ否ヤハ其出生ノ當時母ノ夫ノ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム若シ其夫  
 カ子ノ出生前ニ死亡シタルトキハ其最後ニ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム  
 第十八條 私生子認知ノ要件ハ其父又ハ母ニ關シテハ認知ノ當時父又ハ母ノ屬スル國ノ法律ニ依リテ  
 之ヲ定ム其子ニ關シテハ認知ノ當時子ノ屬スル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム  
 認知ノ效力ハ父又ハ母ノ本國法ニ依ル  
 第十九條 養子縁組ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム  
 養子縁組ノ效力及ヒ離縁ハ養親ノ本國法ニ依ル  
 第二十條 親子間ノ法律關係ハ父ノ本國法ニ依ル若シ父アラサルトキハ母ノ本國法ニ依ル  
 第二十一條 扶養ノ義務ハ扶養義務者ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ム  
 第二十二條 前九條ニ掲ケタルモノノ外親族關係及ヒ之ニ因リテ生スル權利義務ハ當事者ノ本國法ニ  
 依リテ之ヲ定ム  
 第二十三條 後見ハ被後見人ノ本國法ニ依ル



日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ノ後見ハ其本國法ニ依レハ後見開始ノ原因アルモ後見ノ事務ヲ行フ者ナキトキ及ヒ日本ニ於テ禁治産ノ宣告アリタルトキニ限り日本ノ法律ニ依ル

第二十四條 前條ノ規定ハ保佐ニ之ヲ準用ス

第二十五條 相続ハ被相続人ノ本國法ニ依ル

第二十六條 遺言ノ成立及ヒ效力ハ其成立ノ當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

遺言ノ取消ハ其當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

前二項ノ規定ハ遺言ノ方式ニ付キ行爲地法ニ依ルコトヲ妨ケス

第二十七條 當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其當事者カ二箇以上ノ國籍ヲ有スルトキハ最後ニ取得シタル國籍ニ依リテ其本國法ヲ定ム但其一カ日本ノ國籍ナルトキハ日本ノ法律ニ依ル

國籍ヲ有セサル者ニ付テハ其住所地法ヲ以テ本國法ト看做ス其住所カ知レサルトキハ其居所地法ニ依ル

地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ニ付テハ其者ノ屬スル地方ノ法律ニ依ル

第二十八條 當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其住所カ知レサルトキハ其居所地法ニ依ル

前條第一項及ヒ第三項ノ規定ハ當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ場合ニ之ヲ準用ス

第二十九條 當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其國ノ法律ニ從ヒ日本ノ法律ニ依ルヘキトキハ日本ノ法律ニ依ル

本ノ法律ニ依ル

第三十條 外國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其規定カ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スルトキハ之ヲ適用セ

ス

●御一代一號ニ定ム 元年九月八日 布告

一今般 御即位被爲濟先例ノ通被爲改年號候就テハ是迄吉凶ノ兆象ニ從ヒ屢改號有之候ヘトモ自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被 仰出候事

●改曆 明治五年十一月 布告 第三百三十七號

今般改曆ノ儀別紙 詔書ノ通被仰出候條此旨相達候事

(別紙)

詔書寫

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躡度ニ合ス故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晚アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル特ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率テ妄誕無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス蓋シ太陽曆ハ太陽ノ躡度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晚ノ變ナク四歲毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タサルナリ依テ自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月九日



一今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事  
但新曆鐵板出來次第頒布候事

一ケ年三百六十五日十二ヶ月ニ分テ四年毎ニ一日ノ闕ヲ置候事

一時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分テ候處今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分テ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分テ午後幾時ト稱候事

一時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一諸祭典等舊曆月日ヲ新曆月日ニ相當シ施行可致事

太陽曆 一年三百六十五日 閏年三百六十六日 四年毎ニ改之

一月大	三十一日	其一日	即舊曆壬申	十二月三日
二月小	二十八日 <small>四年毎ニ改之</small>	其一日	癸酉	正月四日
三月大	三十一日	其一日	同	二月三日
四月小	三十日	其一日	同	三月五日
五月大	三十一日	其一日	同	四月五日
六月小	三十日	其一日	同	五月七日
七月大	三十一日	其一日	同	六月七日
八月大	三十一日	其一日	同	閏六月九日

九月小	三十日	其一日	同	七月十日
十月大	三十一日	其一日	同	八月十日
十一月小	三十日	其一日	同	九月十二日
十二月大	三十一日	其一日	同	十月十二日

大小毎年替ルコトナシ

時刻表

午前			午後				
零時 <small>即午後十二時</small>	子刻	一時	子半刻	二時	丑刻	三時	丑半刻
四時	寅刻	五時	寅半刻	六時	卯刻	七時	卯半刻
八時	辰刻	九時	辰半刻	十時	巳刻	十一時	巳半刻
十二時	午刻						
一時	午半刻	二時	未刻	三時	未半刻	四時	申刻
五時	申半刻	六時	酉刻	七時	酉半刻	八時	戌刻
九時	戌半刻	十時	亥刻	十一時	亥半刻	十二時	子刻



三十三年九月  
勅令第三  
百七十四號  
製造以テ  
神部以テ  
製造以テ  
神部以テ  
製造以テ  
神部以テ

右之通被定候事

●頒曆 明治十五年四月  
第八號布達

「本曆並本曆ハ明治十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシムヘシ」  
一枚摺略曆ハ明治十六年曆ヨリ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ「出版」スルコトヲ得  
但明治九年十月内務省甲第三十九號布達ハ取消ス  
右布達候事

●一枚摺略曆出版規定 二十三年十月  
文部省令第二號

- 明治十五年四月大政官第八號布達第二項ニ依リ出版スル所ノ一枚摺略曆ハ自今左ノ規定ニ依ルヘシ
- 一枚摺略曆ハ左ニ列記スル事項ニ限リ記載スルモノトス
  - 一年號及紀元ノ年數千支
  - 毎月ノ一日
  - 一日月蝕或其時間
  - 大祭祝日或神社例祭大祓
  - 日曜表甲子表庚申表己巳表
  - 二十四節氣及雜節
  - 新月滿月
- 前各項ニ相當スル陰曆日千支及陰曆ノ朔日千支並之ニ相當スル陽曆日
- 以上ノ事項ハ帝國大學ニ於テ編纂スル所ノ曆ニ依ルヘシ但前各項規定ノ外本曆略本曆ニ掲載セサル事項ヲ記入スルハ此限ニ

在ラス

●閏年 明治三十一年五月  
勅令第九十號

朕閏年ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
神武天皇即位紀元年數ノ四ヲ以テ整除シ得ヘキ年ヲ閏年トス但シ紀元年數ヨリ六百六十ヲ減シテ百ヲ以テ整除シ得ヘキモノノ中更ニ四ヲ以テ其ノ商ヲ整除シ得サル年ハ平年トス

●本初子午線經度計算方及標準時 明治十九年七月  
勅令第五十一號

朕本初子午線經度計算方及標準時ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム  
一英國グリニッチ天文臺子午儀ノ中心ヲ經過スル子午線ヲ以テ經度ノ本初子午線トス  
一經度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東經ヲ正トシ西經ト負トス  
一明治二十一年一月一日ヨリ東經百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム

●標準時 明治二十八年十二月  
第百六十七號

朕標準時ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 帝國從來ノ標準時ハ自今之ヲ中央標準時ト稱ス  
第二條 東經百二十度ノ子午線ノ時ヲ以テ臺灣及澎湖列島並ニ八重山及宮古列島ノ標準時ト定メ之ヲ

第三條 頒曆 一枚摺略曆出版規定 四年 本初子午線經度計算方及標準時 標準時



西部標準時ト稱ス

第三條 本令ハ明治二十九年一月二日ヨリ施行ス

### ○第四類 勳章、記章、敘位、褒賞

●大勳章圖式並大勳章以下略綬ヲ定ム明治十年十二月  
第九十七號達

明治九年中欽定ノ大勳位菊花大綬章大勳位菊花章圖式別冊ノ通ニ候事

(別冊略ス)

従前各種ノ略綬ヲ廢シ更ニ大勳章以下略綬別紙ノ通被定候事

(別紙略ス)

右相違候事

●勳章及從軍記章明治八年四月  
第五十四號布告

今般勳章別冊ノ通被定候條此旨布告候事(九年第四百一十一號布告ヲ以テ  
從牌ヲ勳章ト改ム以下倣之)

(別冊)

朕惟フニ凡ソ國家ニ功ヲ立テ績ヲ顯ス者宜ク之ヲ褒賞シ以テ之ニ酬ユヘシ依テ勳等勳章ノ典ヲ定メ人  
人ヲシテ寵異表彰スル所アルヲ知ラシメントス汝有司其斯旨ヲ體セヨ(勳章ハ朱  
書トス)

明治八年二月

勳等勳章

勳等ハ勳績及功勞アル者ヲ賞スル爲メニ設クル所ノ階級ニシテ位階ト異ナル故ニ各種ノ勳章ヲ佩用



セシム  
勳等ヲ分ツテ八級ト爲ス  
勳一等  
右ニ被スル者ハ一等勳章ヲ賜フ  
勳二等  
右ニ被スル者ハ二等勳章ヲ賜フ  
勳三等  
右ニ被スル者ハ三等勳章ヲ賜フ  
勳四等  
右ニ被スル者ハ四等勳章ヲ賜フ  
勳五等  
右ニ被スル者ハ五等勳章ヲ賜フ  
勳六等  
右ニ被スル者ハ六等勳章ヲ賜フ  
勳七等  
右ニ被スル者ハ七等勳章ヲ賜フ  
勳八等

右ニ被スル者ハ八等勳章ヲ賜フ

從軍記章

從軍記章ハ將卒ノ別ナク軍功ノ有無ヲ論セス凱旋ノ後從軍セシ微ニ之ヲ賜フ  
一勳章及從軍記章ハ佩用本人ニ止リ子孫之ヲ用ユルコトヲ得ス

勳章潤飾増設詔勅明治二十一年一月三日

朕曩ニ勳位ヲ定メ佩章ノ制ヲ設ク茲ニ復潤飾増設シ新舊與ニ併行シ勳功アル者ヲ賞旌シ以テ獎勵ノ道ヲ擴ム汝衆庶此旨ヲ體セヨ

金鵄勳章創設ノ詔勅明治二十三年二月十一日

朕惟ミルニ神武天皇皇業ヲ恢弘シ繼承シテ朕ニ及ヘリ今ヤ俊カニ登極紀元ヲ算スレハ二千五百五十年ニ達セリ朕此期ニ際シ天皇載定ノ故事ニ徴シ金鵄勳章ヲ創設シ將來武功拔群ノ者ニ授與シ永ク天皇ノ威烈ヲ光ニシ以テ其忠勇ヲ獎勵セントス汝衆庶此旨ヲ體セヨ



●金鷄勳章等級製式佩用式  
明治二十三年二月  
朕金鷄勳章ノ等級製式佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム、  
一金鷄勳章

功一級ヨリ功七級ニ至ル武功拔群ナル者ニ賜フ

(金鷄勳章製式略之)

金鷄勳章佩用式(二十八年勅令第百二十號)  
(ナリテ佩用式ヲ改正ス)

- 一 功一級章ハ大綬ヲ以テ左肩ヨリ右脇ニ垂レ其ノ副章ヲ左肋ニ佩フ
- 二 功二級章ハ右肋ニ佩ヒ其ノ副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 三 功三級章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ
- 四 功四級章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

●金鷄勳章敘賜條例  
明治二十七年十一月  
朕金鷄勳章敘賜條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

金鷄勳章敘賜條例

- 第一條 金鷄勳章ヲ武功拔群ナル者ニ敘賜スルハ本條例ノ定ムル所ニ依ル
- 第二條 將官ノ初級ハ功三級トシ武功ヲ累ヌルニ從ヒ逐次進級セシム  
特旨ヲ以テ敘賜スルモノハ前項ノ限ニアラス

第三條 佐官ノ初級ハ功四級トシ尉官ノ初級ハ功五級トシ武功ヲ累ヌルニ從ヒ逐次進級セシメ佐官ハ功二級尉官ハ功三級ニ至ルヲ得

第四條 准士官下士及兵卒ノ初級ハ功七級トシ武功ヲ累ヌルニ從ヒ逐次進級セシメ准士官下士ハ功五級兵卒ハ功六級ニ至ルヲ得

第五條 陸軍見習士官海軍少尉候補生ハ尉官ニ準シテ擬敘ス

第六條 將校相當官及軍醫ハ將校若クハ下士ニ準シテ敘賜ス

第七條 戰役間武功常ニ卓越ニシテ優賞スヘシト論定シタル者又ハ重要ノ職ニ當リ武功拔群ナル者ハ第二條乃至第四條初級ノ例ニ依ラス一等上級ニ敘賜スルコトアルヘシ

第八條 戰役ノ景況ニ依リ特ニ軍司令官又ハ艦隊司令長官ニ金鷄勳章五級以下ヲ其ノ部下ニ授與スルノ權ヲ假スコトアルヘシ

第九條 金鷄勳章敘賜規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

●金鷄勳章年金  
明治二十七年九月  
朕金鷄勳章年金ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

金鷄勳章年金令

- 第一條 金鷄勳章ヲ賜フ者ニハ功級ニ應シ終身年金ヲ加賜ス
- 第二條 金鷄勳章年金ノ定額ハ左ノ如シ(二十八年勅令第百十號ヲ以テ年金ノ定額ヲ改正ス)

第四期 金鷄勳章等級製式佩用式 金鷄勳章佩用式 金鷄勳章敘賜條例 金鷄勳章年金令



- 功一級 千五百圓
- 功二級 千圓
- 功三級 七百圓
- 功四級 五百圓
- 功五級 三百圓
- 功六級 二百圓
- 功七級 百圓

第三條 本令ノ年金受領者死亡シタルトキハ仍一年間遺族ニ其ノ年金ヲ賜フ

第四條 前條ノ遺族トハ寡婦孤兒父母及祖父母ニシテ年金受領者生存中ヨリ戶籍簿ニ登記シタル者ヲ云フ

第五條 本令ノ年金ハ他ノ勳等年金又ハ恩給ヲ受クルニ妨ケテキモトス

第六條 本令施行ニ關スル細則ハ閣令ヲ以テ之ヲ定ム

●勳章等級製式大勳位菊花章頸飾製式(明治二十一年一月)

一 寶冠章(二十九年勳令第百三十一號ヲ以テ改正)

章 寶冠ト竹櫻ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地黄色雙線紅色

一 勳一等旭日桐花大綬章

旭日大綬章ノ上級トス勳勞アル者ニ賜フ

章 旭日ト桐花ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地紅色雙線白色

一 瑞寶章

勳一等ヨリ勳八等ニ至ル勳勞アル者ニ賜フ

章 鏡珠ノ形ヲ以テ飾ル

綬 地淡藍色雙線橙黄色

一 大勳位菊花章頸飾

頸飾ハ大勳位ニ敍セシ者ニ特別之ヲ賜フ

菊花菊葉ノ形ト明治二字古篆文ヲ以テ飾ル

●勳章及大勳位菊花章頸飾圖樣(明治二十一年十一月)

明治二十一年勳令第一號各種ノ勳章及大勳位菊花章頸飾ノ圖樣左ノ如シ(二十九年勳令第四號ヲ以テ圖樣中へ追加)



●勳章佩用式明治二十一年十一月  
朕勳章佩用式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章佩用式

第一條 大勳位菊花章

菊花章ハ頸飾ヲ以テ喉下ニ佩ヒ其副章ヲ左肋ニ佩フ大綬ヲ以テ佩フル時ハ右肩ヨリ左脇へ垂レ其副章ハ佐肋ニ佩フ

第二條 寶冠章

一 勳一等寶冠章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇へ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等寶冠章以下ハ結蝶狀ノ綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第三條 旭日章

一 勳一等旭日桐花章並旭日章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇へ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等旭日章ハ右肋ニ佩ヒ其副章ヲ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
三 勳三等旭日章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
四 勳四等勳五等勳六等旭日章勳七等勳八等桐葉章ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ

第四條 瑞寶章

一 勳一等瑞寶章ハ大綬ヲ以テ右肩ヨリ左脇へ垂レ其副章ヲ左肋ニ佩フ  
二 勳二等瑞寶章ハ右肋ニ佩フ  
三 勳三等瑞寶章ハ中綬ヲ以テ喉下ニ佩フ  
四 勳四等瑞寶章以下ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩フ  
第五條 別種ノ勳章ハ之ヲ併佩ス其大綬章ハ之ヲ併佩セス

●勳章記章佩用心得二十二年二月  
實勳局告示第一號

第一款 一等勳章ヲ有スル者更ニ別種ノ一等勳章ヲ受ケタル時ハ旭日桐花章ト旭日章トハ同後ニ受ケタル一等勳章ノ正章並ニ其副章ト前ニ受ケタル一等勳章ノ副章トヲ併佩スヘシ  
第二款 二等以下ノ勳章ヲ有スル者更ニ同種上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ其下級ノ勳章ヲ佩フルコトヲ止ム別種ノ同級若クハ上級ノ勳章ヲ受ケタル時ハ之ヲ併佩スヘシ  
第三款 二等勳章若クハ一等ノ副章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ニ付テ其上位ニ列佩スヘシ  
第四款 三等勳章兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ上ニ佩スヘシ  
第五款 四等勳章以下兩箇以上ヲ併佩スル時ハ後ニ受ケタルモノヲ前ニ受ケタルモノ、位置ノ右ニ佩ヒ其從軍記章若クハ褒章ヲ有スル者ハ之ヲ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ



第六款 勳章ハ男子ハ大禮服及ヒ通常禮服(燕尾服)著用ノ時佩スヘシ從軍記章及ヒ褒章ヲ有スル者亦同シ

通常禮服著用ノ時ハ大綬章ヲ上衣ノ下ニ佩ヒ其副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フ又大綬章ヲ胸衣ノ下襯衣ノ上ニ佩ヒ副章ヲ上衣ノ上ヘ其位置ニ佩フルコトアリ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ其副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

旭日二等章ヲ有スル者通常禮服著用ノ節ハ其副章ヲ省クコトアルヘシ

第七款 勳章ハ婦人ハ大中小禮服著用ノ時佩フヘシ  
一等勳章ヲ有スル者大禮服ニハ大綬章及ヒ副章ヲ佩フ中小禮服ニハ時宜ニ依リ大綬章ヲ省キ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ又通常禮服ニハ時宜ニ依リ副章ノミヲ佩フルコトアルヘシ

二等以下ノ勳章ヲ有スル者ハ通常禮服著用ノ時ニ於テモ時宜ニ依リ之ヲ佩フルコトアルヘシ

外國勳章記章  
第八款 外國勳章佩用方ハ各彼ノ規則ニ依ル

第九款 我勳章ヲ有スル者我勳章ヲ佩ヒスシテ彼ノ勳章ノミヲ佩フヘカラス  
第十款 彼我ノ大綬章ヲ有スル者ハ彼ノ大綬章ヲ佩ヒス之ニ屬スル副章ノミヲ我副章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩スヘシ

但外交ノ時宜ニ依リ彼ノ大綬章及ヒ其副章ヲ佩ル時ハ我大綬章ヲ省キ我副章ハ併佩スヘシ  
第十一款 彼我ノ綬ヲ用ヒサル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下若クハ次ニ列佩

スヘシ

第十二款 彼我ノ喉下ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ下ニ佩フヘシ

第十三款 彼我ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ併佩スル時ハ彼ノ勳章ヲ我勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十四款 彼ノ左肋ニ佩フル勳章ヲ我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ我從軍記章及ヒ褒章ヲ彼ノ勳章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

第十五款 彼ノ記章ト我從軍記章及ヒ褒章ト併佩スル時ハ之ヲ我從軍記章及ヒ褒章ノ位置ノ左ニ列佩スヘシ

●略章略授佩用心得二十二年二月 實勳局管第廿二號

一 各種勳章ノ略章(凡ソ徑曲尺五六分若クハ其以下ノ大サニシテ)ハ通常禮服著用ノ時或ル場合ニ於テ連鎖或ハ小綬ヲ以テ左肋ニ佩用スルヲ得外國勳章ノ略章モ亦同シ

二 略綬ハ通常禮服通常禮服著用ノ節左襟見返シノ鈕孔ニ掛ケ佩フヘシ

三 略綬ハ別種二個以上ノ勳章ヲ有スル者各其綬ト同色ナル絹ヲ以テ二箇若クハ數箇合併ノモノヲ製シ之ヲ佩用スルヲ得又内外數種ノ勳章ヲ有スル者ハ内外數箇合併ノ略綬ヲ製シ之ヲ佩用スルコトヲ得

四 我略章ヲ佩ヒテ外國ノ勳章ヲ佩フルコトナシ  
(略章佩用圖略ス)



●勳章還納ノ場合 明治二十二年三月勳令第三十八號

於勳章還納ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳等進級シ同種ノ上級勳章ヲ受ケタル者ハ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

但勳記ハ還納スルノ限ニアラス

●勳章還納手續 明治二十二年三月勳令第九號

勳章還納手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

勳章還納手續

第一條 同種上級ノ勳章ヲ授與セラレタル者ハ一週間以内ニ其下級ノ勳章ヲ賞勳局ヘ還納スヘシ

第二條 同種上級ノ勳章ヲ賞勳局ノ送達ニヨリ受領シタル者ハ直ニ其領票ト共ニ下級ノ勳章ヲ同局ヘ差出スヘシ

官廳ヲ經テ受領シタル者ハ其官廳ヘ差出シ官廳ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第三條 外國人ノ勳等進級シ同種上級勳章ヲ受ケタル者モ亦此手續ニ從ヒ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ其外國ニ在ル者ハ最寄我公使館又ハ領事館ヘ差出スヘシ

第四條 公使館又ハ領事館ニ於テ前條勳章ヲ領收シタルトキハ外務省ヘ送付シ同省ハ之ヲ賞勳局ヘ送付スヘシ

第五條 勳章還納ニ關スル費用ハ受章者ノ自辨トス又官廳ヨリ賞勳局ヘ送付スルモノハ其官廳ニ於テ支辨スヘシ

附則

一從前同種勳章ニ進級シタル者ハ東京ハ二週間以内各地方ハ三十日以内ニ下級ノ勳章ヲ還納スヘシ我國在留ノ外國人亦同シ其外國ニ在ル者ハ手續第五條ニ依ルヘシ

但進級者既ニ死亡シタルトキハ本文ノ限ニアラス

●勳章年金褫奪停止 明治十六年六月勳令第二十二號布告

勳章ヲ有スル者其榮譽ヲ汚辱スルノ所爲アルトキハ勳章及年金ヲ褫奪ス外國勳章ハ其佩用免許狀ヲ沒收ス

勳章ヲ有スル者重罪輕罪ノ訴ヲ受ケ拘留若クハ保釋責付セラレタル時ハ勳章ヲ佩用スルコトヲ得ヌ又之ニ屬スル禮遇特權及年金ヲ受クルコトヲ得ヌ

●勳章年金褫奪及停止取扱手續 明治十九年七月勳令第十九號

明治十六年九月第三十九號達勳章年金褫奪及停止取扱手續ヲ改正スルコト左ノ如シ

勳章年金褫奪及停止取扱手續

第一條 勳章ヲ有スル者左ノ項目ニ觸ル、トキハ榮譽ヲ汚辱シタル者トス

第四類 勳章還納ノ場合 勳章還納手續 勳章年金褫奪停止 勳章年金褫奪停止取扱手續







知スヘシ

第三條 年金支給ノ初年ニ於テハ其ノ證書ノ日附六月三十日以前ニ在ルモノハ全額ヲ給シ七月一日以後ニ在ルモノハ半額ヲ給ス

年金受領者死亡ノ年ニ於テハ其ノ六月三十日以前ニ在ルモノハ半額ヲ給シ七月一日以後ニ在ルモノハ全額ヲ給ス

第四條 年金ハ半額ヲ毎年六月十二月ノ兩回ニ大藏省ヨリ地方廳ヲ經テ支給ス

第五條 金鵝勳章年金令ニ依リ遺族ニ賜フ年金支給ノ期ハ年金受領者ノ死亡六月三十日以前ニ在ルモノハ七月一日ニ始マリ翌年六月三十日ヲ以テ終リ其ノ死亡七月一日以後ニ在ルモノハ翌年一月一日ニ始マリ十二月三十一日ヲ以テ終ル

第六條 年金受領者年金ヲ受取ラントスルトキハ年金證書ヲ當該官吏ニ示シ受領者タルコトヲ證明スヘシ

第七條 年金ハ受領者ノ請求ニ依リ其ノ本籍地又ハ寄留地ノ地方廳ニ於テ支給スヘシ  
年金證書ヲ受領シタル者ハ三日以内ニ支給ヲ受クヘキ地方廳ヲ指定シタル書面ヲ賞勳局ニ差出スヘシ

第八條 年金受領者年金支給主管廳ノ轉換ヲ要スルトキハ現主管廳ニ届出ヘシ  
現主管廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ新主管廳ニ通知シ其ノ旨ヲ賞勳局及大藏省ニ通報スヘシ

第九條 年金受領者死亡シタルトキハ遺族又ハ親戚ヨリ年金支給主管ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ最終期ノ年金支給ノトキハ其ノ證書ヲ收メ賞勳局ニ還納スヘシ

金鵝勳章年金令ニ依リ年金ヲ繼承スヘキ遺族アルトキハ其ノ賜期滿限ノ後還納スルモノトス  
年金證書還納アリタルトキハ賞勳局ハ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十條 遺族ニ年金ヲ賜フトキハ其ノ順序左ノ如シ

- 一 寡婦
- 二 孤兒
- 三 父
- 四 母
- 五 祖父
- 六 祖母

孤兒數人アルトキハ家名相續人ニ賜フ其ノ他ハ男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニシ順次年長者ニ賜フ

第十一條 此ノ規則ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ

第十二條 年金ヲ繼承シタル者死亡シハ其ノ公權ヲ剝奪若クハ停止セラレタルトキハ第十條ノ順序ニ依リ年金ヲ繼承スヘキ者ニ之ヲ賜フ

年金ヲ繼承シタル寡婦再婚シタルトキ又ハ孤兒年齢二十歳ニ達シ若クハ結婚シタルトキ亦前項ニ同シ

第十三條 年金ヲ繼承シタル者年金支給ヲ受ケサル前ニ於テ前條ノ事故生シタルトキハ其ノ期ノ年金ハ次ノ繼承スヘキ者ニ賜フ

第十四條 年金ヲ繼承セントスル遺族ハ受領者最終期ノ年金支給濟ノ後署名捺印シタル願書(後見人ニ依リ)ニ親族二名、親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長(市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區長月長トス以下之ニ依リ)ノ證明ヲ受ケ且市町村長ノ證明シタル戸籍ノ寫ト年金證書トヲ添附シ年金支給主管ノ地方



應ニ差出スヘシ

第十五條 賞勳局總裁ハ前條ノ願書ヲ審査シ許可スヘキモノト認メタルトキハ年金證書ノ裏面ニ

其ノ事由ヲ記載シ年金支給主管ノ地方廳ヲ經テ本人ニ下付シ其ノ旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十六條 遺族間年金ヲ遞受セントスルトキモ亦前二條ノ例ニ依ル

第十七條 勳章ヲ有スル者犯罪ノ訴ヲ受ケ勾留(保釋資付亦同シ)セラレタルトキハ勾留ノ日ヨリ放免

ノ日迄年金ノ支給ヲ停ム

榮譽汚辱ノ所爲ニ依リ勳章ヲ褫奪セラレタル者ハ其ノ褫奪ノ日ヨリ年金ノ支給ヲ罷ム

輕禁錮以下ノ刑ヲ受クルモ勳章褫奪ニ至ラサル者ハ其ノ犯罪ノ訴ヲ受ケ勾留セラレタル日ヨリ

刑期終リタル日迄年金ノ支給ヲ停ム

第十八條 年金受領者失踪シタルトキハ其ノ踪跡分明トナリタル後失踪中ニ受取ルヘキ年金ヲ支

給ス

年金受領者失踪中年金ノ支給ヲ停罷セラルヘキ所爲アリト認定スルトキハ年金支給主管ノ地方

廳ハ年金ノ支給ヲ猶豫シ其ノ旨ヲ賞勳局ニ具申スヘシ

第十九條 年金ノ支給ヲ罷メラレタル者ニハ褫奪以前ノ分ヲ支給シ其ノ停メラレタル者ニハ其ノ

間ノ分ヲ控除シテ之ヲ支給シ其ノ支給額ハ各日割ヲ以テ之ヲ計算ス

年金ノ支給ヲ停罷セラレタル者其ノ停罷以前ノ分ヲ受クヘキ場合ニ於テ其ノ年金支給ノ期月勾

留若クハ刑期中ニ方ルトキハ次回ノ期月ニ於テ之ヲ支給ス

第二十條 水火災盜難等ニ由リ年金證書ヲ亡失シタルトキハ年金ノ種類、證書ノ番號、年金額及

亡失ノ事由ヲ具シ年金支給主管ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方長官前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其ノ事實ヲ調査シ賞勳局ニ申牒スヘシ賞勳局總裁ハ新ニ

年金證書ヲ作り其ノ裏面ニ再度授與ノ旨ヲ記載シ該地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ但亡失シタ

ル年金證書ヲ發見シタルトキハ直ニ地方廳ヲ經テ賞勳局ニ還納スヘシ

年金證書亡失ノ爲メ年金ヲ受取ルコト能ハサル者ニハ新年金證書ヲ授與シタル次ノ年金支給期

月ニ其ノ年金ヲ併セ支給ス

第二十一條 年金受領者氏名ヲ改メタルトキハ市町村長ノ證印アル届書ヲ年金證書ニ添ヘ年金支

給主管ノ地方廳ニ差出スヘシ

地方長官ハ年金證書ノ裏面ニ其ノ事由ヲ記載シ署名捺印ノ上本人ニ下付シ其ノ旨ヲ賞勳局及大

藏省ニ通知スヘシ

(附録略之)

●勳章記章ニ類似ノ標章佩用禁止明治二十八年八月勳令第百十八號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ勳章記章ニ類似ノ標章佩用禁止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勳章又ハ勅命ニ依リ制定セラレタル各種ノ記章ニ類似ノ標章ハ何等ノ形状ヲ問ハス公然佩用スルコト

第四類 勳章記章ニ類似ノ標章佩用禁止



ヲ得ス犯ス者ハ一日以上十日以下ノ拘留又ハ十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス  
外國ノ勳章記章並ニ日本赤十字社ノ記章ノ佩用ニ關スル例規ハ本令ニ因リ變更スルノ限ニアラス

●外國勳章佩用規則明治十八年十一月三十五號布告

明治十一年六月第拾五號布告外國勳章佩用免許願手續左ノ通改正ス

外國勳章佩用願規則

第一條 外國ノ勳章ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ賞勳局總裁ヘ願出免許狀ヲ受クヘシ

第二條 佩用願書ニハ勳章勳記其他關係書類ヲ添ヘ賞勳局總裁ヘ差出スヘシ(三十二年勅令第三百三十九號ヲ以テ條中刪除)

第三條 外國ノ勳章ヲ佩用スル者死シタルトキハ三十日以内ニ其旨ヲ遺族又ハ親戚ヨリ賞勳局ヘ届出ヘシ(同)

第四條 外國ノ記章從軍記章人命救助記章博覽會記章ノ類ヲ受領シ之ヲ佩用セントスル者ハ總テ此規則ニ準據スヘシ

●明治二十七八年從軍記章條例明治二十八年十月勅令第四百三十三號

朕明治二十七八年從軍記章條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十七八年從軍記章條例

第一條 明治二十七年二十八年ノ戰捷ヲ表彰スル爲メ特ニ從軍記章ヲ設ク

第二條 從軍記章ハ敵軍ヨリ奪獲シタル大砲ノ地金ヲ以テ製造ス其ノ圖式左ノ如シ

章 銅、寶珠ノ形堅一寸一分横一寸表面ニ菊御紋及陸軍聯隊旗ト海軍軍艦旗ト交叉シタル圖、裏面ニ明治二十七八年從軍記章ノ十一字ヲ識ス

鈕 銅、飾版ヲ附ス

綬 緞地、幅一寸二分中央白兩緣綠

第三條 從軍記章ハ左ニ掲クル者ニ授與ス

- 一 明治二十七年二十八年ノ戰捷ニ於テ大本營ニ從屬シ又ハ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ在リシ者
- 二 同役ニ於テ出征軍ニ編入セラレザルモ戰地ニ在テ軍務ニ從事シタル陸海軍軍人軍屬若クハ文官

但傭役人夫ノ類ハ授與ノ限ニ在ラス

第四條 第三條ニ掲クル者ニ該當セスト雖同役ノ軍務ニ從事シ若クハ之ヲ補助シタル者ニハ特ニ從軍記章ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條 第三條第四條ニ該當スル者ト雖開戰以後左ニ掲クル事項ノ一ニ該當スル者ニハ從軍記章ヲ授與セス

一 重禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 輕禁錮ノ刑ヲ受ク劊官ヲ附加セラレ若クハ官職ヲ失フタルトキ

三 懲戒處分ニ依リ免官セラレタルトキ

但處刑又ハ免官ノ後同役ノ軍務ニ從事シタル者ニハ特ニ之ヲ授與スルコトアルヘシ



第六條 從軍記章ノ襟章及佩用停止ニ關シテハ明治十六年第二十二號布告ヲ適用ス

第七條 從軍記章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存スルコトヲ許ス

第八條 從軍記章ヲ授與セラルヘキ資格ヲ有スル者其ノ授與前死亡シタルトキハ之ヲ其ノ遺族ニ付與シテ保存セシム

第九條 從軍記章ヲ授與セラレタル者ノ名簿ハ賞勳局ニ於テ之ヲ保存ス前條ニ依リ從軍記章ヲ付與セラレタル者ノ名簿亦同シ

第十條 從軍記章ノ奏請及授與ノ規程ハ別ニ之ヲ定ム

(明治二十七八年從軍記章ノ圖略之)

佩用式

明治二十七八年從軍記章ハ綬ヲ用ヰテ左肋ニ佩ヲ

●明治二十七八年從軍記章奏請授與規程明治二十九年二月閣令第一號

明治二十七八年從軍記章奏請授與規程左ノ通定ム

明治二十七八年從軍記章奏請授與規程

第一條 明治二十七八年從軍記章條例第三條第四條及第八條ニ依リ從軍記章ヲ授與若クハ附與セラルヘキ者ノ名簿ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ニ於テ之ヲ調整シ賞勳局總裁ヘ移牒スヘシ

第二條 明治二十七八年從軍記章條例第八條ニ依リ從軍記章ヲ死亡者ノ遺族ニ附與スヘキトキハ

之ヲ其ノ家名相續人ニ附與ス家名相續人アラサルトキハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ遺族ヲシテ寡婦子孫父母祖父母兄弟姊妹ノ内附與ヲ受クヘキ者ヲ定メシメ其ノ族籍氏名住所及死亡者トノ親屬關係ヲ記載シ賞勳局總裁ヘ移牒スヘシ

但遺族ハ死亡者ト同戶籍内ニ在ル者ニ限ル

第三條 名簿ハ明治二十八年十一月十八日現在ノ官位勳功爵氏名ニ依リ調整ス

第四條 賞勳局總裁ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ヨリ移牒シタル名簿ヲ覆覈具奏シ裁可ヲ得タルトキハ證據ヲ作ルヘシ

從軍記章及證據ハ在東京ノ高等官及高等官待遇ノ者並ニ從六位勳六等功五級以上ノ者並ニ有爵者及其ノ禮遇ヲ享クル者ニハ宮中ニ於テ之ヲ授與シ其ノ他ノ者ニ在テハ各所管長官若クハ地方長官ニ交附シテ之ヲ傳達セシム

第五條 賞勳局總裁ハ至急ヲ要スル場合ニ於テハ旨ヲ請ヒ前條第二項ノ規程ニ依ラサルコトヲ得

●從軍記章襟章及佩用停止取扱手續明治三十二年六月勅令第三百九號

從軍記章襟章及佩用停止取扱手續ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治十九年閣令第十九號勳章年金襟章及停止取扱手續ハ第八條及第九條ヲ除ク外從軍記章ノ襟章及佩用停止ノ取扱手續ニ關シ之ヲ準用ス但シ從軍記章ヲ有スル者重罪ノ刑ニ處セラレタル場合ニ於ケル取扱手續ハ重禁錮ノ刑ニ處セラレタルモノノ例ニ依ル



●明治三十三年從軍記章條例明治三十五年四月勅令第四百四十二號  
朕明治三十三年從軍記章條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年從軍記章條例

第一條 明治三十三年清國事變ノ平定ニ關與シタル者ニ授與スル爲從軍記章ヲ設ク

第二條 從軍記章ノ圖式左ノ如シ  
章 銅、圓形徑一寸表面ニ菊御紋及鳳凰ノ圖ヲ鑄出シ中央ニ從軍記章ノ四字ヲ識シ裏面ニ大日本帝國明治三十三年ノ十一字ヲ識ス

飾版 銅、清國事變ノ四字ヲ識ス

鈕 銅

綬 織地、幅一寸二分地緣三線白

從軍記章ハ綬ヲ用非テ左肋ニ佩フ

第三條 從軍記章ハ左ニ掲クル者ニ授與ス但シ傭役人夫ノ類ハ此ノ限ニ在ラス

一 戰地ニ在リテ軍務ニ從事シタル陸海軍軍人軍屬及文官並之ニ準スヘキ者

二 戰地ニ在リテ病傷者ノ救護ニ從事シタル者

三 戰地ニ臨マサルモ戰時編制部隊ニ編入セラレタル者

四 特別ノ任務ヲ受ケテ戰地ニ往復シタル陸海軍軍人軍屬及文官、内地ニ在リテ事變ニ關スル軍務

ニ從事シタル陸海軍軍人軍屬、内地ニ在リテ病傷者ノ救護ニ從事シタル者及戰地ニ往復シタル運送船病院船ノ船員

前項第一號及第二號ニ依ルヘキ者ハ明治三十三年六月十一日ヨリ明治三十四年六月一日迄、第三號及第四號ニ依ルヘキ者ハ明治三十三年六月十一日ヨリ明治三十三年十一月三十日迄ノ間ニ於テ之ニ該當スル者ニ限ル

第四條 從軍記章ハ帝國ノ軍隊艦船ト聯合シタル外國ノ軍隊艦船所屬ノ軍人軍屬ニモ授與スルコトアルヘシ

第五條 第三條ニ該當スルモ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ニハ從軍記章ヲ授與セス但シ處刑又ハ免官ノ後第三條ニ該當シタル者ニハ特ニ之ヲ授與スルコトアルヘシ

一 重禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

二 輕禁錮ノ刑ヲ受ケ剝官ヲ附加セラレ又ハ官職ヲ失ヒタルトキ

三 懲戒處分ニ依リ免官セラレタルトキ

第六條 從軍記章ノ褫奪及佩用停止ニ關シテハ明治十六年第二十二號布告ヲ準用ス

第七條 從軍記章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存スルコトヲ許ス

第八條 從軍記章ヲ授與セラルヘキ者其ノ授與前死亡シタルトキハ之ヲ其ノ遺族ニ付與シテ保存セシム

第九條 從軍記章ヲ授與セラレタル者ノ名簿ハ賞勳局ニ於テ之ヲ保存ス前條ニ依リ從軍記章ヲ付與セ



ラレタル者ノ名簿亦同シ

(圖略)

●明治三十三年從軍記章奏請及授與手續明治三十五年五月  
明治三十三年從軍記章ノ奏請及授與ノ手續ニ付テハ明治二十七八年從軍記章奏請授與規程ヲ準用ス但シ名簿ノ調整ハ明治三十五年五月十日現在ノ官位勳功學位爵氏名ニ依ル

●帝國憲法發布記念章明治二十二年八月勳令第三百三號

朕帝國憲法發布記念章制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 大日本帝國憲法發布記念章ハ金銀ノ兩種トス

第二條 記念章ヲ頒賜スルハ憲法發布式ニ關リタル親王以下ノ諸員ニ限ル勳任官以下ノ除ク

第三條 記念章ノ圖式左ノ如シ

章 圓形徑九分餘金若クハ銀  
輪郭内表面ニ菊御紋ト高御座並大勳位對花頭飾章ノ圖表面ニ明治二十二年二月十一日大日本帝國憲法發布記念章ノ二十三  
字ヲ刻ス

環 圓形金若クハ銀

綬 幅一寸二分旭日桐花章ノ綬ヲ用フ

第四條 記念章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ子孫之ヲ保存スルヲ許ス其ノ之ヲ沒收スルノ事項ハ明治十四年第六十三號布告褒章條例ニ依ル

(記念章ノ圖略之)

佩用式

一 綬ヲ用テ左胸ニ佩フ

一 記念章ヲ四等以下ノ勳章若クハ記章褒章ト併佩スル時ハ勳章ノ左記章褒章ノ右ニ列シテ佩フヘシ

●戰役若クハ事變ニ際シ功勞アル者ニ一時限リ金圓賜與明治二十八年七月勳令第三百十五號

朕戰役若クハ事變ニ際シ功勞アル者ニ一時限リ金圓ヲ賜與スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

戰役若クハ事變ニ際シ功勞アリテ勳章ヲ授クルモ年金ヲ賜ハラサル者又ハ勳章ヲ授ケサル者ニハ一時限リ金圓ヲ賜與ス

●敍位條例明治二十年五月勳令第十號

朕敍位條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

敍位條例

第一條 凡ソ位ハ華族勅奏任官及國家ニ勳功アル者又ハ表彰スヘキ效績アル者ヲ敍ス

第二條 凡ソ位ハ正一位ヨリ從八位ニ至ル十六階トス

第三條 凡ソ位ハ從四位以上ハ勳授トシ宮内大臣之ヲ奉ス正五位以下ハ奏授トシ宮内大臣之ヲ宣ス

第四類 明治三十三年從軍記章奏請及授與手續 帝國憲法發布記念章 戰役若クハ事變ニ際シ功勞アル者ニ一時限リ金圓賜與 敍位條例 一三三



第四條 凡ソ位ハ刑法其ノ他特別ノ規定ニ於テ定メラレタル場合ヲ除クノ外終身之ヲ有セシム(三十三  
年勅令  
第四百七號  
ヲ以テ改正)

特別ノ規定ニ於テ定メラレタル場合ニ該當セサルモ有位者ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ其他體面  
ヲ汚辱スルノ行爲ヲ爲シタルトキハ位記ヲ返上セシム

第五條 凡ソ位ハ從四位以上ハ爵ニ准シ禮遇ヲ享ク其准例左ノ如シ

公	侯	伯	子	男
從一位	正二位	從二位	正三位	正四位

第六條 爵位ヲ併有スル者ハ高キニ從テ禮遇ヲ享ク

● 褒章條例 明治十四年十二月  
第六十三號布告

沿革略記

明治二年七月達府縣奉職規則中ニ忠孝節義篤行者賞與取拔ヲ定ム其輕賞ハ府縣ニ委任シ重賞ハ專裁ヲ經テ施  
行セシム ● 三年十一月達ヲ以テ前ニ合スル所ノ賞與金數ノ多寡及其取拔ヲ定ム ○ 同年十二月辨官達ヲ以テ尙  
ホ賞與ノ緩急ヲ計リ其取拔方ヲ示ス ● 五年正月第十二號達ヲ以テ三年十一月及十二月辨官達ヲ廢シ褒賞ハ事ノ細大ヲ  
論セス專裁ヲ經テ施行セシムト雖モ賞與ノ時機ヲ失フノ虞アルモノハ輕賞ニ限リ專裁ノ處置ヲ示ス ● 八年七月第百二  
十一號達ヲ以テ舊行及ヒ奇特者賞與及ヒ學校病院其他道路橋梁及濟貧恤窮等ノ費用ヲ出スモノ、賞與規則ヲ定ム ● 十  
四年十二月第六十三號布告ヲ以テ褒章條例ヲ制定ス

褒章條例別紙ノ通相定メ來明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別紙)

褒章條例

第一條 凡ソ自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者又ハ孝子順孫節婦義僕ノ類ニシテ德行卓絶ナル  
者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者又ハ學術技藝上ノ發明改良著述、教育衛生慈善防疫ノ事  
業、學校病院ノ建設、道路河渠堤防橋梁ノ修築、田野ノ墾闢、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業  
ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者ヲ表彰スル  
爲メ左ノ三種ノ褒章ヲ定ム(二十七年勅令第一號  
ヲ以テ各種共改正)

紅綬褒章

右自己ノ危難ヲ顧ミス人命ヲ救助シタル者ニ賜フモノトス

綠綬褒章

右孝子順孫節婦義僕ノ類ニシテ德行卓絶ナル者又ハ實業ニ精勵シ衆民ノ模範タルヘキ者ニ賜フモ  
ノトス

藍綬褒章

右學術技藝上ノ發明改良著述、教育衛生慈善防疫ノ事業、學校病院ノ建設、道路河渠堤防橋梁ノ  
修築、田野ノ墾闢、森林ノ栽培、水産ノ繁殖、農商工業ノ發達ニ關シ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明  
ナル者又ハ公同ノ事務ニ勤勉シ勞效顯著ナル者ニ賜フモノトス

第二條 奇特ノ實行アリト雖モ褒章ヲ賜フヘキ場合ニ至ラサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

第三條 已ニ褒章ヲ賜リタルモノ再度以上同様ノ實行アリテ褒章ヲ賜フヘキトキハ其都度飾版一箇ヲ



賜與シ其章ノ綬ニ附加セシメ以テ標識トス

第四條 褒章ハ本人ニ限り終身之ヲ佩用シ及ヒ徽號トナスヲ得然レトモ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ沒收シ其未タ授與セサル前同上ノ刑ニ處セラレタル者ニハ之ヲ授與セス

(褒章ノ圖及佩用式略ス)

●褒章條例取扱手續明治二十七年一月

開令第一號

明治十四年第三百三號達褒章條例取扱手續左ノ通改正ス

褒章條例取扱手續

第一條 褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者アルトキハ警視總監北海道廳長官又ハ府縣知事ヨリ主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ其ノ當否ヲ審査シ賞勳局總裁ヘ申牒スヘシ

但官吏職務上ノ勞效ニ對シテハ褒章ヲ賜フノ限ニアラス

第二條 賞勳局總裁ハ申牒書ヲ覆奏シ褒章ヲ賜フヘキモノト認ムルトキハ奏請裁可ヲ得在東京ノ者ニハ之ヲ直授シ其ノ他ノ者ニハ主務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達スヘシ

第三條 外國人ニ褒章ヲ賜フヘキトキハ主務大臣外務大臣ト連署シテ之ヲ申牒スヘシ授與ノトキハ外務大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達ス其ノ公私備ニ係ル者ハ第二條ニ依ル

第四條 褒狀ハ高等官及高等官待遇ノ者並ニ從六位以上及勳六等以上ノ者並ニ華族ノ戶主其ノ祖父母父母妻嫡長子孫及嫡長子孫ノ妻ニハ賞勳局總裁之ヲ授與スヘシ其ノ具申牒施行ノ順序ハ

第一條及第二條ニ同シ

其ノ他ノ者ハ警視總監北海道廳長官又ハ府縣知事之ヲ授與スヘシ

第五條 褒狀ヲ外國人ニ授與スヘキトキハ金銀木盃金圓賜與手續第六條ニ依ル

第六條 褒章ヲ有スル者重罪ノ刑ヲ受クタルトキハ裁判確定ノ後司法大臣又ハ陸海軍大臣宣告書寫ヲ添ヘ之ヲ賞勳局總裁ニ還付スヘシ

第七條 褒章褒狀ヲ賜フヘキ者具申後授與以前ニ於テ輕罪以上ノ罪ヲ犯シ又ハ死亡シタルトキハ警視總監北海道廳長官又ハ府縣知事ヨリ速ニ其ノ事由ヲ主務大臣ニ申報シ主務大臣ハ之ヲ賞勳局總裁ニ通知スヘシ

●褒章ト金銀木盃金圓賜與手續明治十六年一月

第一號布告

明治十四年十二月第六十三號布告褒章條例ニ依リ褒章ヲ賜フヘキ者又ハ公益ノ爲メニ金銀財產等ヲ寄付シタル者ハ金銀木盃若クハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト金銀木盃金圓ヲ併セ賜フコトアルヘシ

●金銀木盃金圓賜與手續明治十六年三月

第十七號達

本年第一號布告ノ旨ニ依リ金銀木盃又ハ金圓賜與手續別紙ノ通相定候條此旨相達候事

(別紙)

金銀木盃金圓賜與手續



第一條 褒章ヲ賜フヘキ者ニ金銀木盃又ハ金圓ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

定例

第一等 木盃三組品格ナ三又ハ金拾圓ヨリ多カラス六圓ヨリ少カラス

第二等 木盃三組品格ナ三又ハ金五圓ヨリ多カラス貳圓五拾錢ヨリ少カラス

第三等 木盃壹個品格ナ三又ハ金貳圓ヨリ多カラス壹圓ヨリ少カラス

但賜盃賜金ニ及ハサルモノハ褒狀ヲ與フルコトアルヘシ

特例

第一等 金盃壹個又ハ三組又ハ金圓

第二等 銀盃壹個又ハ三組又ハ金圓

第二條 公益ノ爲メニ金穀財産等ヲ寄附シタル者ニ金銀木盃ヲ賜ヒ又ハ褒章ト之ヲ併セ賜フトキハ其等差左ノ如シ

寄附金額又ハ價格

拾圓未滿

褒狀

但壹圓未滿ハ褒詞ヲ以テ褒狀ニ換フルコトアルヘシ(十七年第二十二號 達ヲ以テ但書追加)

木盃壹個

但五拾圓未滿ハ拾圓毎ニ五拾圓以上ハ貳拾五圓毎ニ品格ニ等差アリ

百圓以上五百圓未滿

木盃三組

但三百圓未滿ハ五拾圓毎ニ三百圓以上ハ百圓毎ニ品格ニ等差アリ

五百圓以上二千圓未滿

銀盃壹個

但千圓未滿ハ貳百五拾圓毎ニ千圓以上ハ五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

貳千圓以上五千圓未滿

銀盃三組

但千圓毎ニ品格ニ等差アリ

五千圓以上一萬圓未滿

金盃壹個

但貳千五百圓毎ニ品格ニ等差アリ

壹萬圓以上

金盃三組

第三條 金銀盃又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木盃又ハ金圓ヲ併セ賜フ事項ハ賞勳局總裁之ヲ管理スルモノトス

褒狀又ハ木盃又ハ定例金圓ノミヲ賜フハ警視總監府知事「縣令」管理施行スルモノトス

但勅奏任官奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者並從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及ヒ華族ノ戸主其祖父母父母妻嫡長子孫及其妻ニ賜フヘキトキハ第四條ニ準據スヘシ(二十四年閣令第一號)

第四條 金銀盃又ハ特例金圓又ハ褒章ト金銀木盃又ハ金圓ヲ併セ賜フヘキ者アルトキハ警視總監府知事、縣令ヨリ主務大臣ニ具申シ主務大臣ハ之ヲ審査シ賞勳局總裁ニ申牒スヘシ(二十七年閣令 内務卿又ハ農商務卿トアルヲ主務大臣ニ改ム)



賞勳局總裁ハ其中牒ニ據テ勅奏任官奏任官以上ノ待遇ヲ受クル者並從六位以上及ヒ勳六等以上ノ者及華族ノ尸主其祖父母母妻嫡長子孫及其妻ニハ之ヲ直授シ其他ノ者ハ主務大臣ヲ經由シ警視總監府知事「縣令」ヲシテ之ヲ傳達セシム(二十四年開令第一號)  
(ナ以テ本項中追加)

第五條 金銀木盃又ハ金圓又ハ褒狀ヲ受クヘキ者ニシテ其未タ授與セサル前重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ之ヲ授與セス

第六條 外國人ニ金銀木盃金圓又ハ褒狀褒詞ヲ賜フヘキ者アルトキハ總テ内國人ノ例ニ準スト雖モ公使館員及帝室ノ貴賓ニ係ルトキハ外務大臣ヨリ賞勳局總裁ニ申牒シ授與ノトキハ亦同大臣ヲ經由シテ之ヲ傳達セシムヘシ(二十四年開令第一號)  
(戒ヲ以テ本條追加)

●黃綬褒章明治二十年五月勅令第十六號

朕黃綬褒章臨時制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 私財ヲ獻納シ防海ノ事業ヲ贊成スルモノニ授與スル爲メ黃綬褒章ヲ制定シ分テ金章銀章ノ二種トス

第二條 黃綬褒章ヲ佩用シ又ハ沒收スルノ事項ハ明治十四年十二月第六十三號褒章條例ニ據ル

第三條 黃綬褒章ノ圖式左ノ如シ  
(圖式略之)

●海軍下士卒善行章行狀條例明治三十四年八月勅令第六十號

朕海軍下士卒善行章行狀條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍下士卒善行章行狀條例

第一條 海軍下士卒ニハ其ノ品行及勤務ノ狀況ニ應シ善行章ヲ與ヘ若ハ行狀等級ヲ附ス

第二條 善行章ハ品行特ニ方正勤務特ニ精勵ノ者ニ之ヲ與フ

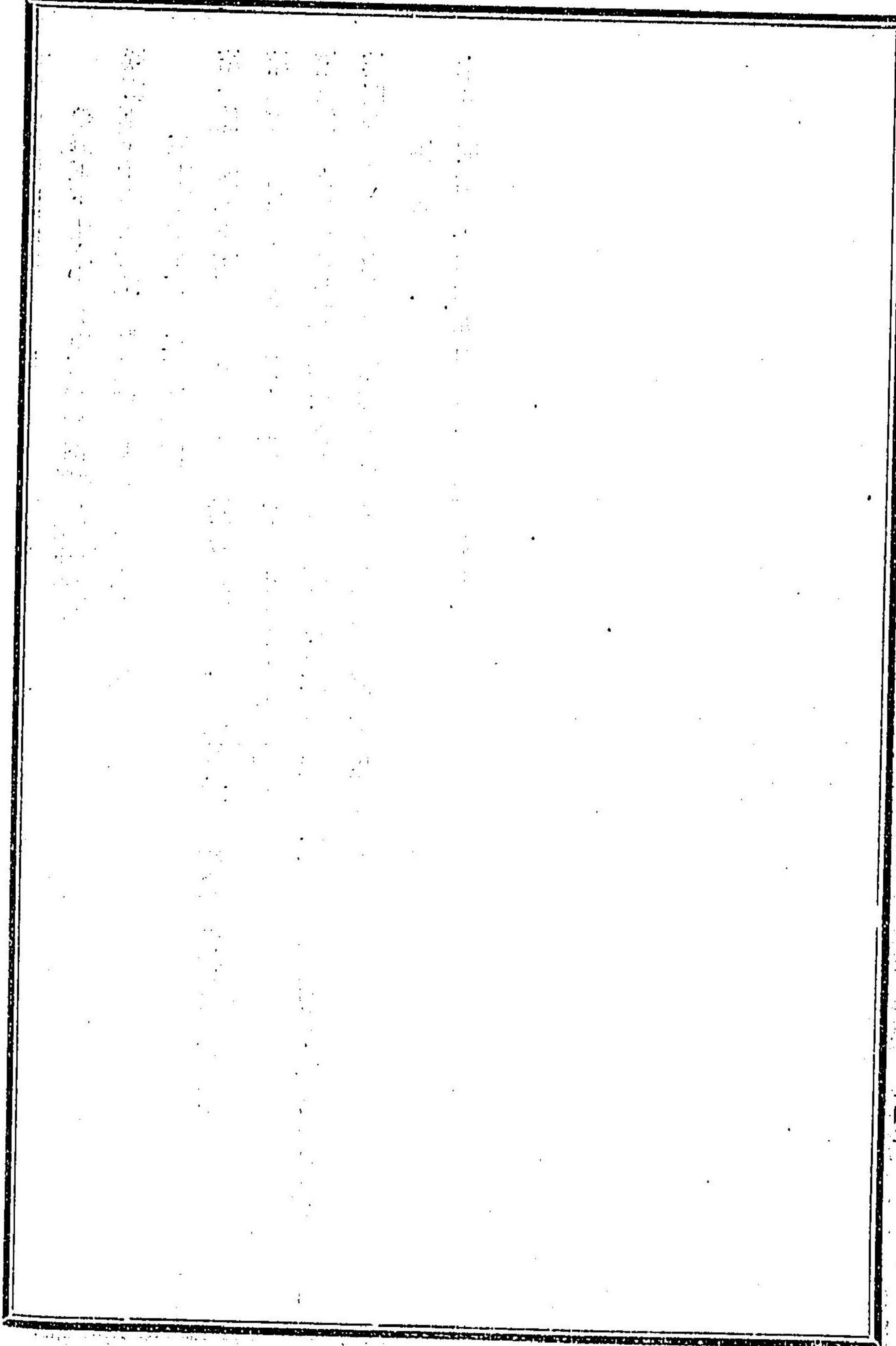
第三條 善行章及行狀ハ相通シテ九級ニ分チ善行章ハ一線ヨリ五線ニ至リ行狀ハ一等ヨリ四等ニ至ル

第四條 善行章及行狀ノ附與陞降ニ關スル細則ハ海軍大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十四年九月一日ヨリ之ヲ施行ス





### ○第五類 官制

#### ●内閣

沿革略記 丁卯歲十二月九日攝政關白征夷大將軍以下ノ職ヲ廢シ新ニ總裁議定參典ノ三職ヲ置ク是レヨリ先キ十月十五  
 日德川慶喜從前委任ノ大政ヲ返上シ將軍職ヲ辭ス○同年同月十五日參典ヲ分テ上下ト爲ス○明治元年正月十  
 七日三職ヲ分テ神祇、内閣、外國、海陸軍、會計、刑法、制度ノ七科ト爲シ職制ヲ定ム○同年二月三日三職七科ヲ改  
 メ總裁、神祇、内閣、外國、軍務、會計、刑法、制度ノ八局ト爲シ總裁局ニ正副總裁、輔弼、顧問、辨事、史官等ヲ  
 置キ七局ニ正權輔、正權判事等ヲ置キ職員ヲ定ム○同年同月十日徵士實七ノ制ヲ定ム○同年閏四月二十一日官制  
 ナ改正シ太政官ヲ分テ議政、行政、神祇、會計、軍務、外國、刑法ノ七官ト爲シ立法、行政、司法ノ三權ヲ分業ス議  
 政上局ニ議政、參典、史官下局ニ議長議員ヲ置キ行政官ニ輔相、辨事、史官ヲ置キ神祇、會計、軍務、外國刑法ノ五  
 官ニ正副知官等、正權判事等ヲ置キ勅奏列ノ區別ヲ立テ官等ヲ九等ニ分ツ○二年五月十三日議政官ヲ廢シ上下議官ヲ  
 開キ議定、參典ヲ行政官ニ置ク○同年七月八日官制ヲ改定シ二官六省ト爲シ行政官ヲ以テ太政官ト爲シ左右大臣、納  
 言、參議大中少辨、正權大少史等ヲ置キ位階十八ヲ設ケ官位相當ヲ更定シ職員令ヲ定ム○同年八月二十日官位相當ヲ更  
 定シ二十階ト爲ス○三年十一月七日令入雅樂ノ二局ヲ置キ職制ヲ定ム○四年七月二十八日太政官官制ヲ更定シ新ニ正  
 院及左院右院ヲ置キ左右大臣以下ヲ廢シ太政大臣、納言、參議、正權樞密、大少史、權大少史等ヲ正院ニ議長議員ヲ  
 左院ニ院右院ヲ院左院ヲ以テ諸省長次官職務ヲ議スルノ所ト爲シ又式部舍人雅樂ノ三局ヲ改置シ太政官職制並正院左院右院  
 事務章程ヲ定ム又正四位以上ヲ勅任正六位以上ヲ奏任從六位以下ヲ列任ト爲シ等級ヲ更定ス○同年八月十日官制ヲ廢  
 定シ太政官ヲ本官ト爲シ諸省ヲ分官ト爲シ寮司ヲ官省ノ支官ト爲シ官位相當ヲ廢シ更ニ官等十五ヲ立テ三等以上ヲ勅  
 任トシ七等以上ヲ奏任トシ八等以下ヲ列任トス又是日式部舍人雅樂ノ三局ヲ廢シ更ニ式部寮ヲ置キ舍人雅樂ノ事務ヲ  
 管セシム○同年同月廿二日式部寮舍人官等ヲ改ム○五年正月第十六號達ヲ以テ官等ヲ更定ス○同年三月第九十二號達  
 以テ神祇省廢セシニヨリ祭事祀典ヲ式部寮ニ管理セシム○同年九月第二十八號達ヲ以テ印書局ヲ置キ正院ノ管轄ト  
 ス○同年十月四日無級達ヲ以テ正院分課ヲ定メ禮部、監部、大使事務ノ三課ヲ内史ノ所管ト爲シ庶務、能錄、庶史、地  
 誌、用度ノ五課及翻譯印書ノ二局ヲ外史ノ所管ト爲ス○六年五月二日無級達ヲ以テ太政官職制章程ヲ更定シ禮部、監



部、財務、法制、庶務、歴史、地誌ノ七課及職制局ヲ置キ内史之ヲ管ス記録用度ノ二課ヲ置キ印書局博覽會事務局ト  
共ニ外史之ヲ管ス●七年二月十二日無職達ヲ以テ法制財務兩課ヲ廢シ其事務ヲ左院ニ屬ス○同年八月三十日無職達ヲ  
以テ正院中地誌課ヲ内務省地理寮ニ合ス●八年四月第五十九號布告ヲ以テ左院ヲ廢シ式部寮ヲ宮内省ニ屬ス又是日  
正院職制章程ヲ改定ス○同年同月第五十七號達ヲ以テ歴史課ヲ修史局ト改稱ス○同年七月三日無職達ヲ以テ正院ニ法  
制局ヲ置キ法制課ヲ廢ス○同年八月第三十八號達ヲ以テ修史局ニ總閱、修撰、書記、繕寫生ノ職員ヲ置ク○同年八月  
第四十號達ヲ以テ正院中ニ儀則課ヲ置ク○同年九月第五十六號達ヲ以テ正院中印書局ヲ大藏省ニ屬ス○同年同月  
第六十七號達ヲ以テ内務省地理寮中地誌課ヲ正院ヘ附シ修史局ヘ合ス○同年同月第六十二號布告ヲ以テ内外史ヲ  
廢シ更ニ正權大少史ヲ置ク○同年同月第六十八號達ヲ以テ法制局ニ長官法制官書記ノ職員ヲ置ク又第六十七號達ヲ  
以テ法制修史二局ノ外諸局課ヲ廢ス○同年十月第五十一號布告ヲ以テ正權大舍人ヲ廢シ更ニ大舍人ヲ置キ官等ヲ定  
ム○同年十二月第九十二號布告ヲ以テ宮内省中式部寮ヲ再ヒ正院ニ屬ス●九年六月第六十二號達ヲ以テ法制局ニ主  
事ヲ置ク○同年十月第九十六號達ヲ以テ正院中ニ賞勳事務局ヲ置キ正副局長、議定官主事秘書官及書記ノ職員ヲ定ム  
○同年十二月第九十九號達ヲ以テ賞勳事務局ヲ改稱ス●十年一月第十號達ヲ以テ正院ノ稱ヲ廢シ大政官ニ稱  
查局ヲ置キ修史局ヲ廢ス又正權大少史主事法制官以下及賞勳局中一級秘書以下ヲ廢シ更ニ正權大少書記官賞勳十等ヲ  
置ク大舍人及等外更故ノ如シ○同年同月第十五號達ヲ以テ修史官ヲ置キ總編輯官賞勳書記官長、幹事ノ職制及等  
級ヲ定ム○同年二月第二十二號達ヲ以テ調査局ニ長官ヲ置キ官等ヲ定ム○同年九月第六十四號達ヲ以テ式部寮ヲ宮内  
省ニ屬ス○同年十月第七十八號達ヲ以テ修史館ニ監事ヲ置キ職制等級ヲ定ム○同年十二月第九十二號達ヲ以テ修史館  
中地誌編輯事務ヲ廢シ更ニ第九十八號達ヲ以テ該事務ヲ内務省地理局ニ附ス●十一年三月第八號達ヲ以テ賞勳局正副  
長官ヲ廢シ更ニ正副總裁ヲ置ク又法制局ニ副長官ヲ置ク●十二年三月第十四號達ヲ以テ大政官中ニ内閣書記官長、正  
權大少内閣書記官ヲ置キ等級ヲ定ム●十三年三月第十七號達ヲ以テ法制調查ノ兩局ヲ廢シ更ニ法制、會計、軍事、內  
務、司法、外務ノ六部ヲ置ク○同年三月第十八號達ヲ以テ大政官中ニ會計檢察院ヲ置キ取扱事務ヲ定ム○同年同月第  
十九號達ヲ以テ會計檢察院ニ院長、幹事、檢查官、庶務ノ職員ヲ置ク○同年同月第二十號達ヲ以テ大政官中六部分掌事  
務ヲ定ム●十四年二月第六號達ヲ以テ大政官中ニ審理局ヲ置キ事務手續ヲ定ム○同年四月第三十五號達ヲ以テ會計檢  
查院職制章程ヲ改定ス○同年五月第四十九號達ヲ以テ大政官中ニ統計院ヲ置キ職制章程ヲ定ム院長、幹事、正權  
大少書記官統計委員庶務ヲ置ク○同年十月第八十八號達ヲ以テ法制、會計、軍事、內務、司法、外務ノ六部ヲ廢ス○

同年同月第八十九號達ヲ以テ大政官中ニ參事院ヲ置キ職制章程ヲ定ム議長、副議長、議員、議官、議員補、員外議員補、書  
記官、書記生ヲ置ク○同年同月無職達ヲ以テ大政官中第一局第二局ヲ廢シ分掌事務ヲ定ム○同年同月第九十一號達ヲ  
以テ大政官中審理局ヲ廢シ其事務ヲ參事院ニ屬ス○同年十二月第八號達ヲ以テ修史館職制ヲ改正シ總裁、正副編輯  
長官、正副監事、編輯官ト爲ス一等書記以下ノ如シ○同年同月第九號達ヲ以テ大政官中大舍人ヲ廢ス●十五年二月  
第五號達ヲ以テ會計檢察院職制章程ヲ改正シ院長、副長、檢查官、書記官、庶務補員ノ職員ト爲ス●十六年五月第  
二十二號達ヲ以テ大政官中ニ文書局ヲ置キ官報編輯ノ事務ヲ掌シシム○同年十二月第六十四號達ヲ以テ修史館ニ副總  
裁ヲ置キ職制ヲ定ム●十七年二月第二號達ヲ以テ大政官中ニ恩給局ヲ置キ職制ヲ定ム局長、主事書記官、屬ノ職員ト  
ス○同年四月第三十四號達ヲ以テ參事院章程ヲ改正ス○同年十二月第一號達ヲ以テ内閣書記官長ヲ勅任ト爲ス●十  
八年十二月第六十九號達ヲ以テ大政大臣、左右大臣、參議、各省刑ノ職制ヲ廢シ更ニ内閣總理大臣及宮内、外務、內  
務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、逓信ノ諸大臣ヲ以テ内閣ヲ組織ス○同年同月第七十號達ヲ以テ工部省ヲ廢シ鐵道事務ヲ内閣ノ直  
轄ト爲ス○同年同月第七十一號達ヲ以テ參事院ヲ廢ス○同年同月第七十二號達ヲ以テ從前大政官所屬ノ事務ヲ姑ク内  
閣ノ管轄トス○同年同月第七十四號達ヲ以テ内閣ニ法制局ヲ置キ官制ヲ定ム○同年同月第七十六號達ヲ以テ内閣文書  
恩給ノ二局ヲ廢シ更ニ記録、會計、官報ノ三局ヲ置キ官制ヲ定ム○同年同月第七十九號達ヲ以テ鐵道局官制ヲ定ム○同  
年同月第八十二號達ヲ以テ賞勳局中主事及一等二等秘書官ヲ廢シ更ニ秘書官、屬ヲ置ク○同年同月第八十三號達ヲ以  
テ統計院ヲ廢シ内閣ニ統計局ヲ置キ官制ヲ定ム●十九年一月第二號達ヲ以テ修史館ヲ廢シ内閣ニ臨時修史局ヲ置キ職  
員ヲ定ム○同年三月第六號達ヲ以テ高等官官等俸給令ヲ定ム○同年同月第十號達ヲ以テ賞勳局職員及官等俸給令ヲ定ム  
○同年四月勅令第二十四號ヲ以テ會計檢察院ノ官制ヲ定ム○同年同月勅令第三十六號ヲ以テ列任官官等俸給令ヲ定ム  
●二十年七月勅令第三十八號ヲ以テ文官試驗委員會官制ヲ定ム●二十一年十月勅令第七十二號ヲ以テ臨時修史局ヲ廢ス  
●二十二年五月法律第十五號ヲ以テ會計檢察院法ヲ定ム○同年十月勅令第三百三十五號ヲ以テ臨時帝國議會事務局ヲ置キ  
職員ヲ定ム帝國議會開會ニ係ル事務ヲ掌ラシム○同年十二月勅令第三百三十五號ヲ以テ内閣官制ヲ定ム●二十三年三月  
勅令第四十八號ヲ以テ文官試驗委員會官制ヲ改正ス○同年六月勅令第九十一號ヲ以テ法制局官制ヲ改正ス○同年同月勅  
令第四百十四號ヲ以テ内閣所屬職員官制ヲ定ム○同年八月臨時帝國議會事務局ヲ廢ス○同年九月勅令第九十八號ヲ以  
テ鐵道局ヲ鐵道總務省ト改稱シ內務大臣ノ管轄ニ屬ス○同年同月勅令第二百九號ヲ以テ賞勳局官制ヲ定ム●二十六年二月



勅令第十一號ヲ以テ法典調査會規則ヲ定ム○同年十月勅令第百十六號ヲ以テ賞勳局官制ヲ改正ス○同年同月勅令第百十七號ヲ以テ賞勳會禮規程ヲ定ム○同年同月勅令第百十八號ヲ以テ法制局官制ヲ改正ス○同年同月勅令第百十九號ヲ以テ内閣所屬職員官制ヲ改正ス○二十七年三月勅令第三十號ヲ以テ法典調査會規則ヲ改正ス○同年五月勅令第四十九號ヲ以テ内閣恩給局ニ顧問醫ヲ置ク○同年同月勅令第五十四號ヲ以テ文官試驗委員官制ヲ改正ス○三十年八月勅令第二百九十五號ヲ以テ臺灣事務局官制ヲ定ム○三十一年二月勅令第二十四號ヲ以テ臺灣事務局ヲ改定ス○同年十月勅令第二百五十五號ヲ以テ内閣所屬職員官制ヲ改正ス○同年同月勅令第二百五十六號ヲ以テ印刷局官制ヲ改正シ大藏省所屬ヨリ内閣ノ所屬ニ移ス○三十二年二月勅令第四十三號ヲ以テ鐵道國有調査會規則ヲ定ム○同年四月勅令第百五十九號ヲ以テ鐵道建築調査會規則ヲ定ム○三十三年三月勅令第八十九號ヲ以テ鐵道國有調査會規則ヲ廢止ス○三十四年十月勅令第百九十二號ヲ以テ議院建築調査會規則ヲ廢止ス○三十五年三月勅令第四十四號ヲ以テ政務調査委員官制ヲ定ム○同年同月勅令第四十五號ヲ以テ續審調査委員官制ヲ定ム○三十六年勅令第二十四號ヲ以テ法典調査會規則ヲ廢ス

●内閣官制明治三十二年十二月  
朕茲ニ内閣官制ヲ裁可ス

内閣官制

- 第一條 内閣ハ國務各大臣ヲ以テ組織ス
- 第二條 内閣總理大臣ハ各大臣ノ首班トシテ機務ヲ奏宣シ旨ヲ承ケテ行政各部ノ統一ヲ保持ス
- 第三條 内閣總理大臣ハ須要ト認ムルトキハ行政各部ノ處分又ハ命令ヲ中止セシメ勅裁ヲ待ツコトヲ得
- 第四條 凡ソ法律及一般ノ行政ニ係ル勅令ハ内閣總理大臣及主任大臣之ニ副署スヘシ勅令ノ各省專任

ノ行政事務ニ屬スル者ハ主任ノ各省大臣之ニ副署スヘシ  
第五條 左ノ各件ハ閣議ヲ經ヘシ

- 一 法律案及豫算決算案
  - 二 外國條約及重要ナル國際條件
  - 三 官制又ハ規則及法律施行ニ係ル勅令
  - 四 諸省ノ間主管權限ノ爭議
  - 五 天皇ヨリ下付セラレ又ハ帝國議會ヨリ送致スル人民ノ請願
  - 六 豫算外ノ支出
  - 七 勅任官及地方長官ノ任命及進退
- 其ノ他各省主任ノ事務ニ就キ高等行政ニ關係シ事體稍重キ者ハ總テ閣議ヲ經ヘシ
- 第六條 主任大臣ハ其所見ニ由リ何等ノ件ヲ問ハス内閣總理大臣ニ提出シ閣議ヲ求ムルコトヲ得
  - 第七條 事ノ軍機軍令ニ係リ奏上スルモノハ天皇ノ旨ニ依リ之ヲ内閣ニ下付セラル、ノ件ヲ除ク外陸軍大臣海軍大臣ヨリ内閣總理大臣ニ報告スヘシ
  - 第八條 内閣總理大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時命ヲ承ケ其ノ事務ヲ代理スヘシ
  - 第九條 各省大臣故障アルトキハ他ノ大臣臨時攝任シ又ハ命ヲ承ケ其ノ事務ヲ管理スヘシ
  - 第十條 各省大臣ノ外特旨ニ依リ國務大臣トシテ内閣員ニ列セシメラル、コトアルヘシ



●賞勳局官制 明治二十六年十月  
勅令第百十六號  
朕賞勳局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

賞勳局官制

第一條 賞勳局ハ内閣ニ隸シ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 勳位、勳章及年金ニ關スル事項
- 二 記章、褒章其ノ他賞件ニ關スル事項
- 三 外國ノ勳章、記章ノ受領及佩用ニ關スル事項

第二條 賞勳局ニ左ノ職員ヲ置ク(三十二年勅令第百  
五十二號ヲ以テ改正)

總裁 一人 勅任

書記官 專任二人 奏任

屬 判任 六人

第三條 總裁ハ局中一切ノ事務ヲ管理シ所部ノ官吏ヲ監督ス

第四條 (三十二年勅令第百五  
十二號ヲ以テ本條削除)

第五條 奏任官ノ進退ハ總裁之ヲ内閣總理大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第六條 書記官ハ總裁ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ掌理ス

第七條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附則

第八條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●賞勳會議規程 明治二十六年十月  
勅令第百十七號

朕賞勳會議規程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

賞勳會議規程

第一條 勳位、勳章及年金ノ敘賜又ハ褫奪ノ當否ヲ議定スル爲賞勳局ニ賞勳會議ヲ設ク

第二條 賞勳會議ハ賞勳局總裁及議定官ヲ以テ組織ス(三十二年勅令第百五十三號  
ヲ以テ同題總裁ノ四字ヲ削ル)

第三條 賞勳會議ノ議長ハ賞勳局總裁ヲ以テ之ニ充ツ總裁事故アルトキハ上席議定官之ヲ代理ス

(三十二年勅令第百五十三號ヲ  
以テ副總裁又ハノ五字ヲ削ル)

第四條 議定官ハ十五人以内トシ勅任官ニシテ勳二等以上ノ者ノ中ヨリ之ニ補ス(三十二年勅令第百五十三號ヲ以テ  
第二項ヲ  
削除ス)

第五條 前條ノ外特ニ皇族ヲ以テ議定官ニ補セラル、コトアルヘシ

第六條 勳位、勳章及年金ノ敘賜又ハ褫奪ハ議定官八人以上ノ議ヲ經ルニアラサレハ之ヲ上奏ス

ルコトヲ得ス

第七條 議定官ノ議ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第八條 賞勳會議ノ事務ハ賞勳局總裁之ヲ管掌ス

附則

第五類 賞勳局官制 賞勳會議規程



第九條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●法制局官制(明治二十六年十月  
勅令第百十八號)

朕法制局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法制局官制

第一條 法制局ハ内閣ニ隸シ左ノ事務ヲ掌ル

一 内閣總理大臣ノ命ニ依リ法律命令案ヲ起草シ理由ヲ具ヘテ上申スルコト

二 法律命令ノ制定、廢止、改正ニ付意見アルトキハ案ヲ具ヘテ内閣ニ上申スルコト

三 各省大臣ヨリ閣議ニ提出スル所ノ法律命令案ヲ審査シ意見ヲ具ヘ又ハ修正ヲ加ヘテ内閣ニ上申スルコト

四 前諸項ニ掲クルモノ、外内閣總理大臣ヨリ諮詢アルトキハ意見ヲ具ヘテ上申スルコト

第二條 法制局ニ左ノ職員ヲ置ク(三十二年勅令第百五十四號ヲ以テ改正  
三十七年勅令第二十一號ヲ以テ條中改正)

長官 一人 勅任

參事官 專任十人 奏任 内二人ヲ勅任ト  
爲スコトヲ得

書記官 二人 奏任 參事官ナシテ  
之ヲ兼テシム

屬 專任九人 判任 (三十五年勅令第五十  
七號ヲ以テ定員改正)

法制局ニ左ノ二部ヲ置ク其ノ事務分掌ハ長官之ヲ定ム

第一部

第二部

部長ハ參事官ヲ以テ之ヲ充ツ

第三條 長官ハ局中一切ノ事務ヲ管理シ所部ノ官吏ヲ監督ス

第四條 奏任官ノ進退ハ長官之ヲ内閣總理大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第五條 長官事故アルトキハ上席參事官其ノ職務ヲ代理ス

第六條 參事官ハ長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル

第七條 書記官ハ長官ノ命ヲ承ケ局中ノ事務ヲ掌理ス

第八條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

第九條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●文官試験委員官制(明治二十七年五月  
勅令第百五十四號)

朕文官試験委員官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官試験委員官制

第一章 文官高等試験委員

第一條 文官高等試験委員ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ文官高等試験及奏任文官任用ノ銓衡ニ關スル



事務並文官普通試験科目ニ關スル事務ヲ管掌ス

第二條 文官高等試験委員ハ委員長常任委員及臨時委員ヲ以テ組織シ各官廳高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第三條 文官高等試験委員長ハ委員ヲ監督シ其ノ一切ノ事務ヲ統理ス

第四條 文官高等試験常任委員ハ三人ヲ以テ定員トス委員長ノ監督ヲ承ケ文官高等試験及奏任文官任用ノ銓衡ニ關スル事務並文官普通試験科目ニ關スル事ヲ掌ル

第五條 文官高等試験臨時委員ハ文官高等試験施行ノ際之ヲ命ス委員長ノ監督ヲ承ケ文官高等試験ノ事ヲ掌ル

第六條 文官高等試験委員長及常任委員ニハ一箇年三百圓以内臨時委員ニハ二百圓以内ニ於テ事務ノ繁簡ニ從ヒ手當トシテ之ヲ給ス

第七條 文官高等試験委員ノ事務ニ關シ常任書記及臨時書記ヲ置ク

第八條 常任書記ハ内閣所屬又ハ法制局判任官臨時書記ハ各官廳ニ奉職スル吏員ノ中又ハ其ノ他ヨリ之ヲ命ス

第九條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十條 書記ニハ事務ノ繁簡ニ從ヒ百圓以内ノ手當ヲ給ス

第二章 文官普通試験委員

三十二年  
勅令第百二十號  
八月二十日  
統制局長ハテ  
ス  
任官トナ  
得ル

第十一條 文官普通試験委員ハ之ヲ各官廳ニ置ク長官ノ監督ニ屬シ文官普通試験及判任文官任用ノ銓衡ニ關スル事務ヲ管掌ス

第十二條 中央官廳ノ文官普通試験委員長及委員ハ長官其ノ應ノ高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

第十三條 地方官廳ノ文官普通試験委員長及委員ハ長官其ノ應ノ官吏及府縣立學校教官ノ中ヨリ之ヲ命ス但北海道ニ在テハ札幌農學校教官ヲ以テ之ニ加フルコトヲ得

第十四條 文官普通試験委員長ハ委員ヲ監督シ其ノ一切ノ事務ヲ統理ス

第十五條 文官普通試験委員ハ委員長ノ監督ヲ承ケ文官普通試験及判任文官任用ノ銓衡ニ關スル事務ヲ掌ル

第十六條 文官普通試験委員ノ事務ニ關シ書記ヲ置キ各官廳ノ判任官ノ中ヨリ之ヲ命ス

書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

●内閣所屬職員官制 明治三十一年十月 勅令第三百五十五號

内閣所屬職員官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 内閣所屬ノ職員左ノ如シ

書記官長	二人	勅任
統計局長	一人	勅任



恩給局長 一人 勅任法制局長官ナシ  
テ之ヲ兼テシム

書記官 專任四人 奏任

内閣總理大臣祕書官 專任二人 奏任

統計局審査官 專任二人 奏任

恩給局審査官 專任一人 奏任

第二條 書記官長ハ内閣總理大臣ノ命ヲ承ケ機密文書ヲ管掌シ内閣ノ庶務ヲ統理シ及判任官以下ノ進退ヲ專行ス

第三條 書記官ハ内閣總理大臣又ハ書記官長ノ命ヲ承ケ左ノ事務ヲ掌ル

一 詔勅及法律命令ノ發布ニ關スル事項

二 大日本帝國憲法及法律勅令ノ原本ノ保存ニ關スル事項

三 公文ノ査閲、起草、受授及保存ニ關スル事項

四 官印ノ管守ニ關スル事項

五 内閣ノ會計ニ關スル事項

六 各廳高等官ノ履歷ニ關スル事項

七 内閣記録ノ編纂ニ關スル事項

八 内閣所管圖書ノ類別、購買、保存及出納並其ノ目錄調製ニ關スル事項

九 内閣所用圖書ノ出版ニ關スル事項

第四條 各局長ハ内閣總理大臣又ハ内閣書記官長ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第五條 統計局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 行政各部統計ノ統一ニ關スル事項

二 行政各部ニ專屬セサル統計ニ關スル事項

三 統計ニ關スル報告ノ刊行ニ關スル事項

四 内外統計表ノ交換ニ關スル事項

五 各官廳ノ統計主任者ノ招集及會議ニ關スル事項

第六條 恩給局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 恩給及扶助料ヲ受クヘキ資格及權利ノ審査並裁決ニ關スル事項

二 恩給及扶助料ノ支給ニ關スル事項

第七條 内閣總理大臣祕書官ハ大臣官房ノ事務ヲ掌ル

第八條 統計局審査官ハ統計局長ノ命ヲ承ケ各種ノ統計ヲ擔任ス

第九條 恩給局審査官ハ恩給局ノ事務ヲ掌ル

第十條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附 則

第十一條 本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス



●内閣恩給局ニ顧問醫ヲ置ク 明治二十七年五月 勅令第四十九號

朕内閣恩給局ニ顧問醫ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 内閣恩給局ニ顧問醫ヲ置キ其ノ定員ヲ三名トシ内一名ヲ常務顧問醫トス

第二條 顧問醫ハ恩給局長ノ諮詢ニ應ジ恩給及扶助料ニ關スル醫術上ノ事項ヲ審査ス但恩給局長ニ於テ總顧問醫ノ意見ヲ聞クヲ必要ト認メサルモノハ常務顧問醫之ヲ審査ス

第三條 審査上特種ノ専門家ヲ要スル場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第四條 顧問醫ハ恩給局長ニ於テ内閣總理大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ囑托ス

第五條 常務顧問醫ニハ一箇年五百圓以内其ノ他ノ顧問醫ニハ事件ノ輕重難易ヲ斟酌シ每件三圓以上十圓以下ノ手當ヲ給ス

●印刷局官制 明治三十一年十月 勅令第三百五十六號

朕印刷局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

印刷局官制

第一條 印刷局ハ内閣總理大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル(三十三年勅令第五十八號ヲ以テ二號三號改正)

一 官報、法令全書及職員録ノ編輯並發賣ニ關スル事項

二 官報其ノ他ノ印刷ニ關スル事項

三 印紙、郵便切手並諸證券類ノ製造ニ關スル事項

四 抄紙ニ關スル事項

第二條 印刷局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長 一人 勅任

事務官 專任一人 奏任

技師 專任六人 (三十三年勅令第五十八號ヲ以テ定員改正)

屬 三十四人 判任 (三十五年勅令第五十八號ヲ以テ定員改正)

技手 四十二人 (同上)

第三條 局長ハ内閣總理大臣又ハ内閣書記官長ノ命ヲ承ケ局中一切ノ事務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 事務官ハ局長ノ命ヲ承ケ事務ヲ掌ル

第五條 技師ハ局長ノ命ヲ承ケ工務ヲ監理ス

第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工務ニ従事ス

附則

第八條 本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

●政務調査委員官制 明治三十五年三月 勅令第四十四號

第五類 内閣恩給局ニ顧問醫ヲ置ク 印刷局官制 政務調査委員官制

三十一年十月  
勅令第三百五十六號  
印刷局官制  
改正



朕政務調査委員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

政務調査委員官制

- 第一條 政務調査委員ハ内閣總理大臣ノ指揮監督ヲ承ケ諸般ノ政務ニ關スル事項ヲ調査ス
- 第二條 委員ハ三十人以内トシ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第三條 政務調査ノ事務ニ關シ主事二人書記若干人ヲ置ク  
主事ハ委員ノ中ヨリ書記ハ判任官ノ中又ハ其ノ他ヨリ内閣總理大臣之ヲ命ス  
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

●鑛毒調査委員官制 明治三十五年三月 勅令第四十五號

朕鑛毒調査委員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

鑛毒調査委員官制

- 第一條 鑛毒調査委員會ハ内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ鑛毒ニ關スル實況及處分ノ方法ヲ調査ス
- 第二條 鑛毒調査委員會ハ委員長一人委員十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第三條 委員長及委員ハ内閣、内務省、大藏省、農商務省ノ高等官及帝國大學教授ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス
- 第四條 委員長ハ會務ヲ處理シ調査ノ結果ヲ内閣總理大臣ニ具申スヘシ

第五條 委員長ハ調査事項ニ關シ關係官應ニ事實ノ説明及書類ヲ提供ヲ求ムルコトヲ得

第六條 委員長ハ事項ヲ指定シ關係官應ニ其ノ調査ヲ求ムルコトヲ得

第七條 委員ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ調査ニ從事ス

第八條 鑛毒調査委員會ニ主事二人ヲ置ク

第九條 主事ハ委員長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十條 主事ハ委員長所屬官應高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十一條 鑛毒調査委員會ニ書記若干人ヲ置キ委員長所屬官應判任官ノ中又ハ其ノ他ヨリ委員長之ヲ命

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

●樞密院官制及事務規程 明治二十一年四月 勅令第二十二號

朕元勳及練達ノ人ヲ選ミ國務ヲ諮詢シ其啓沃ノ力ニ倚ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ朕カ至高顧問ノ府トナシトス茲ニ其官制及事務規程ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

樞密院官制

- 第一章 組織
- 第一條 樞密院ハ天皇親臨シテ重要ノ國務ヲ諮詢スル所トス
- 第二條 樞密院ハ議長一人副議長一人顧問官二十五人書記官長一人書記官三人ヲ以テ組織ス (二十三年勅令第二)



百十六號ヲ以テ改正シ及二十六勅令第  
百二十號ヲ以テ書記官五人ヲ三人ニ改ム

第三條 樞密院ノ議長副議長顧問官ハ親任書記官長ハ勅任書記官ハ奏任トス

第四條 何人タリトモ年齢四十歳ニ達シタルモノニ非サレハ議長副議長及顧問官ニ任スルコトヲ得ス

第五條 議長ハ書記官ノ内ヲ以テ秘書官ヲ兼テシムルコトヲ得

第二章 職掌

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏ス(二十三年勅令第二百十  
六號ヲ以テ各號共改正)

一 皇室典範ニ於テ其權限ニ屬セシメタル事項

二 憲法ノ條項又ハ憲法ニ附屬スル法律勅令ニ關スル草案及疑義

三 憲法第十四條戒嚴ノ宣告同第八條及第七十條ノ勅令及其他罰則ノ規定アル勅令

四 列國交渉ノ條約及約束

五 樞密院ノ官制及事務規程ノ改正ニ關スル事項

六 前諸項ニ掲ケルモノハ外臨時ニ諮詢セラレタル事項

第七條 前條第三項ニ掲ケタル勅令ニハ樞密院ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載スヘシ

第八條 樞密院ハ行政及立法ノ事ニ關シ天皇ノ至高ノ顧問タリト雖モ施政ニ干與スルコトナシ

第三章 會議及事務

第九條 樞密院ノ會議ハ顧問官十名以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第十條 樞密院ノ會議ハ議長之ニ首席シ議長事故アルトキハ副議長之ニ首席ス議長副議長共ニ事故ア

ルトキハ顧問官其席次ニ依リ首席スヘシ

第十一條 各大臣ハ其職權上ヨリ樞密院ニ於テ顧問官タルノ地位ヲ有シ議席ニ列シ議決ノ權ヲ有ス又

各大臣ハ委員ヲ差シテ會議ニ出席シ演述及説明ヲ爲サシムルコトヲ得但表決ノ數ニ加ラス

第十二條 樞密院ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス但可平等ノ場合ニ於テハ會議首席ノ決スル所ニ依ル

第十三條 議長ハ樞密院ニ屬スル一切ノ事務ヲ總管シ樞密院ヨリ發スル一切ノ公文ニ署名ス

副議長ハ議長ノ職務ヲ輔佐ス

第十四條 書記官長ハ議長ノ監督ヲ受ケ樞密院ノ常務ヲ管理シ一切ノ公文ニ副署シ會議ニ付スヘキ事

項ヲ審査シテ報告書ヲ調製シ會議ニ列シ辯明ノ任ニ當ル但表決ノ數ニ加ラス

書記官ハ會議ニ於テ議事ヲ筆記シ及書記官長ノ職務ヲ輔佐シ書記官長事故アルトキハ書記官之ヲ代

理ス

前項ノ筆記ハ出席員ノ姓名會議ノ事件質問答辯及議決ノ要旨ヲ記載スルモノトス

第十五條 特別ノ場合ヲ除クノ外豫メ審査報告書ヲ調製シ其會議ニ必要ナル書類ト共ニ之ヲ各員ニ配

達シタル後ニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

議事日程及報告ハ豫メ各大臣ニ通報スヘシ

樞密院事務規程

第一條 樞密院ハ勅命ニ由リ會議ニ付セラレタル事項ニ付意見ヲ述フ

第二條 樞密院ハ帝國議會若クハ其一院又ハ官署又ハ臣民ヨリ請願上書其他通信ヲ受領スルコトヲ得



第三條 樞密院ハ内閣及各省大臣トノミ公務上ノ交渉ヲ有シ其他ノ官署帝國議會又ハ臣民トノ間ニ文書ヲ往復シ又ハ其他ノ交渉ヲ有スルコトヲ得ス

第四條 議長ハ樞密院ニ到達スルノ事項ハ書記官長ニ下付シテ之ヲ審査セシメ及會議ニ付スヘキ事項ノ報告ヲ調製セシム

議長ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テ親ラ報告ノ任ニ當リ又ハ顧問官一人若クハ數人ニ之ヲ任スルコトヲ得ヘシ

第五條 審査報告書ハ報告員ヨリ之ヲ議長ニ提出スヘシ

臨時緊急ノ場合ニ於テハ口頭ヲ以テ報告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ其要領ヲ簡短ニ第八條ニ載スル件名簿ニ記入スヘシ

第六條 議長ハ審査報告書ヲ整頓スヘキ期日ヲ限定スルコトヲ得報告ハ成ルヘク速ニ之ヲ調製シテ遞延スルコトヲ許サス

内閣ハ至急ヲ要スル事件ニ付其由ヲ通知シ及其會議ノ期日ヲ限定スルコトヲ得

第七條 審査報告書ハ附屬文書ト共ニ其會議ヲ開クノ日ヨリ少クモ三日以前ニ之ヲ各員ニ配達スヘシ

第八條 件名簿ハ會議ノ期日ノ順序ニ從ヒ之ヲ記入スヘシ件名簿ニ登載スヘキ事項ハ第一事件ノ性質第三會議ノ前文書配達ノ日時第三其會議ノ期日等トス

會議ニ付スヘキ各件ニ就テハ前項ニ同シキ議事日程ヲ調製シ其會議ヲ開クノ日ヨリ三日以前ニ各員

ニ通報スヘシ此通報ハ會議ノ招狀ヲ兼スルモノトス

第九條 樞密院ノ會議ノ日時ハ議長之ヲ定ム但各大臣ハ其日時ノ變更ヲ求ムルコトヲ得

第十條 樞密院ノ會議ハ左ノ規程ニ循由シ議長若クハ副議長之ヲ整理スヘシ

議長ハ書記官長ヲシテ其事件ヲ辯明セシメ次テ各員ヲシテ自由ニ討論セシム何人タリト雖モ議長ノ許可ヲ受クルニ非レハ發言スルコトヲ得議長ノ討論ニ參與スルハ其自由ニ屬スルモノトス討論既ニ盡ルノ後ハ議長ヨリ問題ヲ定メ表決ヲ爲サシム(二十三年勅令第二百十六號ヲ以テ本項改正)

議決ノ結果ハ議長之ヲ言明スヘシ

第十條 議事日程ニ掲載シタル事件ノ會議其當日ニ結了セサルトキハ之ヲ他日ニ延會スルコトヲ得此場合ニ於テハ更ニ常例ノ定式ヲ踐行スルコトヲ要セス

第十二條 樞密院ノ會議ノ意見ハ書記官長又ハ書記官表決ノ結果ニ依リ之ヲ起草シ議長ノ檢閲ヲ請フヘシ此意見ニハ理由ヲ附シ重要ノ事件ニ就テハ討論ノ要領書ヲ附屬スヘシ

反對ノ議論ヲ主持シタル出席員ハ其表決ト其理由トヲ議事筆記理由書又ハ要領書ニ記入セラレンコトヲ求ムルコトヲ得

第十三條 前條ノ意見ハ議長ヨリ天皇ニ上奏シ同時ニ内閣總理大臣ニ通報スヘシ

第十四條 樞密院ノ會議ノ議事筆記ハ議長及書記官長又ハ出席書記官之ニ署名シ其正確ヲ表明スヘシ

●樞密院ニ屬シ置ク 明治二十一年五月  
勅令第四十一號

第五類 樞密院官制及事務規程 樞密院ニ屬シ置ク







以テ諸省事務章程通則第十條ヲ改定ス。○同年三月二十三號ヲ以テ宮中ニ制度取調局ヲ置ク。○同年三月二十五號  
以テ侍從長、侍從、侍從候補ヲ廢シ更ニ侍從職ヲ置キ侍從長、侍從、內監ノ職員ト爲シ官等ヲ定ム。○同年四月第  
三十一號ヲ以テ皇居御遊警務局中總長、副總長ヲ廢ス又第三十一號ヲ以テ同局ヲ宮内省直轄ト爲ス。○同年四月第  
第三十三號ヲ以テ內藏寮ヲ置キ正權頭、正權助、屬ノ職員ト爲シ官等ヲ定ム。○同年五月第四十三號ヲ以テ內藏寮  
職制ヲ定ム。○同年八月第七十一號ヲ以テ正權命婦ヲ授任官ト爲ス。○同年七月二十二號ヲ以テ圖書寮ヲ置キ正權  
頭、正權助、屬ノ職員ト爲シ職制ヲ定ム。○同年九月第七十三號ヲ以テ學習院職制及職員名稱等級ヲ定ム。○同年十月  
八十號ヲ以テ式部寮ヲ廢シ更ニ式部職ヲ置キ職制ヲ定ム。○同年十一月第八十一號ヲ以テ華族局職制ヲ定ム。○同年十  
一月第九十三號ヲ以テ侍從候補ヲ置キ官等ヲ定ム。○同年十二月第九十八號ヲ以テ本省中舍人ヲ置キ列任官ト爲シ以テ  
之ニ先テ其職制ヲ定ム。○同年同月第九十九號ヲ以テ陸軍、陸下、海軍、海下及守下ヲ廢シ更ニ守長、守部ヲ置キ官  
級ヲ定ム。○十八年九月五日華族女學校ヲ設置シ宮内省ノ所轄トス。○同年十二月第六十八號ヲ以テ宮中ニ內大臣宮中  
顧問官及內大臣秘書官ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年同月第六十九號ヲ以テ各省制ノ職制ヲ廢シ更ニ宮內大臣ヲ置ク。○同  
年同月第七十一號ヲ以テ制度取調局ヲ廢ス。○同年同月第七十三號ヲ以テ御料局並內匠寮ヲ置キ職制ヲ定ム。○十九  
年二月宮内省第一號ヲ以テ官制ヲ定ム。○同年同月宮内省第二號ヲ以テ華族女學校職員官等ヲ改定ス。○同年同月十  
五日宮内省外號ヲ以テ勅奏任ノ官等ヲ改定ス。○同年五月宮内省第五號ヲ以テ主殿寮中門監、門監補門部、消防監、  
消防監補、警備消防手ヲ廢シ更ニ皇宮警察署ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年六月宮内省第八號ヲ以テ學習院職員及官等ヲ  
改定ス。○二十一年一月宮内省第一號ヲ以テ博物館圖書寮ニ屬シテ同省第二號ヲ以テ之レヲ官制ヲ定ム。○同年  
四月宮内省第七號ヲ以テ帝室會館番查局ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年同月宮内省第八號ヲ以テ主殿局ヲ置キ官制等級  
ヲ定ム。○同年五月宮内省第十二號ヲ以テ式部職中雅樂長以下ヲ廢シ更ニ雅樂部長以下ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年同月  
宮内省第十四號ヲ以テ華族局ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年同月宮内省第十五號ヲ以テ侍從長ヲ授任トス。○  
同年九月宮内省第十八號ヲ以テ內匠寮中匠師、匠手、匠手補及御料局中技師、技手ヲ廢シ更ニ內匠寮、主馬寮、御  
料局中ニ技術官ヲ置キ官等ヲ定ム。○同年十一月宮内省第二十三號ヲ以テ主馬寮中取寄、馬醫ヲ廢シ更ニ車馬監  
外八職ヲ置キ技術官ト爲シ之ニ稱ス。○二十二年二月宮内省第三號ヲ以テ御料局中理事ヲ置キ官等ヲ定ム。○同年  
五月同省第六號ヲ以テ圖書寮附屬博物館ヲ廢シ更ニ帝國博物館帝國京師博物館帝國圖書寮博物館ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年  
第七號ヲ以テ三博物館ニ官吏ノ外評議員、學藝委員ヲ設ケ其待遇ヲ定ム。○同年七月同省第十號ヲ以テ宮内省官

二十四年宮  
中顧問官及  
內大臣秘書  
官制  
明治十八年  
十二月太  
政官第六十八號  
以テ官等ヲ  
改定ス

制ヲ改定ス。○同年同月同省第十一號ヲ以テ皇族職員官等ヲ改メ俸給支給方ヲ定ム。○同年同月同省第十二號ヲ以テ  
內大臣以下ノ俸給ヲ改定ス。○同年九月同省第十六號ヲ以テ御料局支應職制ヲ定ム。○同年十一月同省第二十一號ヲ  
以テ宮内省中東宮職ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年十二月勅令第三百三十八號ヲ以テ東宮武官官制ヲ定ム。○同年同月宮内省第  
二十二號ヲ以テ學習院官制ヲ改定ス。○二十三年一月同省第一號ヲ以テ皇族職員職制ヲ定ム。○同年十月同省第二十  
八號ヲ以テ侍從職ニ給事ヲ置キ官制ヲ定ム。○同年十一月同省第二十一號ヲ以テ  
錦織間候任官ノ待遇トス。○同年十二月同省第二十三號ヲ以テ宮中ニ文事秘書局ヲ置キ官制ヲ定ム。○二十四年  
六月勅令第六十一號ヲ以テ東宮武官官制ヲ改定ス。○同年九月同省第二號ヲ以テ御料局支應附屬大阪製煉所職制ヲ  
定ム。○同年十二月同省第四號ヲ以テ宮内高等官官等ヲ廢シ更ニ官等九等ヲ設ケ一等ヨリ三等マテヲ勅任トシ四等  
ヨリ九等マテヲ授任トシ其他官制中ヲ改廢ス。○同年同月同省第五號ヲ以テ宮中顧問官ノ俸給ヲ廢止ス。○二十五年  
五月同省第三號ヲ以テ御料局佐渡支應附屬王子製鐵所職制ヲ定ム。○同年同月宮内省第六號ヲ以テ官等ヲ改定  
ス。○同年第七號ヲ以テ官制中式部官及主殿官ノ定員ヲ改メ。○二十七年一月同省第一號ヲ以テ御遊警守長ヲ授任  
待遇トス。○二十八年十二月宮内省第一號ヲ以テ王子製鐵所職制ヲ廢止ス。○二十九年四月勅令第三百十三號ヲ以テ侍  
從武官官制ヲ定ム。○同年八月勅令第二百八十一號ヲ以テ皇族附屬陸軍武官官制ヲ定ム。○三十年十月勅令第三百六十一號  
ヲ以テ皇族附屬海軍武官官制ヲ定ム。○同年同月勅令第三百七十一號ヲ以テ東宮武官官制ヲ改定ス。○同年同月宮内省第六  
第七號ヲ以テ東宮御所御遊警局官制ヲ定ム。○三十一年八月宮内省第五號ヲ以テ學習院官制ヲ改定ス。○同年同月同省第六  
號ヲ以テ東宮御所御遊警局官制ヲ定ム。○三十三年六月宮内省第三號ヲ以テ帝國博物館官制ヲ定メ従前ノ三博物館ノ  
名稱ヲ改メ

●內大臣宮中顧問官及內大臣秘書官官制  
宮中ニ內大臣宮中顧問官及內大臣秘書官ヲ置キ官制ヲ定ムルコト左ノ如シ

內大臣 一人 親任  
一 御親國體ヲ尙藏ス











課務ヲ掌理ス  
 調査課長 一人 宮内書記官又ハ省中高等官ヨリ兼補  
 帝室ニ關スル制合法規及財産財務ニ關スル文案ヲ起草審査シ兼テ報告統計ノ事ヲ掌理シ課員ヲ監督ス  
 調査課次長 一人 宮内書記官又ハ省中高等官ヨリ兼補  
 課務ヲ掌理ス  
 宮内屬 判任  
 第二十八條 宮内省ニ左ノ各部局ヲ設ケ事務ヲ分管ス  
 侍從職  
 式部職 (三十年宮内省建甲第四號ヲ以テ皇太后宮職ヲ廢ス)  
 皇后宮職  
 内藏寮  
 御料局  
 符位局  
 大膳職  
 主殿寮附皇宮警察署

二十一年四月  
 内省及二十  
 四年及二十  
 五年及二十  
 六年及二十  
 七年及二十  
 八年及二十  
 九年及三十  
 年及三十一年  
 及三十年  
 及三十年  
 及三十年

圖書寮  
 内匠寮  
 主馬寮  
 諸陵寮  
 侍醫局  
 主獵局  
 調度局  
 帝室會計審査局  
 第二十九條 侍從職ニ左ノ職員ヲ置キ常侍奉仕シ主管ニ屬スル御服御物ヲ管守ス  
 侍從長 一人 親任  
 職務ヲ總理シ職員ヲ監督ス  
 幹事 一人 一、二等 (二十三年宮内省建第十號ヲ以テ本項追加)  
 侍從長ヲ輔ケ職務ヲ整理シ職員ヲ監督ス  
 侍從 十五人 二人 二等  
 十三人 三等以下六等以上  
 常侍奉仕シ御服御物ヲ分掌ス  
 侍從試補 三人 七、八等  
 掌侍從ニ亞ク

第五期 宮内省官制



侍從屬

判任

第三十條 式部職ニ左ノ職員ヲ置キ帝室ノ祭儀典式及雅樂ノ事ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル  
但式部官掌典ハ名譽職ヲ置クコトヲ得

式部長 一人 一等

職務ヲ總理シ職員ヲ監督ス 一人 二等

式部次長 一人 二等

職務ヲ掌理ス 二人 奏任  
式部官ヨリ兼任

式部主事 二人 奏任  
式部官ヨリ兼任

庶務ヲ掌理ス 二十八人 (二等五人及三等以下ノ内十七人ヲ名譽官トス)

儀式ノ務ニ服ス

式部屬 判任

掌典長 一人 一等

祭典ヲ掌ル 九人 奏任

掌典 九人 奏任

祭典ニ從事ス 判任

掌典補 判任

二十四年  
四月及二十  
五年同省  
甲第七號  
ノ以テ式部  
官ヲ改正ス

雅樂部長 一人 准奏任五等六等 (三十四年宮内省通甲第  
一號ヲ以テ本項中刪除)

雅樂部ヲ掌理シ部員ヲ監督ス 一人 准奏任七等八等

雅樂部副部長 一人 准八等 (三十年宮内省通甲第十  
一號ヲ以テ本項追加)

雅樂師長 一人 准八等 (上) (同)

教授及奏樂ヲ掌ル 一人 准八等 (上) (同)

雅樂師 一人 准判任四等以上 (三十年宮内省通甲第  
十二號ヲ以テ改正)

雅樂手 一人 准判任五等六等 (上) (同)

雅樂生 一人 等外 (上) (同)

樂師 一人 准判任四等以上 (上) (同)

樂手 一人 准判任五等六等 (上) (同)

樂生 一人 等外 (上) (同)

第三十一條 (三十年宮内省通甲第四  
號ヲ以テ本條ヲ廢止ス)  
第三十二條 皇后宮職ニ左ノ職員ヲ置キ宮事及内廷ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル  
皇后宮大夫 一人 一等



職務ヲ總理シ職員ヲ監督ス

皇后宮亮 一人 奏任

職務ヲ掌理ス

皇后宮副 判任

第三十三條 内藏寮ニ左ノ職員ヲ置キ皇室經費及主管ニ屬スル財産會計ヲ管理ス

内藏頭 一人 一等二等

寮務ヲ總理シ寮員ヲ監督ス 二人 奏任(三十五年宮内省達甲第二號ヲ以テ改正)

寮務ヲ掌理ス

内藏屬 判任

第三十四條 御料局ニ左ノ職員ヲ置キ世傳御料及主管ニ屬スル財産會計ヲ管理ス

御料局長 一人 一等二等

局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス 一人 奏任(三十四年宮内省達甲第一號ヲ以テ定員ヲ改ム)

局務ヲ掌理ス

御料局理事 三人 奏任(上同)

支廳長ニ任ス其職制ハ別ニ之ヲ定ム

御料局副 判任

御料局技師 二十八人 奏任(上同)

御料地ノ實業ニ従事ス

御料局技手 判任

御料局技手補 判任四等以下(二十三年宮内省達第十三號ヲ以テ六等以下ヲ四等以下ト改ム)

第三十五條 爵位局ニ左ノ職員ヲ置キ爵位及華族ニ關スル事務ヲ管理ス

爵位局長 一人 一等二等

局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス

爵位局主事 三人 奏任

局務ヲ掌理ス

爵位局副 判任

爵位局審理官 臨時省中高等官ヨリ兼補

「華族懲戒審理ノ事ヲ掌ル」

第三十六條 大膳職ニ左ノ職員ヲ置キ供御饗宴及其器具ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌

ル 但皇太后宮職主管ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

二十三年勅令第六十號  
華族懲戒審理官  
官止ニ付審理  
族懲戒審理  
官止ニ付審理



大膳大夫 一人 二等三等  
 職務ヲ總理シ職員ヲ監督ス  
 大膳亮 一人 四等以下  
 職務ヲ掌理ス  
 大膳屬 判任  
 膳部長 准判任 一等二等 (三十四年宮内省達甲 第四號ヲ以テ改正)  
 膳部副長 准判任 二等三等 四等 (上) (同)  
 膳部 准判任 三等以下 (上) (同)  
 膳部補 等外  
 第三十七條 主殿寮ニ左ノ職員ヲ置キ宮殿離宮及其附屬物件並ニ鎖鑰洒掃舖設ニ關スル事務ヲ管理シ兼テ皇宮警察署ヲ統轄ス  
 但待從職「皇太后宮職」「皇后宮職」主管ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス  
 主殿頭 一人 二等三等  
 寮務ヲ總理シ寮員ヲ監督ス  
 主殿助 二人 四等以下  
 寮務ヲ掌理ス但一人ハ京都出張所長ニ補ス  
 主殿屬 判任

皇宮警察長 一人 四等五等  
 宮殿離宮ノ守門防火警察ノ事ヲ掌理シ部下ヲ監督ス  
 皇宮警察次長 一人 六等以下  
 署務ヲ掌理ス  
 皇宮警部 判任 五等以上 (二十三年宮内省達第四號) (ヲ以テ八等ヲ五等ト改ム)  
 皇宮警部補 判任 六等 (九等以下トアルヲ六等ト改ム) (三十二年宮内省達第一號ヲ以テ)  
 皇宮警手 判任 待選 (三十二年宮内省達第一號ヲ以テ) (以テ等外ヲ判任待選ニ改ム)  
 舍人 准判任  
 内舍人 准判任 官准官ノ内ヨリ兼補  
 仕人 准判任 三等以下 (三十四年宮内省達甲第四號ヲ以テ) (以テ四等トアルヲ三等ト改ム)  
 第三十八條 圖書寮ニ左ノ職員ヲ置キ帝室ノ圖書記録ヲ保管シ皇統譜皇族牒籍ニ關スル事務ヲ管理ス  
 圖書頭 一人 二等三等  
 寮務ヲ總理シ寮員ヲ監督ス  
 圖書助 一人 四等以下  
 寮務ヲ掌理ス  
 圖書屬 判任  
 第三十九條 内匠寮ニ左ノ職員ヲ置キ宮殿離宮庭園及應舎ノ土木ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル



會計ヲ掌ル

「和皇太后宮職ノ主管ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス」

内匠頭 一人 二等三等

寮務ヲ掌理シ寮員ヲ監督ス

内匠助 一人 四等以下

寮務ヲ掌理ス

内匠屬 判任

内匠寮技師 五人 奏任

土木ノ實業ニ従事ス

内匠寮技手 判任

第四十條 主馬寮ニ左ノ職員ヲ置キ車馬乘具調馬及牧場ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル

主馬頭 一人 二等三等

寮務ヲ總理シ寮員ヲ監督ス

主馬助 一人 四等以下

寮務ヲ掌理ス

主馬屬 判任

車馬監 一人 五等以下

車馬乘具ヲ管守シ馬匹飼養調習醫療ノ事ヲ監督ス

調馬師 三人 六等以下(三十五年宮内省達甲第  
一號ヲ以テ定員ヲ増ス)

乘馬調習ニ従事ス

馬醫師 一人 六等以下

馬匹醫療ニ従事ス

主馬寮技師 三人 奏任(三十二年宮内省達甲第五號  
ヲ以テ二人ヲ三人ニ改ム)

牧場ノ事務長ニ任シ實務ニ従事ス

馬醫 判任

主馬寮技手 判任

調馬手 准判任

馭者 准判任

掌車 准判任

第四十一條 諸陵寮ニ左ノ職員ヲ置キ陵墓ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル

諸陵頭 一人 二等三等

寮務ヲ總理シ寮員ヲ監督ス

諸陵助 一人 四等以下

第五類 宮内省官制



寮務ヲ掌理ス  
 諸陵廟  
 諸陵寮技手  
 守長  
 守部  
 第四十二條 侍醫局ニ左ノ職員ヲ置キ診候醫藥衛生ニ關スル事務ヲ管理ス  
 侍醫局長 一人 勅任侍醫ヨリ兼任  
 局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス  
 侍醫 十六人 一 等以下(三十年宮内省達甲第九號ヲ以テ二等トアルカ)第三改ム  
 診候醫藥衛生ニ從事ス  
 侍醫局主事 三人 奏任 侍醫ヨリ兼任  
 局務ヲ掌理ス  
 醫員 判任  
 藥劑師長 一人 五等以下(二十三年宮内省達第二十二號ヲ以テ追加三十一年同省達甲第一號ヲ以テ五等以下ニ改ム)  
 藥品製煉鑑査及調劑ヲ掌理ス  
 藥劑師 判任  
 侍醫局屬 判任

第四十三條 主獵局ニ左ノ職員ヲ置キ狩獵及獵場ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル  
 但主獵官ハ名譽職トス  
 主獵局長 一人 二等三等  
 局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス  
 主獵局主事 一人 四等以下  
 局務ヲ掌理ス  
 主獵官 十五人 二等以下(二十五年宮内省達甲第七號ヲ以テ定員ヲ改正ス)  
 狩獵ニ從事ス 判任  
 主獵局屬 判任  
 主獵局監守長 准判任三等以下(三十四年宮内省達甲第四號ヲ以テ四等ヲ三等ニ改ム)  
 主獵局監守 判任待遇(三十一年宮内省達甲第一號ヲ以テ除外ヲ列任待遇ニ改ム)  
 主獵局廳匠長 准判任三等以下(三十三年宮内省達甲第一號ヲ以テ本項追加)  
 第四十四條 調度局ニ左ノ職員ヲ置キ御服御物及宮中省中需用物品被服購買修補運搬ニ關スル事務ヲ管理シ主管ニ屬スル會計ヲ掌ル  
 但「皇太后宮職」「皇后宮職」主管ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス  
 調度局長 一人 二等三等  
 局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス



調度局主事 一人 四等以下

局務ヲ掌理ス

調度局屬 判任

第四十五條 帝室會計審査局ニ左ノ職員ヲ置キ帝室ノ財計ヲ監査ス

帝室會計審査局長 一人 一等二等

局務ヲ總理シ局員ヲ監督ス

帝室會計審査局主事 一人 委任 審査官ヨリ兼任

局務ヲ掌理ス

帝室會計審査官 五人 三等以下六等以上(三十四年宮内省進甲第一號ヲ以テ本項中改正)

帝室ノ財計審査ヲ掌ル

帝室會計審査官補帝室會計審査官定員内ヲ以テ之ヲ置ク 六等以下(三十四年宮内省進甲第一號ヲ以テ本項追加)

帝室會計審査官ノ職務ヲ補助ス

帝室會計審査局屬

判任

第四十六條 前條條各官勅奏判ノ等級ニ規定ナキモノハ總テ勅任ハ二等二等奏任ハ三等ヨリ八等ニ至

リ判任ハ一等ヨリ六等ニ至ルモノトス准官モ亦同シ(二十三年宮内省進第十三號三十二年同省進第十二號ヲ以テ條中改正シ三十一年同省進第一號ヲ以テ但書ヲ削ル)

第四十七條 省中各官同等内ノ順序ハ任官ノ前後ニ依ル准官モ亦同シ

第四十八條 四等五等ハ每等在職三年六等七等八等ハ每等在職二年ヲ踰ユルニ非サレハ陞彼スルコト

ヲ得ス其每等定員ヲ限ルモノハ缺員アルニ非サレハ其期ヲ踰ユルト雖モ昇等スルコトヲ得ス准官モ亦同シ(二十三年宮内省進第十四號二十四年同省進甲第四號二十五年同省進甲第六號三十年同省進甲第十號ヲ以テ改正)

第四十九條 判任官二等三等四等五等ハ每等在職二年ヲ踰ユルニ非サレハ陞彼スルコトヲ得ス准官モ亦同シ(二十三年宮内省進第十三號三十年同省進甲第十號ヲ以テ本條中改正)

第五十條 省中各官及准官ノ俸給ハ別紙甲乙丙丁四表ノ定ムル所ニ依ル(三十二年宮内省進甲第一號ヲ以テ別表中ヲ改正ス)

第五十一條 勅任官ニシテ其官最高額ノ俸ヲ受ケ勞績拔群顯著ナル者ハ特旨ヲ以テ二級上等ノ俸ヲ賜

フコトアルヘシ

第五十二條 三等ニシテ最高額ノ俸ヲ受ケ勞績拔群顯著ナル者ハ宮内大臣ノ上奏ニ依リ其俸六分ノ一

マテヲ増賜スルコトアル可シ

第五十三條 判任官最上俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務熟練優等ナルモノハ特別ヲ以テ月俸三分ノ一マテヲ

増給スルコトアルヘシ(二十四年宮内省進甲第四號三十二年同第一號ヲ以テ改正)

第五十四條 (三十年宮内省進甲第一號ヲ以テ本條削除)

第五十五條 各部部长ハ宮内大臣ニ具狀シ其部内奏任官又ハ判任官ヲ以テ課長トナシ事務ヲ分掌セシ

ムルコトヲ得課長事故アルトキハ該長官ニ於テ其部員ニ臨時代理ヲ命ズルコトヲ得

第五十六條 次官各部部长及書記官ハ皆命ヲ大臣ニ承ルモノトス其他各部局員ハ皆命ヲ主務上官ニ承

クルモノトス其直ニ旨ヲ奉シ又ハ大臣若クハ上官ノ命ヲ承タルトヲ問ハス其主任ノ事務ニ付テハ各

其責ニ任ス可シ准官モ亦同シ















二十五年  
内省造甲第  
七號發布

三十二年  
内省造甲第  
一號發布

下ヲ奏任官トス

- 一 宮内大臣内大臣侍從長ハ親任式部長掌典長「皇太后宮大夫」皇后宮大夫ハ一等華族女學校長ハ
- 二等トシ其他從前ノ官制ニ於テ勅任トアルハ親任セラレタルモノ及一等二等勅任一等トアルハ
- 一等同二等トアルハ二等奏任一等トアルハ三等トス以下之ニ准ス
- 一 宮内省官制第二十九條侍從十五人ノ内二人ヲ二等十三人ヲ三等以下六等以上トス
- 一 「同第三十條式部官十五人ヲ二十人トシ内二人ヲ二等十八人ヲ三等以下トシ二等二人及三等以
- 下ノ内十二人ヲ名譽官トス」
- 一 同第五十條高等官俸給表中官等ノ欄ヲ改正シテ一等ヨリ八等トシ一等二等ノ一級俸二級俸ヲ削
- リ三級俸ヲ一級俸トシ以下順次繰上ケ三等ノ一級俸ヲ削リ二級俸ヲ一級俸トシ以下順次繰上ケ
- 一 宮内官一等二等ハ總テ其等位ニ依リ一級俸ヨリ四級俸マテノ内ヲ給ス但侍從掌典長東宮侍從長
- ハ其等位ニ依リ二級俸ヨリ五級俸マテノ内ヲ給ス
- 一 三等以下ノ文事祕書官及藥劑師長ハ其等位ニ依リ一級俸ヨリ四級俸マテノ内ヲ給ス
- 一 宮内省官制第五十三條ヲ左ノ通り改正ス
- 判任官最上俸ヲ受ケ五年ヲ踰ヘ事務練熟優等ナルモノハ特別ヲ以テ月俸「六分ノ一」マテヲ増
- 給スルコトアルヘシ

侍醫ノ俸給明治三十一年三月  
宮内省造甲第三號

侍醫ノ俸給ハ一等二等ハ第一級俸ヨリ第五級俸マテ「三等以下ハ第一級俸ヨリ第六級俸マテ」ノ  
内ヲ賜フ

●御歌所官制 明治三十年十月  
宮内省造甲第七號

御歌所官制左ノ通相定ム

御歌所官制

第一條 御歌所ニ左ノ職員ヲ置ク

御歌所長 一人 勅任

天皇 皇后兩陛下ノ御製ニ關スル事ヲ掌リ兼テ臣民ノ詠進ヲ管理シ所務ヲ總理シ職員ヲ監督ス

御歌所主事 一人 奏任

長ノ命ヲ承テ所務ヲ掌理ス

御歌所寄人 七人 名譽職 勅任又ハ奏任ノ待遇トス

長ノ命ヲ承テ短歌長歌唱歌等ニ關スル編纂選進ヲ分掌ス

御歌所參候 十五人 名譽職 奏任待遇トス

長ノ命ヲ承ケ歌御會ノ儀式典例ヲ掌理ス

御歌所録事 一人 判任

上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第五類 侍醫ノ俸給 御歌所官制







侍講俸給表					
二級俸	二千二百圓	二千	四	千八百圓	千六百圓
三級俸	二千圓	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓
四級俸	千八百圓	千六百圓	千四百圓	千二百圓	千圓
五級俸	千四百圓	千二百圓	千圓	九百圓	八百圓
六級俸	千圓	八百圓	六百圓	四百圓	三百圓

一 東宮内舍人任人俸給ハ同條准官俸給表主殿寮内舍人及任人ニ同シ(三十年宮内省達甲第一號)

● 東宮御所御造營局官制(明治三十一年八月 宮内省達甲第六號)

宮内省中ニ東宮御所御造營局ヲ置キ其官制ヲ定ムルコト左ノ如シ

東宮御所御造營局官制

第一條 東宮御所御造營局ハ東宮御所御造營ニ關スル一切ノ事務ヲ管掌ス

第二條 東宮御所御造營局ニ左ノ職員ヲ置ク

- 長 一人 勅任
- 事務官 二人 二等一人三等以下一人 宮内高等官ヨリ兼任
- 屬 六人 判任
- 技監 一人 二等
- 技師 四人 三等以下(三十四年宮内省達甲第二號) ナリテ三人ナリ四人ニ改ム

● 東宮御所御造營局官制(明治三十三年六月)

第三條 長ハ宮内大臣ノ監督ヲ承ケ所部ノ職員ヲ統督シ局務ヲ總理ス

第四條 事務官ハ長ノ命ヲ承ケ庶務會計ヲ掌理ス

第五條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第六條 技監ハ長ノ命ヲ承ケ工務ヲ掌理ス

第七條 技師ハ長又ハ技監ノ命ヲ承ケ工務ヲ分掌ス

第八條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工務ニ從事ス

第九條 長ハ經費豫算定額内ニ於テ囑託員又ハ傭員ヲ置クコトヲ得

第十條 長、事務官、技監ノ俸給ハ宮内省官制第五十條高等官俸給表、技師ノ俸給ハ技術官俸給表ニ依リ屬、技手ノ俸給ハ同條屬及技手俸給ニ依ル但シ技師、技手ノ俸給ハ事務ノ繁簡ニ依リ官等相當俸給以下ノ額ヲ給スルコトアルヘシ(三十二年宮内省達甲第四號ヲ以テ改正)

第十一條 囑託員ノ報酬傭員ノ俸給ハ長之ヲ定ム

第十二條 此官制中別ニ規定ナキモノハ宮内省官制ニ依ル

● 帝室博物館官制(明治三十三年六月)

帝國博物館、帝國京都博物館、帝國奈良博物館ヲ東京帝室博物館、京都帝室博物館、奈良帝室博物館ト改稱シ帝室博物館官制ヲ定ムルコト左ノ如シ

第五節 東宮御所御造營局官制 帝室博物館官制



但シ施行ノ期ハ本年七月一日トス

皇室博物館官制

- 第一條 東京帝室博物館ニ帝室博物館總長一人ヲ置ク勅任トス宮内大臣ノ監督ヲ承ケ職員ヲ統督シ各帝室博物館ノ事務ヲ總理シ兼テ上野公園及動物園ノ事務ヲ管理ス
- 第二條 東京帝室博物館ニ主事一人ヲ置ク奏任トス總長ヲ輔ケ館務ヲ掌理ス
- 第三條 京都帝室博物館及奈良帝室博物館ニ館長各一人ヲ置ク奏任トス館務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス
- 第四條 各帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク
  - 部長 奏任 京都帝室博物館及奈良帝室博物館ハ五等以下トス
  - 部次長 判任三等以上
  - 書記 判任
  - 技手 判任
- 第五條 部長ハ東京帝室博物館四人京都帝室博物館奈良帝室博物館各三人トス總長又ハ館長ノ命ヲ承ケ列品部門ノ別ニ從ヒ部務ヲ分掌ス
- 第六條 部次長ハ東京帝室博物館四人京都帝室博物館奈良帝室博物館各三人トス部長ヲ助ケ部務ヲ處理ス
- 第七條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

第八條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ列品ノ調査監守ニ從事ス

第九條 館務ノ須要ニ依リ各帝室博物館ニ評議員及學藝委員ヲ置クコトヲ得

第十條 評議員ハ東京帝室博物館五人京都帝室博物館奈良帝室博物館各二人勅任又ハ奏任ノ待遇トス總長又ハ館長ノ諮詢ニ對シ其ノ召集ニ應ジテ館務ニ參與ス

第十一條 學藝委員ハ東京帝室博物館七人京都帝室博物館五人奈良帝室博物館三人奏任待遇トス總長又ハ館長ノ命ヲ承ケ列品ノ鑑査解說又ハ編纂著譯ニ從事ス

第十二條 實際ノ須要アルトキハ各帝室博物館ニ囑託員ヲ置キ部長部次長ノ事務又ハ列品ノ鑑査解說ヲ委囑スルコトヲ得

第十三條 高等官ノ俸給ハ宮内省官制第五十條高等官俸給表ニ依リ部次長書記ノ俸給ハ同條屬俸給ノ技手ハ技手俸給ニ依ル

第十四條 評議員學藝委員及囑託員ノ報酬ハ經費定額内ニ於テ總長適宜之ヲ定ム

第十五條 本官制中別ニ規定ナキモノハ宮内省官制ニ依ル

●御料局支應職制明治二十二年九月 宮内省達第十六號

御料局支應職制ヲ定ムルコト左ノ如シ

御料局支應職制

第一條 御料財産ヲ管理スル爲メ須要ノ地ニ御料局支應ヲ置キ支應ノ下ニ出張所ヲ置ク其位置並ニ管



二階區域ハ宮内大臣之ヲ定ムヘシ  
第二條 御料局支應ニ左ノ職員ヲ在勤セシム

理事

技師

屬

技手

技手補

「監守」

第三條 支應管内廣潤ナルトキハ監督ヲ置キ技師屬又ハ技手ヲ以テ之ニ充テ出張所其他ノ業務ヲ監督ス

第四條 支應長ハ御料局長ノ命ヲ承ケ其管内ノ財産及一切ノ業務ヲ掌理シ所轄官吏ヲ監督ス

第五條 技師屬技手技手補「監守」ハ各其主務ニ從事ス

第六條 出張所長ハ屬又ハ技手技手補ヲ以テ之ニ充ツ

第七條 支應及出張所ノ處務規程ハ宮内大臣之ヲ定ム

第八條 支應ノ會計ハ其業務ノ都合ニヨリ御料局長ニ於テ宮内大臣ノ認可ヲ經テ特別會計規則ニ據ル

第九條 支應長ハ業務ノ都合ニヨリ特ニ備員ヲ置クコトヲ得

●皇族職員職制(明治二十三年一月)  
皇族職員職制左ノ通相定ム

第一條 親王家

別當

輔翼ノ資ニ任シ家務會計ヲ總理シ家令以下ヲ監督ス

家令

特別當ノ職務ヲ助ケ家務會計ヲ管理ス

家扶

家務會計ヲ掌理ス

家從

庶務ニ從事ス

第二條 諸王家

家令

輔翼ノ資ニ任シ家務會計ヲ管理シ家扶以下ヲ監督ス

家扶







教授ノ職務ヲ補助ス

學習院寮長

奏任教授兼任ス

長ノ命ヲ承ケ各學寮ヲ管理シ且其寮ニ屬スル學生ノ薰陶ニ從事ス

學習院副寮長

奏任又判任兼任ス

寮長ノ職務ヲ補助ス

學習院學生監

一人 奏任

長ノ命ヲ承ケ學生ノ風儀ヲ監督シ且武課ノ教習ニ從事シ學生ヲシテ軍隊ノ規律ニ慣熟セシムル

コトヲ掌ル

學習院學生監副官 一人 奏任

學生監ノ職務ヲ補助ス

學習院學生監部員 判任

學生監及學生監副官ノ指揮ヲ承ケ其職務ノ細節ニ從事ス

學習院醫官 一人 奏任

長ノ命ヲ承ケ醫藥衛生ニ從事ス

學習院醫官助手 判任

醫官ノ指揮ヲ承ケ其職務ノ細節ニ從事ス

第二條 教授上必要アルトキ又ハ判任官副官アルトキハ長適當ナル者ヲ選ヒテ囑託員又ハ備員ヲ置ク

コトヲ得

第三條 教育上ノ規律及職員分掌服務規程ハ長之ヲ定メ宮内大臣ニ申牒スヘシ

第四條 長、幹事、勅任教授、學生監、學生監副官、醫官ノ俸給ハ宮内省官制第五十條高等官俸給表、

奏任教授ノ俸給ハ技術官俸給表ニ依リ書記、學生監部員、醫官助手ノ俸給ハ同條屬俸給、助教ノ

俸給ハ技手俸給ニ依ル(三十二年宮内省通甲)

第五條 寮長及副寮長ニハ本官俸給ノ半額以内ヲ手當トシテ給ス

第六條 教授助教ノ授業時間ノ多少學科ノ性質等ニ依リ官等相當俸給以下ノ額ヲ給スルコトアル

ヘシ

第七條 囑託員ノ報酬備員ノ俸給ハ長適宜ニ之ヲ定ム

第八條 此官制中別ニ規定ナキモノハ總テ宮内省官制ニ依ル

●華族女學校職員及官等俸給(明治十九年二月)

華族女學校職員及官等俸給ヲ改定スルコト左ノ如シ

第一條 華族女學校ニ左ノ職員ヲ置ク

長

學監

幹事

第五節 華族女學校職員及官等俸給



二十四年宮  
内省達第  
四號及二  
十五年同  
甲第六號  
以テ校長  
官第九號  
ム

教授  
助教  
書記

第二條 長一人二等トス宮内大臣ノ命ヲ受テ學校ノ事ヲ總理ス

第三條 學監一人奏任トス長ノ命ヲ受テ教授及校中ノ事務ヲ監督ス

第四條 幹事二人奏任トス長ノ命ヲ受テ庶務ヲ幹理ス

第五條 教授ハ奏任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

第六條 助教ハ判任トス教授ノ職掌ヲ助ク

第七條 書記ハ判任トス長及幹事ノ命ヲ受テ庶務ニ従事ス

第八條 長、學監、幹事ノ俸給ハ宮内省官制第五十條高等官俸給表、教授ノ俸給ハ技術官俸給表ニ依

リ書記ノ俸給ハ同條屬俸給、助教ノ俸給ハ技手俸給ニ依ル(三十二年宮内省達第  
三號ヲ以テ改正)

第九條 教授助教ニハ其授業時間ノ多少學課ノ難易等ニ依リ官等相當俸給以下ノ額ヲ給スルコトアル

ヘシ

第十條 教授上必要アルトキ又判任官缺員アルトキハ長適當ナル者ヲ撰テ囑託員備員ヲ置クコトヲ得

其報酬及俸給ハ長適宜ニ之ヲ定ム

第十一條 宮内省官制第四十八條第五十一條第五十二條第五十三條第六十一條ハ此官制ニモ亦適用ス

(二十三年宮内省達第十一號ヲ以テ第四  
十八條ノ下第四十九條ノ五字ヲ削ル)

但判任官ノ陸彼年限ハ二十三年六月宮内省達第六號ニ依ル(二十三年宮内省達第十  
一號ヲ以テ但書追加)

●侍從武官官制 明治二十九年四月  
勅令第百十三號

朕侍從武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

侍從武官官制

第一條 侍從武官ヲ置ク左ノ如シ

侍從武官長 侍從武官高級故參ノ者ヲ以テ之ニ補ス

陸軍將官及佐尉官

侍從武官

海軍將官及佐尉官

第二條 侍從武官ハ

天皇ニ常侍奉仕シ軍事ニ關スル奏上奉答及命令ノ傳達ニ任シ又觀兵演習行幸其他祭儀禮典宴會謁見

等ニ陪侍扈從ス

第三條 侍從武官ハ演習其他軍事上視察ノ爲メ差遣セララル、コトアルヘシ

第四條 侍從武官ハ宮中ニ在リテハ宮内省ノ規定ヲ遵奉スヘシ

第五條 侍從武官長ハ侍從武官ノ勤務ヲ規定シ且之ヲ監督ス

第六條 侍從武官ハ皆參謀官トス

第七條 第一條ニ掲クル人員ノ外侍從武官ニ陸海軍屬各二名ヲ附ス(三十年勅令第百六  
十四號ヲ以テ改正)

第五類 侍從武官官制



●東宮武官官制明治三十年十月  
勅令第三百七十一號

朕東宮武官官制改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

東宮武官官制

第一條 東宮武官ヲ置ク左ノ如シ(三十二年勅令第百號ヲ以テ改正)

東宮武官長 東宮武官中高級故參ノ者ヲ以テ之ニ補ス

東宮武官

陸軍將官及佐尉官

第二條 東宮武官長武官ハ

皇太子ノ威儀整飾ヲ奉助シ行軍、觀兵、演習其他ノ軍務及祭儀、禮典、宴會、謁見等ニ陪侍扈從ス

第三條 東宮武官ハ常侍奉仕ス

第四條 東宮武官長武官ハ、行啓、祭儀、禮典、宴會、謁見等ノ事項ニ於テハ宮内省ノ規則ヲ遵守ス

第五條 東宮武官長ハ武官ノ勤務細則ヲ規定ス

第六條 第一條ニ掲クル職員ノ外東宮武官ニ陸軍屬二名海軍屬一名ヲ附ス(三十二年勅令第百號ヲ以テ條中追加)

●皇族附陸軍武官官制明治二十九年八月  
勅令第二百八十一號

朕皇族附陸軍武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇族附陸軍武官官制

第一條 陸軍武官タル皇族ニハ皇族附陸軍武官ヲ附屬シ各兵科佐尉官ヲ以テ之ニ補ス(三十三年勅令第四百一號ヲ以テ條中改正)

第二條 皇族附陸軍武官ハ其附屬スル皇族ノ威儀整飾ヲ奉助シ行軍、觀兵、演習其他ノ軍務及祭儀禮典宴會等ニ隨從スルヲ任トス

第三條 皇族附陸軍武官ハ祭儀禮典宴會等ノ事項ニ關シテハ宮内省ノ規定ヲ遵守スヘシ

●皇族附海軍武官官制明治三十年十月  
勅令第三百六十一號

朕皇族附海軍武官官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

皇族附海軍武官官制

第一條 海軍武官タル皇族ニハ皇族附海軍武官ヲ附屬シ海軍佐尉官ヲ以テ之ニ充ツ(三十二年勅令第四百一號ヲ以テ條中改正)

第二條 皇族附海軍武官ハ其ノ附屬スル皇族ノ威儀整飾ヲ奉助シ軍務祭儀禮典及宴會等ニ隨從スルヲ任トス

第三條 皇族附海軍武官ハ祭儀禮典宴會等ノ事項ニ關シテハ宮内省ノ規定ヲ遵守スヘシ



●各省官制通則 明治二十六年十月

沿革略記

明治二十二年四月二十日諸官規則ノ大綱ヲ定ム○同年七月八日官制ヲ更定シ職員令ヲ定ム○四年八月十日官制等  
級ヲ改定シ太政官ヲ本官トシ諸省ヲ分官トシ察司ヲ官省ノ支官トス○十四年十一月第九十四號詔ヲ以テ各省  
從前ノ事務章程ヲ廢シ更ニ諸省事務章程通則ヲ定ム○同年同月第九十五號詔ヲ以テ各省警務事務ノ區分ハ從前ノ慣行  
ニ仍ラシム○十八年十二月二十六日內閣總理大臣ヨリ各省大臣ニ各省警務整理ノ綱領ヲ示ス○十九年二月勅令第二號  
ヲ以テ各省官制通則ヲ公布ス○二十三年勅令第五十號ヲ以テ各省官制通則ヲ改正ス○二十六年十月勅令第百二十二號  
ヲ以テ各省官制通則ヲ改正ス

朕各省官制通則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

各省官制通則

- 第一條 本則ハ外務、内務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信ノ各省ニ適用ス
- 第二條 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付其ノ責ニ任ス  
主任ノ明瞭ナラサル事務ニシテ兩省以上ニ關涉スルモノアルトキハ閣議ニ提出シテ其ノ主任ヲ定ム
- 第三條 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付法律勅令ノ制定、廢止及改正ヲ要スルコトアルトキハ案ヲ具ヘ閣  
議ニ提出スヘシ
- 第四條 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ省令ヲ發スルコトヲ得
- 第五條 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付警視總監、北海道廳長官、府縣知事ニ指令又ハ訓令ヲ下スコトヲ  
得
- 第六條 各省大臣ハ主任ノ事務ニ付警視總監、北海道廳長官、府縣知事ヲ監督ス若シ警視總監、北海  
道廳長官、府縣知事ノ命令又ハ處分ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキ

ハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第七條 各省大臣ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ  
之ヲ專行ス

地方官廳奏任官ノ進退ハ內閣總理大臣ヲ經テ内務大臣之ヲ上奏ス但シ視學官ノ進退ハ內閣總理大臣  
ヲ經テ内務大臣及文部大臣之ヲ上奏ス(三十二年勅令第百五十一號ヲ以テ追加ス)

第八條 各省大臣ハ內閣總理大臣ヲ經テ所部ノ官吏ノ敍位敍勳ヲ上奏ス

地方官廳官吏ノ敍位敍勳ハ前條第二項ノ例ニ依ル

第九條 各省大臣事故アルトキハ法律勅令ニ副署シ省務ヲ敷奏シ內閣ノ議ニ列シ及省令ヲ發スルコト  
ヲ除クノ外其ノ職務ヲ臨時總務長官ニ代理セシムルコトヲ得(三十三年勅令第百六十一號ヲ以テ條中改正)

第十條 各省ニ大臣官房ヲ置ク(三十三年勅令第百六十二號ヲ以テ改正)

大臣官房ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 機密ニ屬スル事項
  - 二 官吏ノ進退身分ニ關スル事項
  - 三 大臣ノ官印及省印ノ管守ニ關スル事項
- 各省ノ便宜ニ從ヒ大臣官房ノ事務ヲ各局ニ於テ處理セシムルコトヲ得
- 陸軍省海軍省ニ於テハ本條第二項第二ノ事務ヲ掌ラシムル爲特ニ局ヲ置クコトヲ得
- 第十一條 各省ニ總務局ヲ置ク(七同)



總務局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項
  - 二 統計報告ノ調製ニ關スル事項
  - 三 公文書類ノ編纂保存ニ關スル事項
  - 四 本省所管ノ經費及諸収入ノ豫算決算並會計ニ關スル事項
  - 五 會計ノ監査ニ關スル事項
  - 六 本省所管ノ官有財産及物品ニ關スル事項
  - 七 其ノ他各省官制ニ依リ特ニ總務局ノ所掌ニ屬セシムル事項
- 陸軍省海軍省ニ於テハ前項第四乃至第六ノ事務ヲ掌ラシムル爲テ二局ヲ置クコトヲ得
- 第十二條 各省中省務ヲ分掌スル爲局ヲ置ク其ノ分掌事務ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム
- 第十三條 大臣官房及各局ノ分課ハ各省大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 陸軍省海軍省中ノ分課ハ各其ノ省官制ニ於テ之ヲ定ム
- 第十四條 各省ニ左ノ職員ヲ置ク(三十一年勅令第百六十一號ヲ以テ改正)

總務長官

官房長

局長

參事官

三十二年勅令第百二十八號ヲ以テト爲ス

秘書官

書記官

屬

- 第十五條 各省總務長官ハ一人勅任トス(上)
- 第十六條 總務長官ハ大臣ヲ佐ク省務ヲ整理シ各局部ノ事務ヲ監督シ及總務局ノ事務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス(上)
- 第十七條 各省官房長ハ一人勅任トス(上)
- 第十七條ノ二 官房長ハ機務ヲ管掌シ及大臣官房ノ事務ヲ指揮監督ス(三十三年勅令第百六十一號ヲ以テ追加)
- 第十八條 各局局長ハ一人勅任トス大臣ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ及局中各課ノ事務ヲ指揮監督ス(三十一年勅令第百五十七號ヲ以テ改正)
- 第十九條 參事官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌ル但シ其ノ中一人ハ勅任ト爲スコトヲ得(三十一年勅令第百五十七號三十三號年勅令第百六十一號ヲ以テ改正追加)
- 第二十條 參事官ハ其ノ省ノ便宜ニ從ヒ局課ニ兼勤シ若クハ臨時命ヲ承ク其ノ事務ヲ助ク
- 第二十一條 秘書官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ機密事務ヲ掌リ又ハ臨時命ヲ承ケ各局課ノ事務ヲ助ク
- 第二十二條 書記官ハ奏任トス大臣ノ命ヲ承ケ大臣官房ノ事務ヲ掌リ又ハ各局ノ事務ヲ助ク(三十一年勅令第百五十七號ヲ以テ大臣ノ下又ハ次官ノ四字ヲ附ル)
- 第二十三條 各省專任秘書官ハ一人トス但外務省ニ於テハ專任二人ヲ置クコトヲ得



各省專任參事官專任書記官ハ併セテ九人以下トシ其ノ定員ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム但シ外務省內務省大藏省及遞信省ニ於テハ十四人以下ヲ置クコトヲ得(三十二年勅令第三百五十七號ヲ以テ本項改正三十二年勅令第三百六十一號三十五年勅令第六十號ヲ以テ項中改正)

第二十四條 大臣官房及局中各課ニ課長一人ヲ置キ奏任官又ハ判任官ヲ以テ之ニ充ツ課長ハ命ヲ上官ニ承テ課務ヲ掌理ス

陸軍省海軍省中ノ課長ハ各其ノ省官制ノ定ムル所ニ依ル

第二十五條 屬ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二十六條 各省判任官ノ定員ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム

第二十七條 本則ニ掲クルモノ、外各省特別ノ職員ヲ置クコトヲ要スル者ハ各省官制ニ於テ之ヲ定ム

附則

第二十八條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●外務省 附外國事務局 外國官

沿革略記 明治元年二月五日新ニ各國事務局ヲ置キ職制ヲ定メ將、正權判、正權判事等ヲ置ク○同年閏四月二十一日外務省事務局ヲ廢シ外國官ヲ建テ正副知官事、正權判官事等ヲ置キ職制ヲ定ム○二年二月二十二日通商司ヲ諸開港所ニ置キ貿易事務ヲ掌セシム○同年五月十六日通商司商會附官ニ屬ス○同年七月八日外國官ヲ廢シ外務省ヲ置キ判、大少輔、正權大少輔、大少輔等ノ職員ト爲シ其職制ヲ定ム○同年八月二十日官位相當ヲ更定シ新ニ大中少輔官ヲ置ク○三年五月七日外務省中文書司ヲ置ク○同年四月二十二日外務省中中少輔事務使、正權大少輔ヲ置ク○四年二月二日漢洋附學所ヲ外務省ニ置ク○同年八月十日外務省官制等續ヲ定メ判、大少輔、大少輔、正權大中少輔及大中少輔事務使、大少輔ノ職員ト爲ス○同年同月二十八日各開港開市場ノ稅務ヲ大藏省ニ屬ス○同年十月廿日全權大使隨從書記官ノ等級ヲ定

ム○同年十一月五日外務省中總領事、副領事、代領事ヲ置キ官等ヲ定ム○五年正月第十六號ヲ以テ外務省官等ヲ改正ス○同年十月第三百八號ヲ以テ大中少輔事務使、正權大少輔等ヲ廢シ特命全權公使辦理公使代理公使及書記官一等ヨリ三等ニ至ルヲ置ク○同年同月第三百廿六號ヲ以テ書記官一等ヨリ八等ニ至ルヲ置ク○六年二月第十六號ヲ以テ代領事ヲ廢ス○同年五月五日昭學所ヲ文部省ニ屬ス○九年五月第四十九號ヲ以テ職制章程ヲ改正シ判、大少輔、正權大中少輔、正權大中少輔、特命全權公使、辦理公使、代理公使、總領事、正副領事、書記官、職員ト爲ス○同年同月八日三等書記官并三等書記官以下ヲ廢ス○十年一月第三號ヲ以テ正權大少輔以下ヲ廢シ正權大少輔書記官一等ヨリ十等ニ至ルヲ置ク○同年同月第四號ヲ以テ文官四等以下等給ヲ改正シ官等ヲ十七等ニ分ツ○同年九月十六號ヲ以テ總領事、副領事、代領事ノ官等ヲ改ム○十二年十二月第四十六號ヲ以テ三等書記官三等書記官ヲ置ク○十三年十二月第六十號ヲ以テ外務省職制章程ヲ改正ス○十四年八月第七十三號ヲ以テ一等二等三等書記官並書記官ヲ廢シ更ニ書記官並書記官ヲ置ク○同年十一月第九十四號ヲ以テ從前ノ事務章程ヲ廢シ諸省事務章程通則ヲ定ム○同年同月第九十七號ヲ以テ領事ノ官等ヲ改ム總領事、副領事ノ官等ハ姑ク舊ニ依ル○十五年三月第十五號ヲ以テ特命全權公使ノ官等ヲ改ム○十七年二月四日外務省書記官公使館在勤中特別ヲ以テ奏任ニ準スルノ旨ヲ達ス○同年五月七日外務省ハ無任所外交官條例ヲ達ス○十八年十二月第六十九號ヲ以テ各省判ノ職制ヲ廢シ更ニ外務大臣ヲ置ク○十九年三月實際官及領事ノ官制ヲ定ム○二十三年五月勅令第八十號ヲ以テ日本帝國領事規則ヲ定ム○同年六月勅令第二百九號ヲ以テ外務省官制ヲ改正ス○同年十月第二十七號ヲ以テ外交官及領事官官制ヲ定ム○同年十二月勅令第二百八十三號ヲ以テ外交官領事官及書記官ノ定員ヲ定ム○二十四年七月勅令第八十七號ヲ以テ外務省官制ヲ改正ス○二十六年十月勅令第二百二十三號ヲ以テ外務省官制ヲ改正ス○同年同月勅令第二百二十四號ヲ以テ外交官及領事官官制ヲ改正ス○同年同月勅令第二百二十五號ヲ以テ外交官領事官書記官並書記官ノ定員ヲ定ム○二十三年勅令第二百八十三號ヲ廢止ス○同年同月勅令第二百二十六號ヲ以テ外交官及領事官試驗委員會官制ヲ定ム○同年同月勅令第二百七十二號ヲ以テ外交官領事官主任及賜假規則ヲ制定シ二十四年勅令第七十四號ヲ廢止ス○二十七年十一月勅令第八十九號ヲ以テ職事若クハ事變ニ際シ職務ニ從事セシムル特命外交官及領事官ニ關スル件ヲ定ム○同年同月勅令第九十號ヲ以テ特命外交官及領事官ニシテ職務ニ從事スル者ヲ定員外トナス○二十八年六月勅令第八十二號ヲ以テ公使館ニ通譯官ヲ公使館領事館及貿易事務館ニ通譯生ヲ置ク○同年同月勅令第八十四號ヲ以テ通譯官及通譯生ニ外交官領事官主任及賜假規則適用方ヲ示ス○同年同月勅令第八十七號ヲ以テ貿易事務官公使館通譯官待命方ヲ定ム○同年同月勅令第八十八號ヲ

第五類 外務省沿革



以テ外交官及領事官通譯官書記生通譯生定員令ヲ定メ二十六年勅令第百二十五號ヲ廢止ス○同年十月勅令第百五十號  
 ナリテ外交官領事官及貿易事務官更代ノ際ニ於テ臨時増員方ヲ定ム●三十一年十月勅令第百五十八號ヲ以テ外務省  
 官制ヲ改正ス●三十二年三月法律第七十號ヲ以テ領事官ノ職務ヲ定ム○同年六月勅令第百八十號ヲ以テ外務省  
 事務官制ヲ改正シ二十八年勅令第八十二號同年勅令第八十七號ヲ廢止ス○同年同月勅令第百八十一號ヲ以テ在外公  
 館職員定員令ヲ定メ二十八勅令第八十八號ヲ廢止ス●三十三年三月勅令第百十號ヲ以テ日本軍營居留地經營事務所  
 官制ヲ定ム○同年同月勅令第百十三號ヲ以テ在外國帝國軍營居留地經營事務所監督ノ爲臨時職員ヲ外務省ニ置ク○同年  
 四月勅令第百五十三號ヲ以テ領事官職務規則ヲ定メ日本帝國領事規則及二十三年勅令第百五十八號ヲ廢止ス

●外務省官制明治三十一年十月  
 勅令第百五十八號

朕外務省官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外務省官制

- 第一條 外務大臣ハ外國ニ關スル政務ノ施行、外國ニ於ケル帝國商事ノ保護及外國在留帝國臣民ニ關  
 スル事務ヲ管理シ外交官及領事官ヲ指揮監督ス(三十三年勅令第百九  
 十號ヲ以テ條中追加)
- 第二條 總務局ニ於テハ通則ニ掲クルモノノ外帝國ニ駐在スル各國外交官領事官、外國人鼓動、條約  
 書保管及文書翻譯ニ關スル事務ヲ掌ル(三十三年勅令第百九  
 十號ヲ以テ條中改正)
- 第三條 外務省專任參事官ハ三人專任外務大臣秘書官ハ二人專任書記官ハ八人ヲ以テ定員トス  
(三十三年勅令第百九十號三十五年  
 勅令第六十一號ヲ以テ條中改正)
- 第四條 外務省ニ左ノ二局ヲ置ク  
 政務局

通商局

- 第五條 政務局ニ於テハ外交ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第六條 通商局ニ於テハ通商航海及移民ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第七條 外務省ニ翻譯官四人ヲ置ク奏任トス文書翻譯ニ從事ス
- 第八條 外務省屬ハ五十人ヲ以テ定員トス(三十五年勅令第六十  
 一號ヲ以テ定員改正)
- 第九條 外務省ニ翻譯官補六人ヲ置ク判任トス上官ノ指揮ヲ承ク文書翻譯及通辯ニ從事ス
- 第十條 外務省ニ技手三人ヲ置ク上官ノ指揮ヲ承ク電信及營繕事務ニ從事ス(三十三年勅令第五十  
 九號ヲ以テ本條改正)

附則

第十一條 本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

●外交官及領事官官制明治三十二年六月  
 勅令第百八十八號

朕外交官及領事官官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官及領事官官制

- 第一條 外交官ハ特命全權公使、辨理公使、公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記  
 官及外交官補トス
- 第二條 特命全權公使及辨理公使ハ勅任トシ公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記  
 官及外交官補ハ奏任トス



第三條 領事官ハ總領事、領事、副領事及領事官補トス

第四條 總領事、領事、副領事及領事官補ハ奏任トス

第五條 外交官ヲ置カサル地ニ於テハ外交事務官ヲ置クコトヲ得

外交事務官ハ領事官ヲシテ之ヲ兼テシム

第六條 領事官ヲ置カサル地ニ於テハ貿易事務官又ハ名譽領事若ハ名譽副領事ヲ置クコトヲ得

貿易事務官ハ奏任トシ名譽領事及名譽副領事ハ奏任待遇トス

第七條 公使館、領事館及貿易事務館ニ外務書記生ヲ置ク

外務書記生ハ判任トス

第八條 英吉利語、佛蘭西語及獨逸語以外ノ外國語ノ通譯ヲ要スル公使館ニ公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ヲ置クコトヲ得

公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ハ奏任トス

第九條 英吉利語、佛蘭西語及獨逸語以外ノ外國語ノ通譯ヲ要スル公使館、領事館及貿易事務館ニ外務通譯生ヲ置クコトヲ得

外務通譯生ハ判任トス

第十條 外交官又ハ領事官ニシテ一時外國在勤ヲ免シタル者及外務省官吏ニシテ外交官又ハ領事官ニ轉任シ未タ任所ヲ命セサル者ヲ待命トス

待命ノ外交官及領事官ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セシ其ノ他本令及公使館領事館費用條例ニ特

別ノ規定アル事項ヲ除ク外總テ在職官吏ト異ナルコトナシ

待命ノ外交官及領事官ハ臨時外務省ノ事務ニ從事セシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ在職官吏ニ關

スル規定ヲ適用ス

待命ハ滿五箇年ヲ以テ期トス期滿レハ其ノ官ヲ免スルモノトス(三十三年勅令第二百十九號ヲ以テ三十五年改ム)

待命ノ外交官及領事官ニハ休職ヲ命スルコトヲ得ス

前各項ノ規定ハ貿易事務官、公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ニ之ヲ適用ス

附 則

第十一條 明治二十八年勅令第八十二號及同年勅令第八十七號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十二條 本令施行ノ際一等領事又ハ二等領事タル者ニシテ別ニ辭令書ヲ交付セサルモノハ領事ニ任

セラレタルモノトス

● 在外國帝國專管居留地經營事務監督ノ爲臨時職員ヲ置ク明治三十三年三月勅令第三百十三號

朕在外國帝國專管居留地經營事務監督ノ爲臨時職員ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外國帝國專管居留地經營事務ノ監督ヲ爲サシムル爲臨時外務省ニ日本專管居留地經營事務監督

官三人ヲ置キ外務省及大藏省高等官ヲ以テ之ニ充ツ

● 日本專管居留地經營事務所官制明治三十三年三月勅令第三百十號

第五節 在外國帝國專管居留地經營事務監督ノ爲臨時職員ヲ置ク 日本專管居留地經營事務所官制 二一九



朕日本專管居留地經營事務所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本專管居留地經營事務所官制

第一條 日本專管居留地經營事務所ハ在外國帝國專管居留地ニ之ヲ設ケ外務大臣ノ管理ニ屬シ在外國帝國專管居留地經營ニ關スル事務ヲ掌理ス

第二條 各日本專管居留地經營事務所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 一人 奏任

技師 一人

技手 五人

書記 三人 判任

第三條 所長ハ所在地帝國領事ヲ以テ之ニ充ツ所中一切ノ事務ヲ掌理シ所屬職員ヲ指揮監督ス

第四條 技師ハ所長ノ指揮ヲ承ケ工務ヲ掌理ス

第五條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工務ニ從事ス

第六條 書記ハ外務書記生及外務通譯生ヲ以テ之ニ充ツ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

●待命外交官及待命領事官ニシテ戰時特設ノ職務ニ従事スル者ヲ定員外トナス 明治二十七年十一月勅令第九十號

朕待命外交官及待命領事官ニシテ戰時特設ノ職務ニ従事スル者ヲ定員外ト爲スノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

待命外交官及待命領事官ニシテ戰時特設ノ職務ニ従事スル者ハ之ヲ定員外ト爲スコトヲ得

●在外公館職員定員令 明治三十二年六月勅令第二百八十二號

朕在外公館職員定員令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

在外公館職員定員令

第一條 外交官、領事官、貿易事務官、公使館一等通譯官、公使館二等通譯官、外務書記生及外務通譯生ノ定員ハ左ノ如シ (三十三年勅令第二百二十號ヲ以テ定員中ヲ改正ス)

特命全權公使、辦理公使ハ通シテ十六人

公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記官ハ通シテ三十人

總領事、領事、副領事、貿易事務官ハ通シテ三十七人 (三十四年勅令第百二十號ヲ以テ本項中改正)

公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ハ通シテ七人

外交官補、領事官補ハ通シテ三十人

外務書記生、外務通譯生ハ通シテ百二十八人 (三十五年勅令第百九十號ヲ以テ本項中改正)

○外交官ニシテ領事官ヲ兼任シ及領事官ニシテ外交官ヲ兼任スルトキハ其ノ兼官ハ定員ノ内ニ算入セス

第二條 待命ノ外交官、領事官、貿易事務官、公使館一等通譯官及公使館二等通譯官ハ通シテ二十五人トシ前條定員ノ内ニ算入セス (三十三年勅令第二百二十號ヲ以テ十五人ヲ二十五人ナク改正)

第五類 待命外交官待命領事官ニシテ戰時特設ノ職務ニ従事スル者ヲ定員外トナス  
在外公館職員定員令



附則

外交官、領事官、通譯官、書記生、通譯生定員令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●外交官領事官及貿易事務官及外務書記生外務通譯生更代ノ際ニ於テ臨時増員方明治二十八年十月勅令第五百五十五號朕外交官領事官及貿易事務官更代ノ際ニ於テ臨時増員スルコトヲ得ルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官領事官貿易事務官及外務書記生外務通譯生ヲ更代セシムルトキハ定員ノ外ニ臨時増員スルコトヲ得但増員ノ日ヨリ六箇月以内ニ定員ニ復スヘシ(三十二年勅令第二百八十八號)臨時増員ハ左ノ定限ニ超過スルコトヲ得ス(四號ヲ以テ本項中追加)

特命全權公使兼代理公使ハ通シテ二人

公使館一等書記官公使館二等書記官公使館三等書記官ハ通シテ四人

總領事「一等領事二等領事」貿易事務官ハ通シテ五人

外務書記生外務通譯生ハ通シテ四人(三十二年勅令第二百八十八號)  
(十四號ヲ以テ本項中追加)

●外交官及領事官試驗委員官制明治二十六年十月勅令第二百六十六號朕外交官及領事官試驗委員官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

外交官及領事官試驗委員官制

第一條 外交官及領事官試驗ヲ施行スル爲ニ外交官及領事官試驗委員ヲ置キ外務大臣ノ管轄ニ屬セシム

第二條 外交官及領事官試驗委員ハ左ノ人員ヲ以テ組織ス

委員長

「外務次官」

委員

外務省政務局長

外務省通商局長

文官高等試驗委員二名

帝國大學教授二名

「外務次官」、外務省政務局長又ハ外務省通商局長ニ闕員又ハ事故アルトキハ臨時他ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 前條委員ノ外臨時必要アルトキハ臨時試驗委員ヲ命スルコトヲ得

第四條 外交官及領事官試驗委員ハ職務上當然委員長又ハ委員タル者ヲ除クノ外外務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス臨時委員亦同シ

第五條 試驗事務ニ關シ庶務ニ從事セシムル爲ニ書記ヲ置キ外務省判任官ヲ以テ之ニ充ツ

第六條 外交官及領事官試驗委員並臨時試驗委員ニハ外務省官吏ヲ除クノ外年額百圓以内ノ手當金ヲ給スルコトヲ得

第五類 外交官領事官及貿易事務官及外務書記生外務通譯生更代ノ際ニ於テ臨時増員方  
外交官及領事官試驗委員官制



附則

第七條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●領事官ノ職務明治三十二年三月法律第七十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル領事官ノ職務ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 條約中特ニ領事官ノ權限ニ屬セシメタル事項ニ關シテハ法律ニ牴觸セサル範圍ニ於テ命令ヲ以テ其ノ制限ヲ設クルコトヲ得

第二條 條約中領事官ノ職務ニ關シ法律ノ規定ヲ要スル事項ニ付法律ノ規定ヲキトキハ命令ヲ以テ必要ナル規定ヲ設クルコトヲ得

第三條 領事官其ノ他本法ニ依リテ職務ヲ行フ者ハ法令及條約ノ規定ニ從テ其ノ職務ヲ行フヘシ但シ國際法ニ基因スル慣例又ハ駐在地特別ノ慣例ニ從フコトヲ得

前項ニ依リ難キトキハ命令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第四條 外國ニ於ケル施行期日ヲ定メサル法律ニ付テハ命令ヲ以テ其ノ施行期日ヲ定ムルコトヲ得

第五條 領事官ノ職務ニ關スル管轄區域ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 條約又ハ慣例ニ因リ領事裁判權ヲ行フコトヲ得ル領事官ハ第七條乃至第十七條ノ規定ニ從ヒ訴訟事件並非訟事件ニ關スル事務及登記事務ヲ行フ

第七條 前條ノ事務ニ關シテハ領事官ハ法令、條約及慣例ニ牴觸セサル範圍ニ於テ地方裁判所及區裁

判所ノ職務ヲ行フ

第八條 領事官ハ重罪ノ公判ヲ爲スコトヲ得ス

輕罪ノ裁判ニ付テハ豫審ヲ須非ス

第九條 領事官ノ豫審ヲ爲シタル重罪ノ公判ハ長崎地方裁判所ノ管轄ス

第十條 領事官ノ管轄ニ屬スル刑事ニ關シ國交上必要アルトキハ外務大臣ハ其ノ事件ヲ管轄スヘカラスルコトヲ領事官ニ命シ且被告人ヲ內國ノ監獄ニ移送セシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ司法大臣ハ其ノ事件地方裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノナルトキハ長崎控訴院檢察事ヲシテ裁判管轄指定ノ申請ヲ其ノ控訴院ニ爲サシメ其ノ事件區裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノナルトキハ長崎地方裁判所檢察事ヲシテ裁判管轄指定ノ申請ヲ其ノ地方裁判所ニ爲サシムヘシ

第十一條 前條ノ申請及裁判ニ關シテハ刑事訴訟法第三十三條ノ規定ヲ準用ス

第十二條 地方裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ領事官ノ爲シタル裁判ニ對スル控訴又ハ抗告ハ長崎控訴院之ヲ管轄ス

區裁判所ノ權限ニ屬スル事項ニ關シ領事官ノ爲シタル裁判ニ對スル控訴又ハ抗告ハ長崎地方裁判所之ヲ管轄ス

第十三條 領事官ハ領事館員又ハ警察官ヲシテ檢察事又ハ裁判所書記ノ職務ヲ行ハシムヘシ

裁判所書記ノ職務ヲ行ハシムヘキ前項ノ官吏ヲキトキハ領事官ハ其ノ管轄區域內ニ在留スル帝國臣民中ヨリ選任シテ臨時其ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第五類 領事官ノ職務



第十四條 領事官ハ領事館員又ハ警察官吏ヲシテ執達吏ノ職務ヲ行ハシムヘシ  
 前項ノ職務ヲ行フ者ハ自己ノ責任ヲ以テ自ら適當ト認ムル者ニ臨時其ノ職務ノ執行ヲ委任スルコト  
 フ得

第十五條 法令ノ規定ニ依ルモノヲ除ク外訴訟代理人又ハ辯護人タラントスル者ハ領事官ノ許可ヲ受  
 クルコトヲ要ス

第十六條 通常裁判所ニ於ケル忌避又ハ回避ニ關スル規定ハ領事官其ノ他本法ニ依リテ職務ヲ行フ者  
 ニハ之ヲ適用セス

第十七條 第十三條及第十四條ニ掲ケタル職務ヲ行フ者ナキトキハ外務大臣ハ同一國內ノ他ノ領事館  
 官吏ヲ派遣シ其ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十八條 領事館ノ設置ナキ地ニ限り命令ノ規定ヲ以テ本法其ノ他ノ法律中領事官ノ取扱フヘキ事項  
 ハ領事官ニアラサル者ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十九條 本法其ノ他ノ法律中單ニ領事又ハ領事官ト稱スルハ名譽領事ニアラサル領事及其ノ代理ヲ  
 謂フ

第二十條 本法施行ノ爲必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十一條 清國並朝鮮國駐在領事裁判規則ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

●領事官職務規則(明治三十三年四月  
 勅令第五百三十三號)

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ領事官職務規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

領事官職務規則

第一條 領事官ハ外務大臣ノ指揮監督及其ノ駐在國ニ在ル帝國公使ノ監督ヲ受クヘシ  
 外務大臣カ特定ノ事項ニ關シテ領事官ヲ指揮スルコトヲ其ノ駐在國ニ在ル帝國公使ニ命シタル  
 トキハ領事官ハ該事項ニ關シテ帝國公使ノ指揮ヲ受クヘシ

第二條 領事官ハ駐在國ニ於テ日本臣民ヲ保護シ帝國ノ通商航海ニ關スル利益ヲ維持増進スヘシ

第三條 領事官ハ駐在國カ條約又ハ國際法ニ依リ帝國ニ對シテ負フ所ノ義務ノ遵守ヲ視察シ日本  
 臣民ノ利益又ハ帝國ノ通商航海ニ關スル利益ヲ害セラレタル場合ニ於テハ駐在國ノ官廳ニ對シ  
 テ必要ナル措置ヲ爲スヘシ

第四條 領事官ハ其ノ駐在國ニ在ル帝國軍艦ニ對シテ必要ナル補助ヲ爲スヘシ

第五條 領事官ハ其ノ管轄區域内ニ在ル日本臣民ノ救助又ハ取締ノ爲必要ナル措置ヲ爲スヘシ

領事官ハ救助又ハ取締ノ爲必要ナルトキハ日本臣民ノ送還ヲ日本船舶ノ船長ニ命スルコトヲ得

第六條 領事官ハ其ノ管轄區域内ニ於テ日本臣民ノ財産又ハ遺産ノ保護管理ニ必要ナル措置ヲ爲  
 スヘシ

第七條 領事官ハ其ノ管轄區域内ニ在ル日本臣民ノ名簿ヲ備ヘ居住及身分ニ關スル届出ヲ受理シ  
 届出又ハ其ノ他ノ事實ニ依リテ確知シタル日本臣民ノ居住及身分ニ關スル事項ヲ該名簿ニ登錄  
 スヘシ



第八條 領事官ハ其ノ駐在國ニ在ル日本船舶及其ノ船員ニ對シテ必要ナル保護及取締ヲ爲スヘシ  
 第九條 領事官ハ帝國軍艦其ノ他日本船舶ノ乗組員カ脱船シタルトキハ艦長又ハ船長ノ請求ニ因  
 リ脱船者ヲ復役セシムル爲必要ナル措置ヲ爲スヘシ  
 第十條 領事官ハ其ノ駐在國ノ官廳又ハ公署ノ發シタル文書ノ真正ヲ證明スルコトヲ得  
 第十一條 領事官ハ日本臣民又ハ外國人ノ申請ニ因リ其ノ職務上取扱フヘキ事項及職務ヲ行フ際  
 知リ得タル事實ノ認證ヲ爲スコトヲ得  
 第十二條 領事官ハ日本臣民ニ旅券ヲ付與シ又ハ其ノ旅券ヲ查證スルコトヲ得  
 領事官ハ日本ニ旅行セムトスル外國人ノ申請ニ因リ其ノ旅券ヲ查證スルコトヲ得  
 第十三條 領事官ハ其ノ管轄區域内ニ於テ日本臣民又ハ外國人ノ申請ニ因リ日本臣民又ハ日本ニ  
 在ル土地ニ關スル法律行爲ニ付公證ヲ爲スコトヲ得  
 第十四條 領事官ハ日本臣民相互ノ間又ハ日本臣民及外國人ノ間ニ生シタル民事上ノ爭論ニ關シ  
 和解ヲ爲サシメ又ハ仲裁ヲ爲スコトヲ得  
 第十五條 條約又ハ慣例ニ依リ領事裁判權ヲ行フコトヲ得ル領事官ハ其ノ所管事務ニ付命令ヲ發  
 スルコトヲ得  
 領事官ノ發スル命令ニハ十回以内ノ罰金又ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得  
 領事官ノ發スル命令ノ公布ニ關スル規程ハ領事官之ヲ定ム  
 第十六條 外務大臣ハ領事官ノ發シタル命令ニシテ條約若ハ法令ニ違反シ又ハ公益ニ害アリト認

領事官ノ  
 收及出  
 川關スル  
 規程ハ第  
 六類ニ載  
 三十三  
 年四月  
 三十一  
 日ヨリ  
 施行ス

ムルトキハ其ノ取消ヲ命スルコトヲ得  
 領事官ノ駐在國ニ在ル帝國公使ハ領事官ノ發シタル命令ニシテ條約若ハ法令ニ違反シ又ハ公益  
 ニ害アリト認ムルトキハ其ノ施行停止ヲ命スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ外  
 務大臣ニ報告スルコトヲ要ス  
 前項ノ施行停止ハ三箇月ヲ經過スルトキハ其ノ效ヲ失フ  
 第十七條 領事官ハ其ノ職務上必要アルトキハ帝國軍艦ニ幫助ヲ求ムルコトヲ得  
 第十八條 領事官ハ其ノ職務上ノ事項ニ付外務大臣ニ報告スヘシ  
 第十九條 領事官ハ豫メ外務大臣ノ認可ヲ得タル場合ノ外帝國ノ他ノ官廳又ハ公署ト直接通信ヲ  
 爲スコトヲ得ス  
 第二十條 領事官ノ徵收スル手数料及出張費用ニ關スル規程ハ外務大臣之ヲ定ム  
 第二十一條 名譽領事及貿易事務官ハ外務大臣ノ訓令ニ基キ本令其ノ他領事官ノ職務ニ關スル法  
 令及條約ノ規定ニ準依シテ其ノ職務ヲ行フ  
 第二十二條 本令ノ施行期日ハ外務大臣之ヲ定ム  
 第二十三條 日本帝國領事規則及明治二十三年勅令第二百五十八號ハ之ヲ廢止ス

●内務省

沿革畧記

明治六年十一月第三十七號ヲ以テ内務省ヲ置ク  
 ●七年一月第一號布告ヲ以テ内務省中勸業、警保、戸籍  
 廳、土木、地理ノ六寮及測量司ヲ置キ同時ニ大藏省中戸籍、土木、鑛務三寮及租稅寮中地理、勸農ノ事務



教育部中音樂歌舞事務工部省中測量司法官中警備隊事務省へ引渡シム○同年三月十日内務省職制事務章程  
ヲ定メ職員ヲ大少輔大少丞正權大少少輔ト爲シ新ニ記帳庶務ノ二課ヲ設ク○同年四月廿二日土木寮ノ事務章程  
部省ニ屬ス○同年四月第三十二號通ヲ以テ土木寮測量司中職員改置シ等級ヲ定ム○同年七月十二日琉球藩事務内務  
省ニ於テ管理セシム○同年四月第三十二號通ヲ以テ測量司ヲシ事務地理寮ニ屬ス是日正院地誌課ヲ地理寮ニ併ス○  
同年四月第三十三號通ヲ以テ地理寮ニ大少技監、大中小技師、技手、技生ノ職員ヲ置キ等級ヲ定ム○同年三月第三十  
八號通ヲ以テ正院警備隊事務局長ヲ改稱シ内務省ニ屬ス○同年六月二十八日文部省管理衛生、准刻ノ事務内務省  
ニ屬ス是日ヨリ七月三月文部省第十二號通ヲ以テ東京ニ司職場ヲ立テ八月二日同省第二號通ヲ以テ京都ニ司職  
場ヲ立テ同省第六號通ヲ以テ大阪司職場ヲ立ツ○同年九月第六十六號通ヲ以テ地理寮中地誌課ヲ正院修史  
局ニ併ス○同年四月第七十七號通ヲ以テ内務省中圖書寮ヲ改置シ○同年十二月第十七號通ヲ以テ内務省職制  
事務章程ヲ改定シ新ニ權大少丞ヲ置ク○九年二月廿四日文部省管理衛生事務内務省ニ屬ス○同年四月第五十二號  
布告ヲ以テ戸籍、警備、圖書ノ三寮ヲ廢ス○同年五月内務省乙第五十二號通ヲ以テ内局、戶籍、警備、圖書、博物、庶務  
ノ六局及會計往復ノ二課ヲ改置ス○同年四月内務省乙第六十二號通ヲ以テ勸業局ヲ改置シ○同年六月内務省乙第七十二  
號通ヲ以テ司職場試驗掛名稱條ヲ定ム○同年八月内務省乙第九十三號通ヲ以テ授產局ヲ改置シ○同年四月内務省甲第  
三十二號通ヲ以テ京都司職場ヲ廢シ權長崎ニ司職場ヲ置ク○十年一月第三號布告ヲ以テ教育部省并東京警備隊ヲ廢  
シ事務内務省ニ屬ス○同年四月第三十二號通ヲ以テ各省中階級及正權大少丞以下ヲ廢シ更ニ正權大少丞官屬一等ヨリ十  
等ニ再ルテ置ク○同年四月第四號通ヲ以テ文官四等以下等級ヲ改メ官等六十七等三分シ○同年四月内務省乙第二號通  
ヲ以テ勸業廳警備地理土木監督會計ノ七局ヲ置キ警備局及職課ヲ廢ス○同年四月第十五號通ヲ以テ内務省中二大  
警備正權中警備、大中少警備、警備、巡查及警備課ヲ置キ官等ヲ定ム○同年十一月第八十三號通ヲ以テ警備ノ官等  
ヲ改正ス○同年十二月第九十八號通ヲ以テ修正前地誌課ヲ地理局ニ併ス○十一月第二號通ヲ以テ内務省中階級事務  
務官内務省ニ屬ス○同年四月第十二號通ヲ以テ大警備以下二等警備ヲ廢シ一等二等警備ヲ置キ正權大中少警備、警備  
及警備課ヲ置ク○同年九月内務省乙第五十九號通ヲ以テ取調局ヲ置ク○同年十二月内務省乙第九十三號通ヲ以テ勸  
業局ヲ廢ス○十二年四月第十七號通ヲ以テ集治監東京官城ニ置キ職司、書記、守長、監守ノ職員ヲ設ケ官等ヲ定メ内  
務省ニ直管セシム○同年四月第十九號通ヲ以テ集治監二三等守長以下ヲ附置ス○同年五月内務省乙第二十一號通ヲ以

山林局ヲ置ク○同年七月内務省乙第三十八號通ヲ以テ監獄局ヲ置ク○同年同月二十二日無號通ヲ以テ内務省中二  
中央衛生會ヲ開ク○同年十二月第五十四號通ヲ以テ中央衛生會職制並事務章程ヲ定ム○十三年三月第二十一號通ヲ以テ  
内務省中階級警備、警備官四等、警備官下等、警備官ハ階級官等ヲ定ム○同年四月第二十四號通ヲ以テ警備官職制ヲ定  
ム○同年十二月第六十號通ヲ以テ職制事務章程ヲ改定シ内局及警備、勸業、地理、戶籍、社寺、土木、衛生、圖書、博  
物、會計、庶務、取調、山林、監獄ノ十五局ト爲シ職司、大少輔、正權大少丞、監守、守長、監守ノ職員ヲ設ケ官等ヲ改メ  
ヲ以テ内務省中階級警備、警備局ヲ警備局ト改稱ス○同年三月第十四號通ヲ以テ集治監職制以下官等條給ヲ改メ  
鄂ヲ第十九號通ヲ以テ職制ヲ定ム○同年四月第二十六號通ヲ以テ山林、博物、勸業、警備ノ四局農商務省ニ管理ニ屬ス  
○同年六月第五十九號通ヲ以テ地租改正事務局長ヲ廢シ農務大藏省ノ管理ニ附ス○同年七月内務省甲第六號通ヲ以テ  
長崎司職場ヲ廢ス○同年八月第七十號通ヲ以テ石狩國樺戸郡ニ集治監ヲ置キ内務省ニ直管セシム○同年十一月第九十  
四號通ヲ以テ從前ノ事務章程ヲ廢シ警備事務章程通則ヲ定ム○十五年六月第三十六號通ヲ以テ石狩國空知郡ニ集治監  
ヲ設置シ以テ内務省ニ直管セシム○十六年三月第十二號通ヲ以テ筑前國三池郡ニ集治監ヲ設ク○同年五月第二十號  
ヲ以テ警備隊ヲ定ム○十七年一月内務省乙第五號通ヲ以テ取調局、乙第六號通ヲ以テ登記法取調局ヲ廢ス○同年七月第六十  
二號通ヲ以テ兵庫ニ假留監ヲ設置シ内務省ノ直轄トシ東京官城三池ノ三集治監中二假留監ヲ附置ス○同年同月第六十  
三號通ヲ以テ假留監ニ正副典獄、看守長、看守ヲ置キ官等條給及日職制ハ十四年第十四號通ニ依ラシム  
○十八年十二月第七十號通ヲ以テ各省補ノ職制ヲ廢シ更ニ内務大臣ヲ置ク○十九年二月第二號通ヲ以テ官制ヲ定ム  
○同年七月内務省令第十二號ヲ以テ土木監警備官制ヲ定ム○同年十一月勸令第六十九號ヲ以テ中央衛生會官制ヲ  
定ム○同年十二月勸令第七十七號ヲ以テ集治監官制ヲ定ム○二十年五月勸令第十七號ヲ以テ衛生試驗所官制ヲ定ム○  
同年八月勸令第四十一號ヲ以テ氣象警備所條例ヲ定メ之ヲ監督セシム○同年十二月勸令第六十八號ヲ以テ遊神宮使  
廳官制ヲ定ム○二十一年勸令第八十一號ヲ以テ氣象警備所條例ノ事務ヲ文部省ニ屬ス○二十二年五月勸令第六十  
二號ヲ以テ警備隊試驗委員組織限ヲ定ム○二十三年三月勸令第四十九號ヲ以テ臨時建築局ヲ廢シ北事務内務省  
土木局ニ屬ス○同年六月勸令第八十八號ヲ以テ内務省官制ヲ改正ス○同年八月勸令第五十三號ヲ以テ集治監假留監官  
制ヲ改正ス○同年同月勸令第五十四號ヲ以テ中央衛生會官制ヲ改正ス○同年同月勸令第五十五號ヲ以テ衛生試驗  
所官制ヲ改正ス○同年同月勸令第五十六號ヲ以テ中央氣象警備官制ヲ定ム○同年同月勸令第五十七號ヲ以テ土木監  
警備官制ヲ定ム○同年九月勸令第九十八號ヲ以テ鐵道廳内務大臣ノ管轄ニ屬シ是日勸令第九十九號ヲ以テ官制







地方局

警保局

土木局

衛生局

宗教局

第四條ノ二 神社局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル(三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ追加)

一 神宮、官國幣社、府縣鄉村社、招魂社其ノ他總テ神社ニ關スル事項

二 神官及神職ニ關スル事項

第五條 地方局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 議員選舉ニ關スル事項

二 府縣會、府縣經濟其ノ他總テ府縣行政ニ關スル事項

三 郡會、郡經濟其ノ他總テ郡ノ行政ニ關スル事項

四 市町村會、公共組合會及市町村公共組合ノ經濟其ノ他總テ市町村公共組合ノ行政ニ關スル事項

五 (三十三年勅令第百九十二號ヲ以テ本號削除)

六 賑恤及救濟ニ關スル事項

七 府縣立以下ノ貧院、盲啞院、瘋癲院及育兒院其ノ他慈善ノ用ニ供スル營造物ニ關スル事項

八 徵兵及徵發ニ關スル事項

九 北海道ニ於ケル林野、官設鐵道及拓殖ニ關スル事項其ノ他北海道ニ關スル事項ニシテ他局ノ所

掌ニ屬セサルモノ(三十六年勅令第百二十號ヲ以テ本號追加)

第六條 警保局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル(三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ第三號中ヲ改正ス)

一 行政警察ニ關スル事項

二 高等警察ニ關スル事項

三 圖書出版及著作權ニ關スル事項

第七條 土木局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 本省直轄ノ土木工事ニ關スル事項

二 府縣經營ノ土木工事其ノ他公共ノ土木工事ニ關スル事項

三 直轄工費及府縣工費補助ノ調査ニ關スル事項

四 水面埋立ニ關スル事項

五 土地收用ニ關スル事項

第八條 衛生局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 傳染病及地方病ノ豫防、種痘其ノ他總テ公衆衛生ニ關スル事項

二 檢疫停船ニ關スル事項

三 醫師及藥劑師ノ業務並藥品賣藥取締ニ關スル事項

四 衛生會及地方病院ニ關スル事項



第九條 宗教局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル(三十三年勅令第百六十三號ヲ以テ改正)

- 一 神佛各派、寺院、宗教ノ用ニ供スル堂宇其ノ他總テ宗教ニ關スル事項
- 二 僧侶及教師ニ關スル事項

第十條 (三十三年勅令第百六十六號ヲ以テ削除)

第十一條 (同上)

第十二條 內務省ニ專任技師五人ヲ置ク内一人ヲ勅任トス

內務省ニ專任技師十三人ヲ置ク(三十五年勅令第六十二號ヲ以テ定員ヲ改正ス)

內務省屬ハ百六十七人ヲ以テ定員トス(同上)

附 則

第十三條 本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス

臺灣事務局官制及明治二十七年勅令第六十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

● 土木監督署官制(明治二十七年七月勅令第八十六號)

朕土木監督署官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

土木監督署官制

第一條 地方土木事業監督ノ爲メ府縣ヲ分畫シテ七土木監督區トス其ノ區域左ノ如シ

第一區 東京市 神奈川縣 埼玉縣 群馬縣 千葉縣 茨城縣 栃木縣 山梨縣

第二區 宮城縣 福島縣 巖手縣 青森縣 山形縣 秋田縣

第三區 新潟縣 長野縣 石川縣 富山縣

第四區 三重縣 愛知縣 靜岡縣 岐阜縣 福井縣

第五區 京都府 大阪府 兵庫縣 奈良縣 滋賀縣 和歌山縣 德島縣 高知縣

第六區 鳥取縣 島根縣 岡山縣 廣島縣 山口縣 香川縣 愛媛縣

第七區 長崎縣 福岡縣 大分縣 佐賀縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣 沖繩縣

第二條 各土木監督區ニ土木監督署ヲ置ク其ノ位置ハ內務大臣之ヲ定ム

第三條 各土木監督署ニ左ノ職員ヲ置ク  
署長  
技師

第五類 土木監督官制



技手

書記

第四條 署長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ署務ヲ管理シ所屬職員ヲ指揮ス  
 第五條 署長ハ區内地方ノ土木事業ヲ監視シ利害得失ヲ查覈シ内務大臣ニ報告ス  
 第六條 署長ハ第一條ニ記載シタル事務ノ外内務大臣ノ命ヲ承ケ内務省直轄ノ土木事業ヲ計畫シ及其ノ施行ヲ管理ス

第七條 技師ハ各署ヲ通シ二十一人ヲ以テ定員トシ内四人以内ヲ勅任トス署長ノ指揮ヲ承ケ署務ヲ分掌シ並第六條ノ事務ヲ補助ス(三十一年勅令第二百六十號三十三年勅令第六十號ヲ以テ改正)

第八條 技手ハ各署ヲ通シ二十三人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ工務ニ従事ス(三十五年勅令第六十號ヲ以テ定員改正)

第九條 書記ハ判任トシ各署ヲ通シ十八人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス(同上)

附則

第十一條 本令ハ明治二十七年十月一日ヨリ施行ス

●臨時土木工事ニ關スル職員明治二十七年七月勅令第八十五號  
 朕内務省直轄臨時土木工事施行ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

内務省直轄ノ臨時土木工事ヲ施行セシムル爲メ土木監督署ニ臨時左ノ職員ヲ置ク(三十五年勅令第六十號ヲ以テ定員改正)

技師 二十四人

技手 八十九人

書記 二十三人 判任

本令ハ明治二十七年十月一日ヨリ施行ス

●臨時建築職員ヲ置ク明治二十六年十月勅令第二百二十八號  
 朕臨時建築職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時建築ノ事務ヲ掌理セシムル爲内務省ニ左ノ職員ヲ置キ土木局ニ屬セシム(三十一年勅令第二百六十三號ヲ以テ定員改正)

技師 一人

技手 五人

附則

本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

●河川道路港灣調査ニ關スル職員明治二十七年七月勅令第八十四號

朕河川道路港灣調査ニ關スル職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

河川道路及港灣ニ關スル事業ノ臨時調査ヲ爲サシムル爲メ内務省及土木監督署ニ臨時左ノ職員ヲ置ク

第五節 臨時土木工事ニ關スル職員 臨時建築職員ヲ置ク 河川道路港灣調査ニ關スル職員



内務省

技師 一人(三十二年勅令第二百六十一號ヲ以テ二八ナ一人ニ改ム)

土木監督署

技師 七人(三十三年勅令第六十一號ヲ以テ定員ヲ改正ス)

技手 二十一人(同上)

本令ハ明治二十七年十月一日ヨリ施行ス

●警察監獄學校官制(明治三十二年四月勅令第五百五十四號)

朕警察監獄學校官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警察監獄學校官制

第一條 警察監獄學校ニ左ノ職員ヲ置ク(三十五年勅令第六十四號ヲ以テ通譯官ヲ削ル)

校長 一人 勅任

教授 專任六人 奏任(三十五年勅令第六十號ヲ以テ定員改正)

幹事 專任一人 奏任

書記 專任四人 判任

第二條 校長ハ内務次官ヲシテ之ヲ兼ネシメ内務大臣ノ指推ヲ承ケ校中一切ノ事務ヲ統理ス

第三條 教授ハ校長ノ指推ヲ承ケ教授ノ事ヲ掌ル

第四條 幹事ハ校長ノ指推ヲ承ケ庶務會計及生徒監督ノ事ヲ掌ル

第四條ノ二(三十五年勅令第六十四號ヲ以テ削除)

第五條 書記ハ上官ノ指推ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

●古社寺保存會規則(明治三十年十月勅令第四百六號)

朕古社寺保存會規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

古社寺保存會規則

第一條 古社寺保存會ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ古社寺保存法第二條及第四條ニ關スル事項其ノ他古社寺保存ニ關スル事項ニ付内務大臣ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ開申ス

第二條 古社寺保存會ハ古社寺保存ニ關スル事項ニ付内務大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 古社寺保存會ハ會務整理ノ爲規則ヲ議定シ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第四條 古社寺保存會ハ會長一人委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 特別ノ事件ヲ審議スル爲ニ臨時必要ノ場合ニ於テハ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第六條 會長ハ勅任官ヲ以テ之ニ充ツ

第七條 委員及臨時委員ハ官吏又ハ學識若ハ經驗アル者ノ中ニ就キ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第八條 古社寺保存會ニ幹事一人ヲ置キ内務省高等官ヲ以テ之ニ充ツ



幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス

第九條 會長ハ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ會議ノ決議ヲ内務大臣ニ具申ス

第十條 會長事故アルトキハ内務大臣ノ指名シタル委員ヲシテ事務ヲ代理セシム

第十一條 會長委員及幹事ニハ一箇年五百圓以内臨時委員ニハ事件ノ輕重ニ應シ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十二條 古社寺保存會ニ書記ヲ置ク會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

書記ハ内務屬ヲ以テ之ニ充ツ

第十三條 書記ニハ事務ノ繁閑ニ應シ相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十四條 内務大臣ニ於テ必要ト認ムルトキハ委員又ハ其ノ他ノ者ヲシテ古社寺保存ニ關スル諸般ノ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

●神宮司廳官制明治二十九年十一月

朕神宮司廳官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

神宮司廳官制

第一條 神宮司廳ニ左ノ職員ヲ置ク(三十二年勅令第三百七十六號ヲ以テ條中改正)

- 祭主 一人
- 大宮司 一人

少宮司 一人

禰宜 十人

權禰宜 二十人

宮掌 四十人

第二條 祭主ハ親任トシ皇族ヲ以テ之ニ任ス大御手代トシテ奉齋シ祭事ヲ管理ス但公爵ヲ以テ之ニ任スルコトアルヘシ

第三條 大宮司ハ勅任又ハ奏任トス祭主ノ命ヲ承ケテ祭祀ニ奉仕シ醇辭ヲ奏讀シ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケテ所部ノ職員ヲ統督シ廳中ノ事務ヲ管理ス(三十二年勅令第三百七十六號ヲ以テ條中改正)

第四條 大宮司ハ廳中ノ事務ヲ分掌スル爲メ課ヲ置キ及庶務ノ細則ヲ設クルコトヲ得(上)

第五條 少宮司ハ奏任トス大宮司ヲ佐ケテ祭祀ニ奉仕シ廳中ノ事務ヲ整理ス(上)

大宮司事故アルトキハ少宮司其ノ事務ヲ代理ス

第六條 禰宜ハ奏任トス大宮司又ハ少宮司ノ命ヲ承ケテ神前ニ祇候シ神膳ヲ供徹シ殿内一切ノ事ヲ辨シ臨時祈禱祓除ヲ爲シ廳中ノ庶務ニ従事ス(上)

第七條 (三十二年勅令第三百七十六號ヲ以テ條中改正)

第八條 權禰宜ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケテ神儀ヲ調理シ其ノ他祭事及庶務ニ従事ス(三十二年勅令第三百七十六號ヲ以テ條中改正)

第九條 宮掌ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケテ祭事及雜務ニ従事ス



第十條 大宮司ハ所屬判任官、神部署職員中判任待遇ノ官ニ在ル者及神宮衛士長衛士副長衛士ノ進退及懲戒ヲ内務大臣ニ具狀ス(三十三年勅令第三百七十六號ヲ以テ本條追加)

●造神宮使應官制明治三十一年六月勅令第三百二號

朕造神宮使應官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 造神宮使應ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ神宮造營及神宮裝束調進ノ事ヲ掌ル

第二條 造神宮使應ニ左ノ職員ヲ置ク

使

副使

主事

技師

屬

技手

第三條 使ハ一人神宮祭主ヲ以テ之ニ充ツ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ應中ノ事務ヲ管理ス

第四條 使ハ所屬ノ官吏ヲ統督シ奏任官ノ進退ハ内務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第五條 副使ハ一人内務省神祉局長ヲ以テ之ニ充ツ使ノ事務ヲ佐ケ使事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス(三十三年勅令第三百六十四號ヲ以テ神祉局長ヲ神祉局長ニ改ム)

第六條 主事ハ二人奏任トス使、副使ノ命ヲ承ケ應中ノ事務ヲ分掌ス

第七條 技師ハ使、副使ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第八條 屬ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第九條 技手ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ從事ス

●神部署官制明治三十三年九月勅令第三百七十四號  
朕神部署官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

神部署官制

第一條 神部署ハ神宮大宮司ノ監督ニ屬シ大麻、曆ノ製造頒布及臣民ノ奉養ニ關スル事ヲ掌ル

第二條 神部署ニ左ノ職員ヲ置ク

署長

神部

神部補

第三條 署長ハ一切ノ署務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 神部ハ署長ノ命ヲ承ケ署務ヲ分掌ス

第五條 神部補ハ署長及神部ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條 神部署ニ參務員ヲ置クコトヲ得



參務員ハ奏任待遇トス署長ノ諮詢ニ應シ署務ニ關シ意見ヲ開申ス

第七條 署長事故アルトキハ上席神部其ノ事務ヲ代理ス

第八條 署長、神部及參務員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命シ神部補ハ内務大臣之ヲ命ス

附則

本令ハ明治三十三年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

●神宮衛士長衛士副長衛士ニ關スル件明治三十一年八月勅令第百八十九號

朕神宮衛士長衛士副長衛士ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布ヒシム

第一條 神宮ニ左ノ職員ヲ置キ神宮警衛ノ事ヲ掌ラシム

衛士長 一人

衛士副長 二人

衛士 四十人(三十三年勅令第九十一號ヲ以テ三十人ヲ四十人ニ改ム)

第二條 衛士長ハ大宮司ノ命ヲ承ケ部下ノ職員ヲ監督シ警衛事務ヲ掌理ス(三十三年勅令第三百七十七號ヲ以テ條中改正)

第三條 衛士副長ハ衛士長ヲ佐ケ衛士長故隙アルトキハ上席ノ衛士副長其ノ職務ヲ代理ス

第四條 衛士ハ上官ノ指揮ヲ承ケ警衛ニ従事ス

第五條 衛士長衛士副長及衛士ハ判任官ノ待遇トス

第六條 衛士長衛士副長及衛士ハ俸給、服制其ノ他服務ニ關スル細則ハ内務大臣之ヲ定ム

第七條 明治二十七年勅令第五號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●官國幣社職制明治三十五年三月勅令第二十七號

朕官國幣社職制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官國幣社職制

第一條 官幣社及國幣社ニ左ノ神職ヲ置ク

宮司 一人

權宮司 一人但シ官幣大社熱田神宮及官幣大社出雲大社ニ限ル

禰宜 一人

主典

宮掌但シ官幣大社熱田神宮ニ限ル

主典及宮掌ノ定員ハ内務大臣之ヲ定ム

第二條 宮司ハ内務大臣及地方長官ノ指揮監督ヲ承ケ國家ノ宗祀ニ奉仕シ祭儀ヲ司トリ庶務ヲ管理ス

第三條 權宮司ハ宮司ヲ輔佐シ祭儀及庶務ニ従事ス

第四條 禰宜ハ宮司及權宮司ノ指揮監督ヲ承ケ祭儀及庶務ニ従事ス

第五條 主典及宮掌ハ上職ノ指揮監督ヲ承ケ祭儀及庶務ニ従事ス

第六條 宮司事故アルトキハ權宮司ヲ置ケル神社ニ在リテハ權宮司之ヲ代理シ其ノ他ノ神社ニ在リテ



ハ禰宜之ヲ代理ス

第七條 宮司及權宮司ハ奏任待遇トシ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命シ禰宜、主典及宮掌ハ判任待遇トシ地方長官之ヲ命ス

第八條 官國幣社神職ニハ俸給ヲ支給ス但シ宮司及權宮司ニ在リテハ内務大臣、禰宜、主典及宮掌ニ在リテハ地方長官ニ於テ名譽職ト爲スコトヲ妨ケス

第九條 官國幣社神職ノ服務、俸給及旅費ニ關スル規程ハ内務大臣之ヲ定ム

第十條 本令中内務大臣及地方長官ニ屬スル職權ハ別格官幣社靖國神社ノ神職ニ關シテハ陸軍大臣及海軍大臣之ヲ行フ

第十一條 本令中内務大臣及地方長官ニ屬スル職權ハ臺灣ニ於テハ臺灣總督之ヲ行フ但シ第七條ノ奏請ニ關シテハ内務大臣ヲ經由スヘシ

附則

第十二條 本令ハ明治三十五年二月二十日ヨリ之ヲ施行ス

第十三條 本令施行ノ際現ニ官國幣社神職タル者ハ本令ニ依リ各其ノ職ニ命セラレタルモノト看做ス

●官國幣社主典及宮掌ノ定員等ニ關スル件明治三十五年二月

官國幣社主典及宮掌ノ定員等ニ關スル件左ノ通相定ム

第一條 主典ノ定員ハ一社ニ付二八以内トス

第二條 主典現在ノ定員一人ノ神社ニ於テ二人ニ増員セントスルトキハ地方長官ハ理由ヲ具シ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第三條 特別ノ事由アル神社ニ付テハ地方長官ハ内務大臣ノ認可ヲ得テ第一條ノ定員外ニ主典ヲ増置スルコトヲ得

第四條 主典ノ現員三人以上ノ神社ニ在テハ當分ノ内現員ノ儘存置スルコトヲ得但退職其ノ他ノ事故ニ依リ減員スルトキハ定員ニ

復スルマテ補命スルコトヲ得ス

前條ニ依リ補命ニ付テハ前項俱書ノ規定ヲ適用スル限ニ在ラス

第五條 熱田神宮宮掌ノ定員ハ五人以内トス

第六條 履員ハ官司之ヲ命免ス

第七條 禰宜、主典、宮掌ノ補免及死亡ハ其ノ時時地方長官ヨリ内務大臣ニ報告スヘシ

第八條 第二條及第四條ノ事項ニ關シ本規則施行前内務大臣ノ認可ヲ得タルモノハ本規則施行ノ爲メ其ノ效力ヲ失フコトナシ

第九條 本規則ハ明治三十五年二月二十日ヨリ之ヲ施行ス

●中央衛生會官制明治二十八年四月

朕中央衛生會官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

中央衛生會官制

第一條 中央衛生會ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ公衆衛生獸畜衛生ニ關スル事項ニ就キ各省大臣ノ諮詢ニ應ジ意見ヲ開中ス

第二條 中央衛生會ハ各省主管事務中衛生ニ關スル事項ニ就テハ其ノ主任大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 中央衛生會ハ衛生各般ノ事項ニ關シ警視總監北海道廳長官及府縣知事ニ尋問ヲ要シ或ハ臨時會員ヲ各地方ニ派遣シテ調査檢察ヲ要スト認ムルトキハ之ヲ内務大臣ニ具申スヘシ

第四條 中央衛生會ハ議事整理ノ爲メ規則ヲ議定シ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五條 中央衛生會ハ會長一人委員二十八人以内ヲ以テ之ヲ組織ス(三十二年勅令第二百九十六號ヲ以テ本條改正三十五年勅令第二百三十號ヲ以テ第二項ルヲ削)



委員ハ宮内省侍醫局長内務省「參典官」内務省地方局長内務省警保局長内務省土木局長内務省衛生局長内務省高等官二名傳染病研究所長陸軍省醫務局長陸軍獸醫監一名海軍省醫務局長東京帝國大學醫科大學長農商務省農務局長農商務省高等官一名及醫師藥學者衛生工學者若干人ヲ以テ之ニ充ツ

第六條 特別ノ事件ヲ審議スル爲ニ臨時必要ノ場合ニ於テハ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スルコトヲ得

第七條 會長及委員中内務省高等官陸軍獸醫監農商務省高等官醫師藥學者衛生工學者及臨時委員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス(三十二年勅令第二百九十六號ヲ以テ改正三十五年勅令第二百三十號ヲ以テ條中改正)

第八條 醫師藥學者衛生工學者ヨリ出テタル委員ノ任期ハ四箇年トス但シ滿期後再任セラルルコトヲ得

第九條 會長ハ會務ヲ總管シ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ其ノ決議ヲ内務大臣及主任大臣ニ具申ス

第十條 中央衛生會ニ幹事一人ヲ置ク

幹事ハ内務省高等官ヲ以テ之ニ充テ會長ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス(三十五年勅令第二百三十一號ヲ以テ項中改正)

第十一條 (三十五年勅令第二百三十一號ヲ以テ第一項ヲ削リ)會長委員及幹事ニハ一箇年五百圓以内臨時委員ニハ事件ノ輕重ニ應シ其ノ都度相當ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第十二條 中央衛生會ニ書記ヲ置キ内務屬ヲ以テ之ニ充ツ

書記ハ上官ノ指揮ヲ受ケ議事ノ筆記及庶務ニ從事ス

第十三條 書記ニハ一箇年百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

第十四條 従前ノ委員ハ別ニ辭令ヲ用非ス本令施行ノ日ヨリ其ノ任ヲ解カレタルモノトス

●衛生試驗所官制明治二十三年八月勅令第百五十五號  
 朕衛生試驗所官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

衛生試驗所官制

第一條 東京大阪横濱ニ衛生試驗所ヲ置ク

第二條 衛生試驗所ハ内務大臣ノ管轄ニ屬シ衛生上試驗ニ關スル事項ヲ取扱フ所トス

第三條 各衛生試驗所ニ左ノ職員ヲ置ク(二十六年勅令第百三十一號ヲ以テ技師試驗ノ項ヲ削除ス)

所長

技師

技手

書記

第四條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所内ノ事務ヲ管理シ所屬職員ヲ統督ス

第五條 技師ハ奏任トシ專任九人ヲ以テ定員トス各試驗所ニ分屬シ所長ノ指揮ヲ承ケ試驗ノ事務ヲ分掌ス(二十六年勅令第百三十一號ヲ以テ第二項ヲ削リ二十九年勅令第百六十一號三十二年勅令第六十三號ヲ以テ條中改正)

第六條 技手ハ判任トシ專任二十人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ所務ニ從事ス(二十九年勅令第百六十一號三十五)



年勅令第六十三號  
ヲ以テ條中改正

第七條 書記ハ判任トシ專任六人ヲ以テ定員トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス(三十五年勅令第六十三號ヲ以テ定員ヲ改ム)

第八條 各試験所事務ノ分課ハ内務大臣之ヲ定ム

●傳染病研究所官制 明治三十二年三月  
勅令第九十三號

朕傳染病研究所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

傳染病研究所官制

第一條 東京ニ傳染病研究所ヲ置ク

第二條 傳染病研究所ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ傳染病其ノ他病原ノ檢索、豫防、治療方法ノ研究、豫  
防消毒治療材料ノ檢査及傳染病研究方法ノ講習ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 傳染病研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

- 所長 一人 勅任
- 部長 專任三人 奏任
- 助手 專任八人 判任
- 書記 專任四人 判任

前項定員ノ外二十人以内ノ無給助手ヲ置クコトヲ得

第四條 所長ハ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ部下ヲ監督ス

三十二年勅令第九十三號  
傳染病研究所官制  
トシテ之ヲ以テ  
スルコトヲ得

- 第五條 部長ハ所長ノ命ヲ承ケ研究檢査講習ヲ掌ル
- 第六條 助手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ研究檢査講習ニ従事ス
- 第七條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 第八條 傳染病研究所事務ノ分課ハ内務大臣之ヲ定ム

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

●血清藥院官制 明治二十九年三月  
勅令第四百四號

朕血清藥院官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

血清藥院官制

第一條 東京ニ血清藥院ヲ置ク

第二條 血清藥院ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ血清製造ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 血清藥院ニ左ノ職員ヲ置ク

- 院長 一人
- 技師 專任二人(三十二年勅令第二百六十六號ヲ以テ二人ヲ一人ニ改ム)  
三十四年勅令第七十號ヲ以テ一人ヲ二人ニ改ム
- 助手 專任六人(三十四年勅令第七十號ヲ以テ五人ヲ六人ニ改ム)
- 書記 專任二人(三十二年勅令第二百六十六號ヲ以テ三人ヲ二人ニ改ム)

第五類 傳染病研究所官制 血清藥院官制



第四條 院長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ院内ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ監督ス

第五條 技師ハ院長ノ指揮ヲ承ケ製造ニ關スル事務ヲ分掌ス

第六條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ製造ニ關スル事務ニ從事ス

第七條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第八條 血清藥院事務ノ分課ハ内務大臣之ヲ定ム

●血清藥院ニ顧問ヲ置ク明治二十九年五月勅令第二百二十四號

血清藥院ニ顧問ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

血清藥院ニ顧問一人ヲ置キ手當ヲ給スルコトヲ得(三十二年勅令第五十八號ヲ以テ改正)

顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

●痘苗製造所官制明治二十九年三月勅令第五百五號

朕痘苗製造所官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

痘苗製造所官制

第一條 東京ニ痘苗製造所ヲ置ク(三十五年勅令第二百六十九號ヲ以テ大阪ノ二字ヲ削ル)

第二條 痘苗製造所ハ内務大臣ノ管理ニ屬シ痘苗製造ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 痘苗製造所ニ左ノ職員ヲ置ク(三十五年勅令第二百六十九號ヲ以テ改正)

所長 一人

技師 專任二人

技手 專任十人

書記 專任三人

第四條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ内務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所内ノ事務ヲ掌理シ部下ノ職員ヲ監督

第五條 技師ハ所長ノ命ヲ承ケ製造ニ關スル事ヲ掌ル(三十五年勅令第二百六十九號ヲ以テ修正)

第六條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ製造ニ關スル事ニ從フ

第七條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第八條 痘苗製造所事務ノ分課ハ内務大臣之ヲ定ム

●痘苗製造所ニ顧問ヲ置ク明治三十二年四月勅令第三百二十九號

朕痘苗製造所ニ顧問ヲ置クノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 痘苗製造所ニ顧問一人ヲ置クコトヲ得

第二條 顧問ハ所務ニ關シ意見ヲ開陳ス

第三條 顧問ハ高等官ヲ以テ之ニ充ツ

第五類 血清藥院ニ顧問ヲ置ク 痘苗製造所官制 痘苗製造所ニ顧問ヲ置ク



第四條 顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス  
第五條 顧問ニハ手當ヲ給セズ

●日本藥局方調査會官制明治三十三年三月  
勅令第六十號  
朕日本藥局方調査會官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

日本藥局方調査會官制

- 第一條 日本藥局方調査會ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ日本藥局方改正ニ關スル事項ヲ調査ス
- 第二條 日本藥局方調査會ハ會長一人委員十六人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第三條 會長及委員ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
- 第四條 日本藥局方調査會ニ幹事一人ヲ置ク  
幹事ハ内務省高等官ヲ以テ之ニ充ツ
- 第五條 日本藥局方調査會ニ主査委員ヲ置クコトヲ得  
主査委員ハ内務大臣委員中ヨリ之ヲ命ス
- 第六條 會長ハ會務及議事ヲ整理シ其ノ決議ヲ内務大臣ニ具申ス  
會長事故アルトキハ内務大臣ノ指名シタル委員其ノ事務ヲ代理ス  
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
- 第七條 日本藥局方調査會ハ議事規則ヲ議定シ内務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

- 第八條 會長、委員及幹事ニハ一箇年五百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得
- 第九條 日本藥局方調査會ニ書記ヲ置キ内務省判任官ヲ以テ之ニ充ツ  
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
- 第十條 書記ニハ一箇年百圓以内ノ手當ヲ給スルコトヲ得

附則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●臨時「ベスト」豫防事務局官制明治三十三年十二月  
勅令第四百十號  
朕臨時「ベスト」豫防事務局官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臨時「ベスト」豫防事務局官制

- 第一條 大阪府大阪市ニ臨時「ベスト」豫防事務局ヲ置ク
- 第二條 臨時「ベスト」豫防事務局ハ内務大臣ノ監督ニ屬シ大阪府管内ノ「ベスト」豫防ニ關スル事務ヲ掌理ス
- 第三條 臨時「ベスト」豫防事務局ニ左ノ職員ヲ置ク
 

長	官	一人
次	長	一人
事務	官	一人

第五類 日本藥局方調査會官制 臨時「ベスト」豫防事務局官制



検査醫

六十人

書記

六十人

監吏

六十八

前項ノ外臨時「ベスト」豫防事務局ニ四人以内ノ顧問ヲ置クコトヲ得

第四條 長官ハ大阪府知事、次長ハ大阪府警部長ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 事務官ハ内務省高等官及大阪府高等官ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第六條 検査醫、書記及監吏ハ長官之ヲ命ス

第七條 顧問ハ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第八條 官吏ニシテ臨時「ベスト」豫防事務局職員タル者ハ各其ノ本官ノ待遇ヲ受ク

第九條 長官ハ局中一切ノ事務ヲ總理シ所部ノ職員ヲ指揮監督ス

長官事故アルトキハ次長其ノ職務ヲ代理ス

第十條 次長ハ長官ノ命ヲ承ケ部下ノ職員ヲ監督シ局務ヲ掌理ス

第十一條 事務官ハ上官ノ命ヲ承ケ事務ヲ分掌ス

第十二條 検査醫ハ上官ノ指揮ヲ承ケ検査事務ニ従事ス

第十三條 書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

第十四條 監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ清潔方法消毒方法ノ施行及鼠族驅除ニ關スル事務ヲ監察ス

第十五條 顧問ハ「ベスト」豫防事務局ニ關シ長官ノ諮詢ニ應ジ並長官ニ意見ヲ具申ス

第十六條 臨時「ベスト」豫防事務局ニ六部ヲ置キ事務ヲ分掌スルコト左ノ如シ

第一部 細菌検査ニ關スル件

第二部 健康診断死體検案ニ關スル件

第三部 清潔方法消毒方法施行ニ關スル件

第四部 豫防接種ニ關スル件

第五部 鼠族驅除ニ關スル件

第六部 庶務會計其ノ他他部ニ屬セサル件

第十七條 大阪府以外ノ地ニ在職ノ官吏ニシテ臨時「ベスト」豫防事務局職員ヲ兼スル者ニハ一箇月百

二十四以内其ノ他ノ職員ニハ一箇年七百圓以内ノ手当ヲ給スルコトヲ得但シ検査醫、書記及監吏ニ

支給スヘキ手当ハ内務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 明治三十三年勅令第九十七號ニ依リ大阪府ニ設置シタル検査官ハ「ベスト」豫防事務局ニ關シ

テハ臨時「ベスト」豫防事務局長官ノ指揮監督ニ屬セシム

●臨時検査職員(明治三十一年十月)

臨時検査職員ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

検査豫防ニ關スル事務ヲ掌理セシムル爲メ内務省ニ臨時左ノ職員ヲ置キ衛生局ニ屬セシム(三十三年勅令

號ヲ以テ職

員定員改正)



事務官 專任三人 奏任  
技手 專任二人 (三十五年勅令第六十五號)  
附則 (以定員改定官制)

本令ハ明治三十一年十一月二日ヨリ施行ス  
臨時檢疫局官制ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

大藏省 附會計事務局 會計官

沿革略記 明治元年二月五日會計事務局ヲ置キ職制ヲ定メテ、正權、正權列事等ヲ置ク。同年二月某日御會所ヲ大阪ニ設ク。○同年四月二十一日會計事務局ヲ廢シ會計官ヲ建テ租納、用度、購運、警備、稅銀、貨幣、民政ノ七司ヲ管ス。木管ニ正副知官事、正權列事等ヲ置キ七司ニ知官事、正權列事等ヲ置ク。○同年四月二十五日商法司ヲ置ク。○同年五月某日租稅司ヲ置ク。○同年七月二十五日御會所ヲ改テ大阪山司ト稱ス。○同年八月八日民政廳列所ヲ改テ會計局トス。○二年二月五日會計司ヲ廢シ更ニ貨幣政所ヲ京、攝及兵庫、長崎ニ置ク。○同年三月十五日商法司ヲ廢ス。○同年五月八日會計官職制改定例ヲ定メ會計局及監督、租稅、出納、用度、警備、鑛山ノ六司ヲ管ス。○同年五月十六日外國官所應通商司ヲ會計官ニ屬ス。○同年六月二十一日通商司ヲ東京、大阪及神奈川ニ置ク。○同年七月八日會計官ヲ廢シ大藏省ヲ置キ警察及出納、用度、租稅、監督、通商、鑛山、營繕ノ七司ヲ管シ本省ニ屬、大少輔、正權大少丞、大少輔等ヲ置キ警察正權頭正權充等各司ニ正權正、正權佐等ヲ置キ職制ヲ定ム。○同年八月十一日租稅、監督、通商、鑛山ノ四司ヲ民部省ニ屬ス。○同年十月十二日民部大藏兩省ヲ合併ス。○同年十月二十日官位相當ヲ改正ス。○三年五月二十日大阪理學所ヲ管ス。○同年七月十日民部大藏兩省ヲ分テ大藏省ニ出納、用度、警備、租稅、監督ノ六司及度最衛改正掛ヲ管セシム。○同年八月二十二日民部省通商司ヲ大藏省ニ屬ス。○同年八月九日民部大藏兩省ノ事務ヲ劃定ス。是日會計司ヲ廢シ爲ス。○同年八月十八日大阪理學所ヲ大學ニ屬ス。○四年七月五日通商司ヲ廢ス。○同年八月二十七日監督、川度、租稅ノ三司ヲ廢シ更ニ租稅及勸業、統計、紙幣、戶籍、購運ノ五司ヲ置ク。○同年八月十日監督、租稅、戶籍、營繕、

第五期 大藏省沿革

紙幣、出納、統計、檢査、肥後、購運、勸業ノ十一寮及正算司ヲ改置シ本省ニ屬、大少輔、大少丞等ヲ置キ警察正權頭等ヲ置キ司ニ正權正等ヲ置キ官制等級ヲ定ム。○同年十月二十三日勸業寮ヲ勸業寮ト改稱ス。○同年十月二十八日各開港場市場ノ稅務ヲ管ス。○同年九月十四日勸業事務司ヲ法務司ニ屬ス。○同年十月八日營繕寮ヲ廢シ工部省土木寮ト合併シ大藏省ノ管轄トス。○五年五月十六日號ヲ以テ官等ヲ改定シ省中ニ監督、租稅、戶籍、土木、紙幣、出納、統計、檢査、紙幣、勸業、購運、十一寮及正算司ヲ置ク。○同年九月八日號ヲ以テ購運寮ヲ二等寮ト定ム。○同年十月第三十三號ヲ以テ勸業寮及正算司ヲ廢ス。○六年一月八日稅關監督寮ヲ廢シ監督寮ト定ム。○同年二月七日土木寮職員等級ヲ定ム。○同年七月第二十四號ヲ以テ國營寮ヲ置キ二等寮ト爲ス。○同年八月第三十二號ヲ以テ郵便取扱役ヲ置キ等級ヲ定ム。○同年十月第三十八號ヲ以テ肥後寮ヲ二等寮ト定ム。○同年十一月第三十九號ヲ以テ郵便取扱役ヲ置キ等級ヲ加フ。○同年十二月五日海軍省所轄橫濱製鐵所ヲ大藏省ニ管轄セシム。○七年一月九日戶籍、土木、購運ノ三寮及租稅寮中地理、勸業ノ事務內務省ニ屬ス。○同年十月十九日稅關監督寮ヲ廢シ監督寮ト定ム。○同年五月十三日築地稅關及品川尋問所ノ事務ヲ管ス。○同年八月十八日稅關司長副司長ヲ改テ稅關長副長トス。○同年七月五日築地稅關ヲ橫濱稅關出張所ト改稱シ品川尋問所ヲ監更出張所ト改稱ス。○同年九月十五日租稅寮出張所ヲ東京萬世橋ニ設ク。○八年三月第三十八號ヲ以テ內務大藏兩省間ニ地租改正事務局ヲ置ク。○同年八月十日稅關監督出張所ヲ長州下ノ關ニ置ク。○同年十月十五日關稅事務ヲ東京府ニ屬ス。○同年九月第十六號ヲ以テ正院印書局ヲ紙幣寮ニ屬ス。○同年十月第十七號ヲ以テ陸前國仙臺前關小倉へ出張寮出張所ヲ置ク。○同年十月第六十五號ヲ以テ遊擊寮技術等級ヲ定メ大中少技監、技師、技手、技士ト爲ス。○同年十月二十一日新設稅關事務ヲ廢ス。○同年十月十四日在渡國夷港稅關事務ヲ管シ新潟稅關出張所ト稱ス。○同年十月二十五日大阪紙幣寮出張所ヲ廢ス。○同年十月三十一日抄紙局ヲ王子村ニ設ク。○同年十月第八十八號ヲ以テ出納寮ニ納金局ヲ置ク。○同年十一月二十五日大藏省職制改定事務寮ヲ改定ス。○同年十二月第二十七號ヲ以テ職制改定事務寮ヲ改定シ租稅、監督、紙幣、出納、檢査、國債、肥後、紙幣、ノ八寮ニ支分シ職員ヲ列、大少輔、正權大少丞、正權大中少丞ト爲ス。○九年九月九十一號ヲ以テ小倉出張寮出張所ヲ長崎へ移ス。○十年一月第三號ヲ以テ各省中階寮及正權大少丞以下ヲ廢シ更ニ正權大少丞肥田寮一等ヨリ十等ニ五ツヲ置ク。○同年十月第四號ヲ以テ文官四等以下等級ヲ改メ官等十七等ニ分ツ。○同年十月大藏省乙第四號ヲ以テ租稅、關稅、檢査、國債、出納、監督、紙幣、營繕、能線ノ九局ヲ置ク。○同年二月大藏省乙第六號ヲ以テ大阪仙臺長崎出張寮出張所ヲ出納局出張



所ト改稱ス○同年同月第二十三號達ヲ以テ造幣局技術等級ヲ定ム○同年五月第四十三號達ヲ以テ監更九等監更補四等  
ヲ置キ官等月俸ヲ定ム○十一月六月大藏省乙第二十七號達ヲ以テ常平局ヲ置ク○同年十月第四十四號達ヲ以テ鑑定役  
ヲ置キ官等月俸ヲ定ム○同年十二月第四十九號達ヲ以テ一等監更補以下ノ官等ヲ改正ス○同年同月大藏省乙第六十五  
號達ヲ以テ紙幣局ヲ改テ印刷局トス○同年同月内務省乙第九十三號達ヲ以テ内務省管理勸業事務大藏省乙第六十二  
年一月大藏省乙第一號達ヲ以テ商務局ヲ置ク○同年十二月大藏省乙第三十七號達ヲ以テ大阪府島根本名古畑ノ五ヶ所  
ニ租稅局出張所ヲ置ク○同年同月大藏省乙第四十六號達ヲ以テ鹽業課ヲ廢シ更ニ書記課案ノ二局ヲ置ク○十三年三月  
第十八號達ヲ以テ檢査局ヲ廢ス○同年同月大藏省乙第二十五號達ヲ以テ精算局ヲ置ク○同年五月大藏省乙第二十二號達ヲ  
以テ銀行課ヲ廢シ銀行局ヲ置ク○同年六月大藏省乙第二十五號達ヲ以テ精算局ヲ調査局ト改稱ス○同年十二月第六十  
號達ヲ以テ大藏省職制事務章程ヲ改正シ書記、鹽業、租稅、國債、出納、造幣、印刷、常平、配給、調查、銀行ノ十三  
局ト爲ス○十四年四月第二十六號達ヲ以テ商務局農商務省ノ管理ニ屬ス○同年五月第四十三號達ヲ以テ仙臺長崎出納  
局出張所ヲ廢ス○同年六月第五十七號達ヲ以テ會世局ヲ置ク○同年同月第五十九號達ヲ以テ地租改正事務局ヲ廢シ殘  
務大藏省ノ管理ニ屬ス○同年七月大藏省乙第十二號達ヲ以テ國債局大阪支局ヲ廢ス○同年八月第七十五號達ヲ以テ租  
稅局出張所ヲ東京大阪名古屋廣島熊本仙臺ノ外更ニ二十四ヶ所ヲ増置ス○同年十一月第九十四號達ヲ以テ從前ノ事務章  
程ヲ廢シ鹽務事務章程通則ヲ定ム○十五年五月大藏省第十二號達ヲ以テ租稅局出張所ヲ東京箱崎町ニ増置ス○同年同  
月第三十號達ヲ以テ技術等級ヲ更定ス○同年十一月大藏省第四十三號達ヲ以テ常平局ヲ廢シ庶務局ヲ置ク○十六年三  
月大藏省第十號達ヲ以テ東京箱崎町租稅局出張所ヲ廢ス○同年五月第二十四號達ヲ以テ福井租稅局出張所ヲ金澤ニ移  
シ名稱ヲ改メ盛岡、青森、兩出張所ヲ廢シ更ニ四ヶ所ニ増置ス○十七年五月八日大藏省號外達ヲ以テ庶務局ヲ廢ス○同  
年同月二十日主稅官ヲ置キ職制ヲ定メ監更監更補ヲ廢シ大藏省第三十二號達ヲ以テ主稅局ヲ置キ租稅關稅兩局並各地  
租稅局出張所ヲ廢ス○同年六月第五十八號達ヲ以テ鑑定役ヲ主稅鑑定役ト改稱シ主稅鑑定見習ト改稱ス○十八年  
十二月第六十九號達ヲ以テ各省租稅制ヲ廢シ更ニ大藏大臣ヲ置ク○十九年一月第一號達ヲ以テ三池、佐渡、生野嶺山  
ノ事務大藏省ニ屬ス○同年同月大藏省第三號達ヲ以テ宿務及金庫局ヲ置キ鹽業局ヲ主計局ト改稱ス○同年二月勸令第  
二號ヲ以テ官制ヲ定ム○同年三月勸令第七號ヲ以テ稅關官制ヲ定ム○同年四月勸令第十七號ヲ以テ造幣局印刷局官制  
ヲ定ム○同年同月勸令第六號ヲ以テ三池、佐渡、生野ノ三嶺山官制ヲ定ム○二十二年十二月勸令第六十號ヲ以テ造  
幣局官制ヲ改正ス○同年同月勸令第七十號ヲ以テ稅關鑑定官定更ノ官等俸給ヲ定ム○二十二年三月勸令第十三號ヲ

以テ佐渡生野兩嶺山官制ヲ廢ス○二十三年六月勸令第六號ヲ以テ大藏省官制ヲ改正ス○同年七月勸令第四百四十二號  
ヲ以テ造幣局官制ヲ改正ス○同年七月勸令第四百四十一號ヲ以テ印刷局官制ヲ改正ス○同年同月勸令第四百四十二號ヲ以  
テ稅關官制ヲ改正ス○同年九月勸令第二百四號ヲ以テ稅關管轄區域ヲ定ム○二十四年七月勸令第八十九號ヲ以テ大藏  
省官制ヲ改正ス○二十六年十一月勸令第十三號ヲ以テ貨幣制度調查會規則ヲ定ム○同年同月勸令第三百三十五號ヲ以テ  
大藏省官制ヲ改正ス○同年同月勸令第三百三十六號ヲ以テ造幣局官制ヲ改正ス○同年同月勸令第三百三十七號ヲ以テ印刷  
局官制ヲ改正ス○同年同月勸令第三百三十八號ヲ以テ稅關官制ヲ改正ス○同年同月勸令第三百三十九號ヲ以テ稅關出張所  
ヲ定ム○同年同月勸令第四百十號ヲ以テ廣島嶺山官制ヲ定ム○二十八年十一月勸令第六十二號ヲ以テ貨幣制度調查  
會規則ヲ廢止ス○二十九年十月勸令第三百三十七號ヲ以テ稅務管理局官制ヲ制定ス○同年同月勸令第三百四十六號ヲ  
以テ稅務管理局稅務課及管轄區域ヲ定ム○三十年四月勸令第二十號ヲ以テ大藏省官制ヲ改正ス○同年同月勸令第四百  
二十一號ヲ以テ鹽業課事務官制ヲ制定ス○同年六月勸令第七十八號ヲ以テ鹽業課事務官制ニ見習ヲ置ク○同年同月  
勸令第二百二號ヲ以テ稅關官制ヲ改正ス○同年同月勸令第二百六號ヲ以テ稅關出張所ノ關稅支署及監視課ト改ム○三  
十一年七月勸令第四百四十四號ヲ以テ臨時沖繩縣土地整理事務局官制ヲ定ム○同年十月勸令第二百五十六號ヲ以テ印刷  
局官制ヲ改正シ内閣ノ所屬ニ移ス○同年同月勸令第二百六十九號ヲ以テ大藏省官制ヲ改正シ二十七年勸令第二百九十四  
號ヲ以テ廣島嶺山官制ヲ農商務省ノ所管ニ移ス○三十二年四月勸令第六十一號ヲ以テ稅關官制ヲ改正ス○同年同月  
勸令第六十九號ヲ以テ稅關支署名稱位置及管轄區域ヲ定ム○二十六年勸令第三百三十九號ヲ廢止ス○同年同月  
勸令第六十九號ヲ以テ專賣局官制ヲ改正シ藥煙草專賣所官制ヲ廢止ス○同年五月勸令第二百七號ヲ以テ臨時稅關工事部官制ヲ  
定ム○同年六月勸令第二百四十九號ヲ以テ關稅課調查委員會規則ヲ定ム○三十三年三月勸令第六十六號ヲ以テ神戶  
稅關長崎稅關ニ臨時職員ヲ増置ス○同年同月勸令第二百二十四號ヲ以テ臨時稅關處分調查局官制ヲ定ム○三十五年十月  
勸令第二百三十七號ヲ以テ專賣局官制ヲ改正ス○同第三十四十一號ヲ以テ稅務監督局官制稅務署官制ヲ制定シ、稅務  
管理官制ヲ廢止ス

大藏省官制明治三十一年十月  
勸令第三百六十九號



朕大藏省官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

大藏省官制

第一條 大藏大臣ハ政府ノ財務ヲ總轄シ會計、出納、租稅、國債、貨幣、預金、保管物及銀行ニ關スル事務ヲ管理シ府縣郡市町村及公共組合ノ財務ヲ監督ス

第二條 大藏省專任參事官ハ二人專任書記官ハ十人ヲ以テ定員トス

第三條 大藏省ニ左ノ三局ヲ置ク

主計局

主稅局

理財局

第四條 主計局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 總豫算總決算ニ關スル事項
- 二 特別會計ノ豫算決算ニ關スル事項
- 三 仕拂豫算ニ關スル事項
- 四 主計簿ノ登記ニ關スル事項
- 五 歲入歲出現計書ノ調製ニ關スル事項
- 六 諸計算書ノ下檢査ニ關スル事項
- 七 出納官吏ノ監督及身元保證ニ關スル事項

八 豫備金支出ニ關スル事項

九 定額繰越ノ承認及定額戻入年度開始前支出ニ關スル事項

十 收入支出ノ科目ニ關スル事項

十一 金錢及物品會計ノ統一ニ關スル事項

十二 府縣郡市町村其ノ他公共組合ノ歲計ニ關スル事項

第五條 主稅局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 國稅ノ賦課徵收ニ關スル事項

二 稅務ノ管理監督ニ關スル事項

三 民有地地種目變換ニ關スル事項

四 土地臺帳ニ關スル事項

五 稅關輸出入ノ調査ニ關スル事項

六 外國貿易ノ船舶及輸出入品ノ監督ニ關スル事項

七 保稅倉庫ニ關スル事項

八 大藏省所管稅外諸收入ニ關スル事項

九 府縣郡市町村其ノ他公共組合ノ諸收入ニ關スル事項

第六條 理財局ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 國資ノ運用出納ニ關スル事項



- 二 國庫ノ出納管理ニ關スル事項
- 三 國庫ノ出納計算書ニ關スル事項
- 四 國債ノ豫備借入償還及利拂ニ關スル事項
- 五 國債簿及國庫簿ノ登記ニ關スル事項
- 六 貨幣ニ關スル事項
- 七 紙幣、國債證券、大藏省證券及借入證券ノ取扱ニ關スル事項
- 八 國債計算書ノ調製ニ關スル事項
- 九 年金恩給及諸祿ノ給與ニ關スル事項
- 十 備荒儲蓄ニ關スル事項
- 十一 金庫ノ監督ニ關スル事項
- 十二 銀行ノ管理監督ニ關スル事項
- 十三 國立銀行紙幣交換基金ニ關スル事項
- 十四 預金保管物及供託物ニ關スル事項
- 十五 地方財務ノ監督ニ關スル事項
- 十六 會社債券ニ關スル事項
- 十七 一般金融ニ關スル事項
- 十八 府縣郡市町村其ノ他公共組合ノ公債ニ關スル事項

第七條 大藏省ニ專任鑑定官二人專任技師一人ヲ置ク奏任トス鑑定官ハ主稅局ニ技師ハ必要ニ依リ總務局其ノ他ニ屬シ其ノ事務ヲ掌ル(三十五年勅令第七十八號ヲ以テ條中改正)

第八條 大藏省ニ專任鑑定官補二人專任技師三人ヲ置ク判任トス鑑定官補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ鑑定ノ事務ニ從事シ技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ建築又ハ電信ノ事務ニ從事ス(三十三年勅令第六十五號ヲ以テ改正三十五年勅令第七十八號ヲ以テ條中改正)

第九條 大藏省專任屬ハ百九十二人ヲ以テ定員トス(三十五年勅令第七十八號ヲ以テ定員改正)

附則

第十條 本令ハ明治三十一年十一月一日ヨリ施行ス  
明治二十七年勅令第九十八號ヲ廢止ス

●造幣局官制明治二十六年十月勅令第三百三十六號

朕造幣局官制ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

造幣局官制

第一條 造幣局ハ大阪市ニ置キ大藏大臣ノ管理ニ屬シ貨幣ノ鑄造、舊貨幣ノ鑄潰、賞牌ノ製造、地金銀ノ精製分析及諸鑛物ノ試験ヲ掌ル

第二條 造幣局ニ左ノ職員ヲ置ク

- 局長 一人 勅任(三十一年勅令第二百七十號ヲ以テ奏任ヲ勅任ニ改ム)
- 技師 四人

三十二年勅令第三百二十八號ヲ以テ造幣局長ハ奏任トス